昭和５９年度

唐古・鍵遺跡

第20次発掘調査概報

黒田大塚古墳

第２次発掘調査概報

1986

田原本町教育委員会

昭和５９年度　唐古・鍵遺跡第２０次発掘調査概報
黒田大塚古墳第　２次発掘調査概報
正誤表

頁	行	誤	正
序	9	５８年度	５９年度
唐古・鍵遺跡			
16	第１０図	暗灰褐色粗	暗灰褐色粗砂
		黒色粘度	黒色粘土
36	29		
	29		
	34		
40	8		
42	4	烈点	列点
	16		
	20		
	25		
44	13		
	32		
49	16		
57	7	占めている	示している
58	15	烈点	列点
68	19	烈点	列点
98	8	数置	数値
108	25	接衷	折衷
108	26	瀬戸内型	瀬戸内系
116	11	接衷	折衷
	11	接衷	折衷
	14	土群	土器群
黒田大塚古墳			
3	第3図	W－スライン	W－Sライン

ＳＫ－215　中層土器出土状況

ＳＫ－215　土層断面状況

SX－101　出土卜骨

序

奈良は全国的にも知られる古代遺跡が数々あり、その質・量とも豊富な内容をもっており、H本有数の遺跡の密集地帯といえましょう。なかでも田原本町は奈良盆地の中央部にあって稲作文化が栄えたところであります。唐古・鍵遺跡も弥生時代の農耕集落として著名な遺跡の一つとなっています。

この唐古・鍵遺跡の調査も８年目をむかえ、第20次を数えることになりました。調査の進展は二千年前のムラの様子を少しづつでありますが明らかにしてきています。

また、黒田大塚古墳は盆地有数の前方後円墳で昭和58年度に引き続いて調査をおこないました。調査では造り出し部分を確認するという成果がみられました。

このような二遺跡について昭和58年度調査分として調査概報をまとめることができました。本書に示した調査成果が、幾分なりとも御活用していただければ幸いに存じます。しかしながら、まだまだ不備、不足な点があるかと思います。御批判、御教示を賜われば幸甚です。

今後も唐古・鍵遺跡をはじめ、田原本町内の遺跡の調査を実施していく予定であります。関係各位の御協力とご指導をお願いする次第であります。

田原本町教育委員会教育長　岩　井　光　男

昭和５９年度

唐古・鍵遺跡

第20次発掘調査概報

例　　言

1．本書は田原本町教育委員会が昭和59年度国庫補助事業として実施した奈良県磯城郡田原本町大字唐古及び鍵所在の唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概報である。

2．発掘調査は橿原考古学研究所の指導を得、現地調査は田原本町教育委員会がおこなった。

3．調査に際しては土地所有者をはじめ、唐古・鍵在住の方々に御理解と御協力を賜った。記して感謝します。

　また、調査補助ならびに整理、概報作製にあたっては、豊岡卓之(現・橿原考古学研究所)、浜崎　悟(現・(財)滋賀県文化財保護協会)、外山秀一(立命館大学大学院)、塚田良道（同志社大学大学院)、桑原久男・井上祐子・石本由野・高　善雄・紀和邦明・吉井秀夫(京都大学)、前川浩一・加田隆志・豆谷和之・廣瀬克彦・久山高史・田村昌弘(奈良大学)、斉藤　岳（明治大学)、梶木義敏(現・県立高取高等学校)、石橋美和(京都女子大学)、吉川　和(京都芸術短大)、河野典子、梅原一恵の諸氏に協力して戴いた。

4．調査及び概報作製にあたっては下記の方々・機関より御教示、御協力を賜った。記して感謝します。

　同志社大学 森　浩一、山口大学 中村友博、橿原考古学研究所 石野博信、泉森　皎、寺沢　薫、松本洋明、田原本中学校 石橋源一郎の諸氏。

5．本概報の執筆は目次に一部明記したが、それ以外については藤田三郎が執筆、編集を担当した。特に、第Ⅲ章においては塚田氏の、第Ⅳ章の統計処理においては桑原氏の御協力を得た。感謝致します。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
Ⅱ．第20次調査の概要
1．調査の全容 …… 3
2．遺構
(1)．層序 …… 3
(2)．弥生時代前期の遺構 …… 6
ＳＫ-204・ＳＫ-205，ＳＫ-207，ＳＫ-215，ＳＤ-201(藤田)
住居跡関連遺構（桑原）
(3)．弥生時代中期の遺構 …… 11
ＳＸ-201，ＳＫ-103，ＳＫ-107，ＳＸ-101，ＳＤ-109
(4)．弥生時代後期の遺構 …… 15
ＳＫ-101，ＳＫ-104
(5)．中世の遺構 …… 18
中世大溝・ＳＤ-07
3．出土遺物
(1)．土器 …… 18
ＳＫ-205出土土器，ＳＫ-215出土土器，ＳＫ-212出土土器，ＳＸ-101下層出土土器，
ＳＸ-101上層出土土器，ＳＫ-103出土土器，ＳＫ-107出土土器，ＳＫ-104出土土器，
(2)．木製品 …… 70
弥生時代前期の木製品，弥生時代中期の木製品
(3)．石器 …… （塚田） …… 72
打製石器―ＳＸ-101出土打製石器
磨製石器―ＳＫ-215出土磨製石器，ＳＸ-101出土磨製石器，包含層中層出土環状
石斧穿孔具
(4)．骨角製品 …… 87
(5)．祭祀遺物 …… 88
ト骨(藤田)，穿孔を有するイノシシ下顎骨（前川・藤田）
Ⅲ．土坑ＳＸ-101の埋積と遺物の廃棄
1．はじめに …… 94
2．ＳＸ-101の土層と出土遺物 …… 94
3．出土遺物の検討 …… 94
4．土坑の埋没と遺物の廃棄 …… 98

Ⅳ．土坑ＳＸ-101出土甕の分析
1．はじめに …… 102
2．方法 …… 102
3．統計的処理 …… 106
4．まとめ …… 113
Ⅴ．ま　と　め
1．遺構 …… 115
2．遺物 …… 115

Ⅰ．はじめに

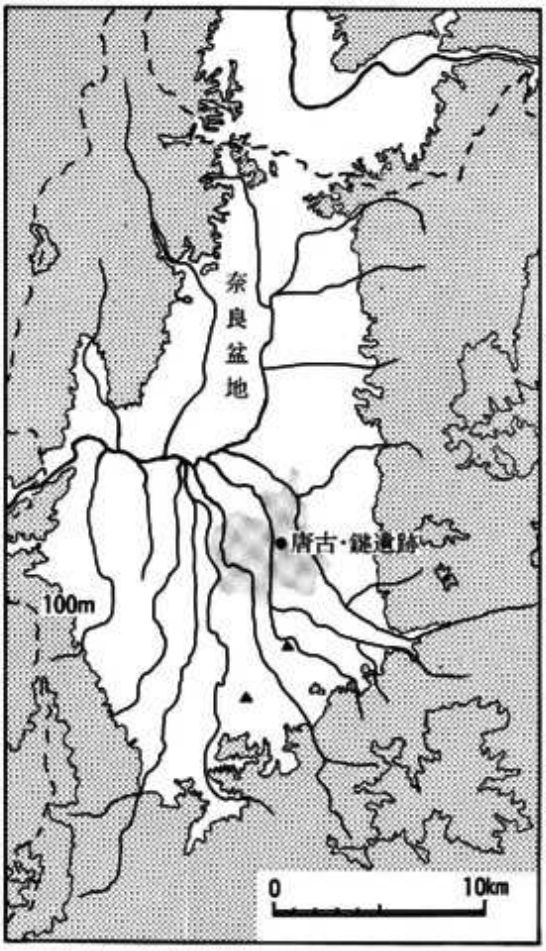
唐古・鍵遺跡の発掘調査は８年に及ぶ継続調査で、本町に調査主体が移管されてからすでに３年目が過ぎた。調査初期においては遺跡の範囲確認を目的とする調査が中心に進められてきたが、ここ２、３年、国道24号線沿いの開発による調査が増加してきている。にもかかわらず、その開発目的が履行されずに発掘後、造成したまま放置されているのが現状といえよう。このような遺跡地への小規模な、なし崩し的な破壊に対して、遺跡全体を見すえた遺跡保護行政を講じる必要にせまられている。

第１表

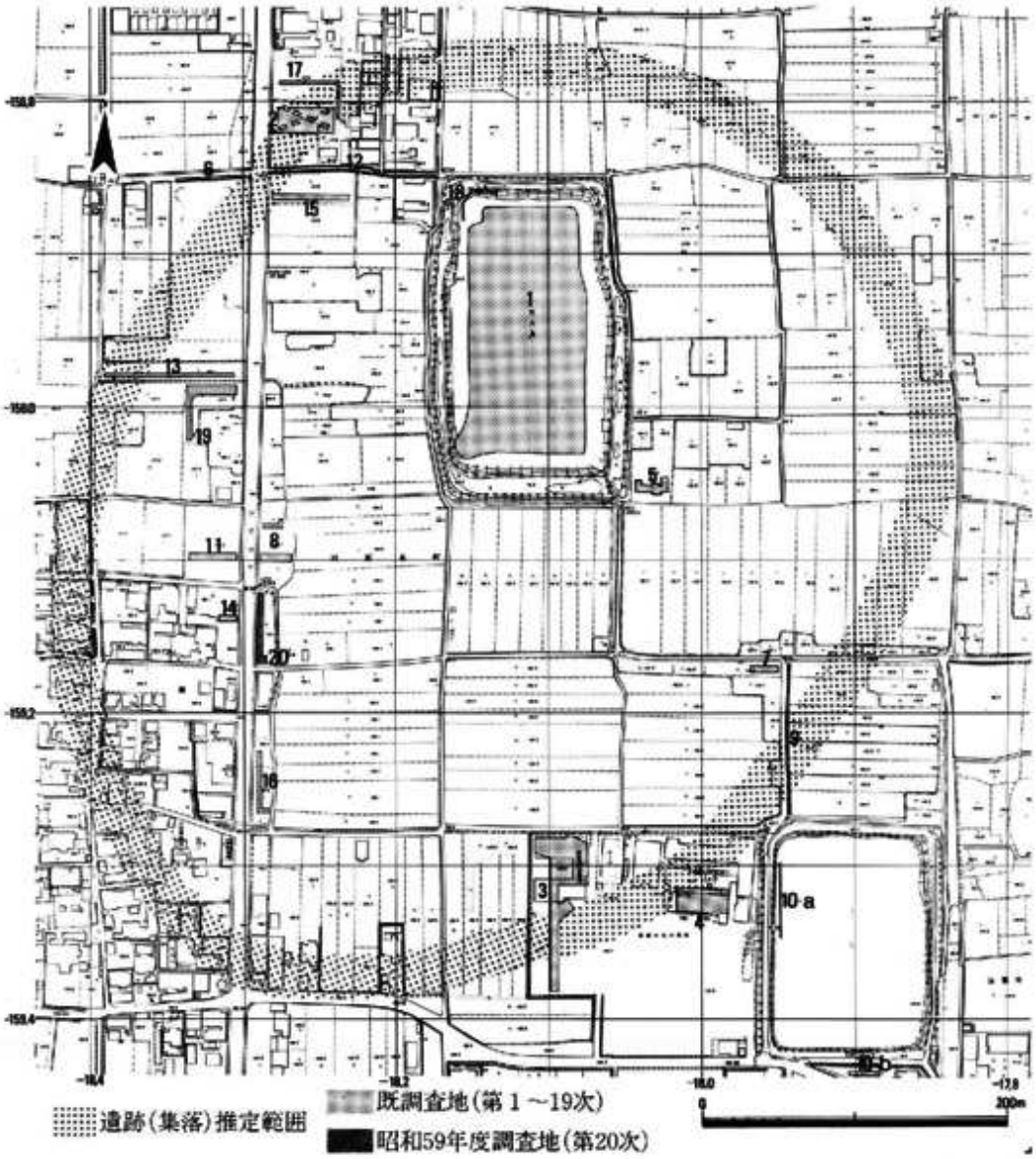
調査次数	所在地	原因	地目	土地所有者	調査期間	調査面積
第20次	鍵302-1 307-1 番地	造成に伴なう擁壁工事	宅地	平井正一	1984.11.28～1985.4.8	150㎡

このような現状にあって、調査は土地所有者や唐古・鍵大字関係者の御協力・御理解によって進展してきた。幸いにも、各調査毎に貴重な発見や新知見が得られる成果をみてきた。これはとりもなおさず、本遺跡を再評価するに充分に足るものであり、唐古・鍵遺跡の重要性を再認識せざるを得ない。

さて、昭和59年度の唐古・鍵遺跡の調査は国道24号線東側の１件である（第１表）。第20次調査地は第８次調査地の南側、第14次調査地の東側で、比較的、ムラの様相が判明している地区である。本地は弥生前期の一つの中心地で、ムラの中でも重要な一地区であることは今までの調査から判明していた。調査では弥生前期から古墳時代、さらに中世におよぶ諸遺構を検出、また、ト骨など祭祀に関連する遺物なども出土し、多大な成果をおさめることができた。



第１図　唐古・鍵遺跡の位置



第2図　唐古・鍵遺跡の範囲と調査地点

Ⅱ．第20次調査の概要

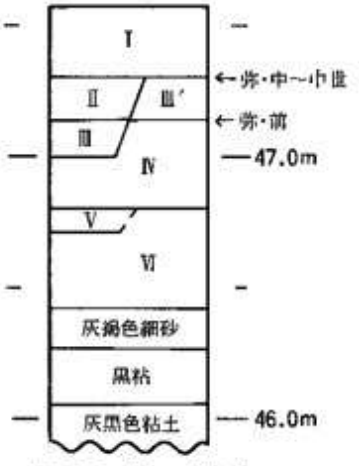
1．調査の全容

本遺跡は唐古・鍵ムラの西部にあたり、第14次調査地の東20m地点である。調査対象地は南北に細長く、さらに1mに及ぶ盛土がなされていた為、廃土処理は困難を極めた。調査はトレンチ調査とし、中世大溝の確認と弥生時代の諸遺構の検出につとめた。トレンチは幅3.0～4.5m、長さ35.0mで、その南端に長さ4.0mの東西トレンチを設け、L字形のトレンチとした。

調査はまず、約1mの盛土を除去し、旧水田面を露出させた。この段階で5m間隔にボーリングステッキをうち、土層サンプルの採集をおこなった。これは今後のボーリングによる予備調査と発掘調査との関連やボーリング調査による環境復元、水田探索を把握する上で参考資料となろう。続いて、機械力によって水田耕土を除去した。この段階で、トレンチ西半には黒色土が露出し、従来の調査地の基本土層とは異なっていることが判明した。これに対し、トレンチ東半部では水田床土層がみられたため、この部分のみ、機械力をもって床土層を除去した。その結果、トレンチ西半分はテラス状に残存する形となったが、これは中世以降、大規模な削平を受けずにいたためで、遺跡内においても最も残存状況の良好なところと考えられた。

水田床土層の除去後、人力による遺構検出作業を開始し、中世及び古墳、弥生時代の諸遺構を調査した。また、遺構の検出状況により、随時、トレンチを拡張した。

調査ではトレンチ全面で遺構を検出し、弥生時代のムラや中世居館の実態を把握するうえで重要な調査となった。また、遺物においても数多くの卜骨が出土し、弥生時代の精神生活を知る上で貴重な資料となった。



第3図　第20次調査
基本土層図

2．遺構

(1)．層序

本調査地における層序は調査の全容において述べたとおり、複雑であるが、基本的には次のようになる。第Ⅰ層・旧水田耕土層、第Ⅱ層・水田床土層、第Ⅲ層・茶褐色土層、第Ⅳ層・暗黄褐色粘質土層、第Ⅴ層・黄灰色微砂層、第Ⅵ層・青灰色微砂層である。

トレンチ西半においては第Ⅱ層・第Ⅲ層が欠如しており、第Ⅱ層に標高から対応する層として第Ⅲ′層・暗茶灰色粘質土層がある。この層では弥生中・後期から現代に至る遺構を検出している。さらに第Ⅳ層では弥生前期の諸遺構を検出している。しかし、大半の遺構は重複関係をもっており、詳細な所属時期の検討を要する。

第2表　第20次調査主要土坑一覧表

土坑番号	平面形態	断面形態	床面形態	坑底土層	規模(m) 長軸	短軸	深さ	坑底標高	施設物	時期	主要遺物	備考
SK-101	楕円形	二段の逆台形	平坦	粗砂層	2以上	推定1.9	1.0	45.85	なし	弥・V	短頸壺2点	井戸
SK-102	円形	円筒状	皿状	灰黒色粘質土	推定1.0	推定1.0	0.9	46.2	なし	弥		
SK-103	楕円形	上段逆台形下段円筒状	皿状	灰色粘土	1.6	1.3	1.6	45.4	なし	弥・Ⅲ	水差形土器	井戸
SK-104	楕円形	上段 皿状下段円筒状	皿状	粗砂層	2.8	2.0	2.6	44.5	なし	弥・V	上層：土器群 中層：イノシシ下顎骨 短頸壺	井戸
SK-106	楕円形	袋状	平坦	青灰色シルト層	1.8	推定1.5	0.8	46.4	なし	弥・Ⅲ		
SK-107	長方形	二段の逆台形	皿状	青灰色シルト層	2.3	1.4	1.6	45.0	なし	弥・Ⅲ	盗人り上骨 手斧柄、丸鍬未成品、柱材	
SK-113	楕円形	皿状	皿状	灰褐色土	推定1.8	1.6	0.2	47.0	なし	弥・Ⅰ		
SK-115	不整円形	皿状	皿状	暗褐色土	1.7	1.6	0.2	48.0	なし	弥・Ⅲ		
SK-117	楕円形	皿状	皿状	灰褐色砂層	推定1.5	推定1.2	0.3	46.9	なし	弥・Ⅰ		
SX-101	不整楕円形	上段ロート状下段円筒状	平坦	粗砂層	6.5	推定4.8	2.2	44.7	土坑北西側に丸太を柵状に組む	弥・Ⅲ	上部 細頸壺、広口壺鉢、大形高杯	井戸
SX-102	楕円形	逆台形	平坦	暗黄灰色粘質土	2以上	2以上	0.3	47.0	なし	古・後		
SK-203	長方形	逆台形	平坦	灰白色細砂	2以上	推定2.0	0.9	46.0	なし	弥・Ⅰ		
SK-204	方形	逆台形	平坦	灰色細砂	2.7	2.0	0.9	45.9	なし	弥・Ⅰ		
SK-205	長方形	逆台形	平坦	暗青灰色微砂	2以上	推定2.0	1.2	45.7	なし	弥・Ⅰ	カゴ イノシシ下顎骨 編材	木器貯蔵穴
SK-207	不整円形	逆台形	平坦	青灰色粘土	1.7	1.5	1.4	45.5	なし	弥・Ⅰ	牙製垂飾品 ト骨？	
SK-208	長方形	逆台形	平坦 一部テラスを持つ	暗青灰色粘土	2以上	1.9	1.3	45.5	なし	弥・Ⅰ		
SK-209	長方形	逆台形	平坦	暗青灰色粘土	2以上	2.0	1.3	45.6	なし	弥・Ⅰ	彩文土器	
SK-212	方形	逆台形	平坦	青灰色シルト層	2.8	1以上	0.7	46.2	なし	弥・Ⅰ		
SK-213	楕円形	ロート状	不明	不明	2以上	2以上	0.7以上		なし	弥・Ⅰ・Ⅱ		

土坑番号	平面形態	断面形態	床面形態	坑底土層	規模(m) 長軸	短軸	深さ	坑底標高	施設物	時期	主要遺物	備考
SK-214	円形	円筒状	皿状	灰黒粘	0.65	0.65	0.5	46.1	なし	弥		
SK-215	方形	逆台形	平坦	灰黒色粗砂層	2以上	2以上	1.3	45.8	なし	弥・I	中層：土器群 炭化米 ヒ層：縄文時代 未成品	木器貯蔵穴
SK-217	長方形	逆台形	平坦	灰黒色粗砂	2以上	推定 2.3	1.1	46.0	なし	弥・I		
SK-218	方形	逆台形	平坦	淡灰色粗砂	推定 2.0	推定 2.0	0.6	45.5	なし	弥・I		
SK-219	長方形	逆台形	平坦	灰黒色粘土	2以上	推定 1.6	1.0	45.9	なし	弥・I		
SK-220	楕円形	逆台形	平坦	灰黒色粘土	1.9	1.1	0.8	45.8	なし	弥・I		
SX-201	楕円形	二段の逆台形	皿状	黄褐色粗砂層	1.6	1.3	0.5	46.3	底部をうち欠いた甕を直立させる	弥・II	大和型甕	集水遺構

第3表　第20次調査主要溝一覧表

溝番号	規模(m) 幅	深度	溝底標高	走行方向	継続時期(弥生) I	II	III	IV	V	主要遺物	備考
SD-101	0.8	0.1~0.3	47.0—47.0 47.0—46.7	北北東—南南西 西北西—東南東				↔			北北東側で収束
SD-102	0.3	0.06	46.9—46.8	南西—北東							南西側で収束
SD-103	0.3	0.06	47.0—46.8	南南西—北北東							北北東側で収束
SD-106	0.4	0.1	46.9—46.8	西南西—東北東		↔					
SD-107	0.5	0.4	46.6—46.6	北東—南西	↔						
SD-108	0.6	0.4	46.6—46.4	南南東—北北西	↔						北北西側で収束
SD-109	1.4	0.7	46.6—46.3	南西—北東			↔			建築材	北東側で収束
SD-111	0.5	0.1	47.0—47.0	南西—北東	↔						
SD-201	推定 4.5	0.9	46.1—45.9	南東—北西	↔					小皆、平瓶未成品	

なお、第Ⅴ層より下位の層は各々の地点によっても異なっており、均一ではなく、微砂層より細砂・粗砂層に漸移的に変化する地点もみられる。しかし、これらの土層は弥生以前の層であるのでここではあえて記述しない。

(2). 弥生時代前期の遺構

弥生時代前期の遺構はトレンチ全面にわたって検出し、これらには土坑と大溝がある。土坑については2基の土坑が切り合い関係をもっているものが多い。また、遺物ではほとんど無遺物にちかい土坑と豊富な遺物を有する土坑の二種に分類することができる。これらの中で典型的な土坑を中心に報告する。

ＳＫ－204・ＳＫ－205

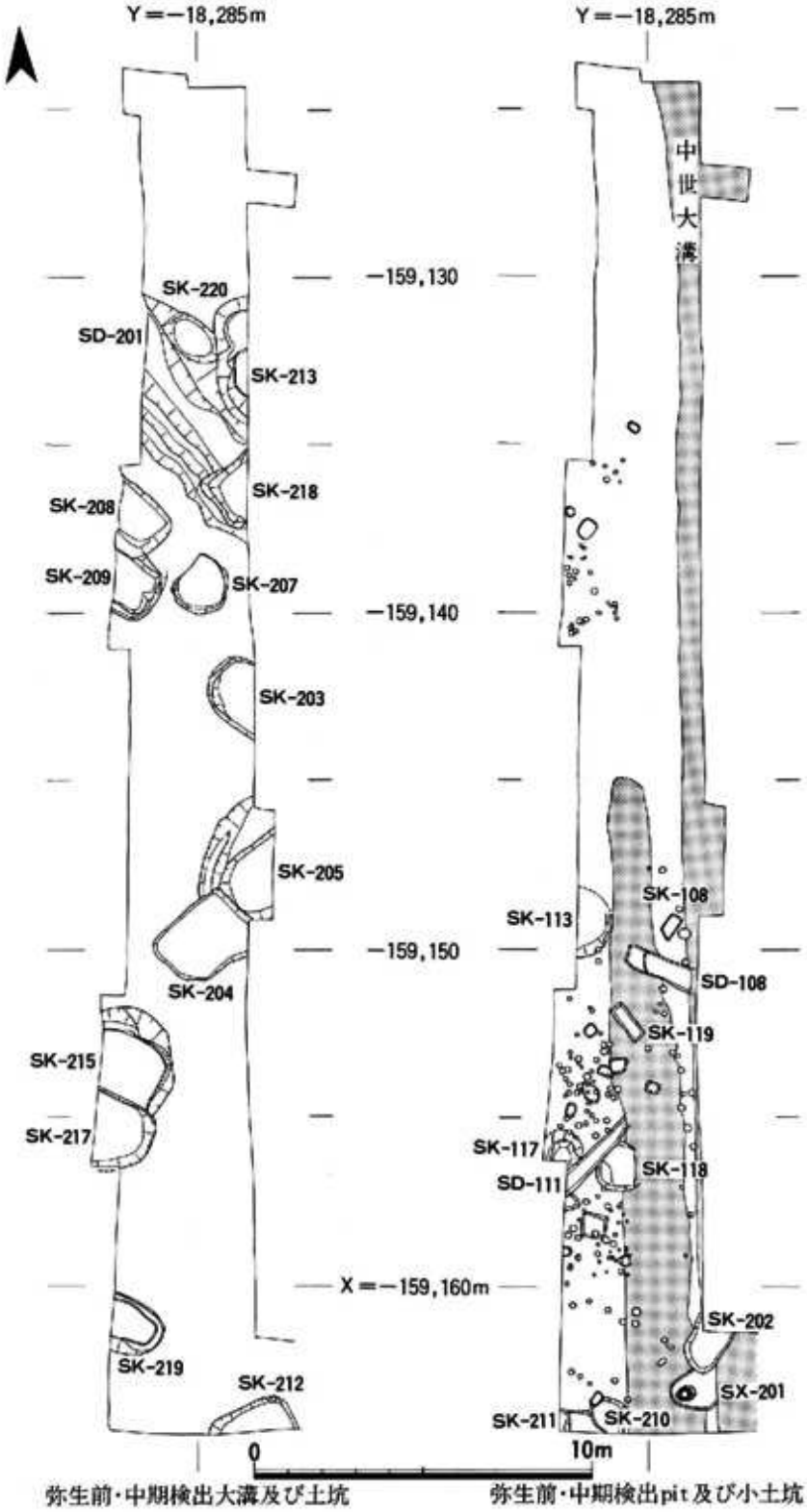
両者ともトレンチのほぼ中央で検出した土坑である。ＳＫ-204は方形プランの土坑で、長軸2.7m、短軸 2.0m、深さ 0.9m を測る土坑である。一側辺は砂層上にあたっている為、土坑の壁面が崩れている。しかし、他の壁面はほぼ垂直に掘削されており、ベースの灰色砂層まで達し、湧水をみる。埋土は青灰色のシルトや黒褐色粘土などでブロック状をなしており、短期間に埋没したと思われる。遺物として木製高杯の破片やカシ材の断片が出土している。時期は第Ⅰ様式である。

ＳＫ-205は前述のＳＫ-204や中世大溝によって切られているため、その全容は不明である。トレンチ東端で検出したため、東側に拡張区(3×1m)を設けたが、規模を確認するまでには至らなかった。平面プランは楕円形と思われ、長軸2.0m 以上、短軸推定2.0m を測る。土坑の断面形態は逆台形を呈し、深さ 1.2m を測る。土坑の底面は青灰色微砂層まで達している。土坑床面直上よりカシの原材が一点出土している。また、土坑中位の粘土層からは弭形角製品や切断された鹿角、イノシシなどの獣骨、ミニチュア土器、ヒョウタンなどが一括して出土した。本土坑の時期は第Ⅰ様式である。土坑の性格は本来、木器貯蔵用の穴と考えられるが、機能が失われた段階に廃棄穴になったと思われる。

ＳＫ－207

本土坑はトレンチの北方で検出した不整円形の土坑である。長軸1.7m、短軸1.5m、深さ1.4m を測るが、ＳＫ-104やＳＤ-101・109、中世大溝によって上面及び測面を失っている。本土坑の埋土は青灰色シルトや黒色粘土のブロックによって構成されており、短期間の埋没と考えられる。遺物はほとんど含まないが、土坑の下位でカシ材の破片や鍬の舟形隆起部破片などが出土している。また、土坑中位ではイノシシの牙製の垂飾品やシカの肩甲骨などを検出している。本土坑の時期は第Ⅰ様式で、木器貯蔵用の穴と考えられる。

本土坑の周辺にはＳＫ-203・208・209・218 などの第Ⅰ様式の土坑が存在するが、これらもＳＫ-207と同様の埋土で、その形態、出土木片などの類似から木器貯蔵用の穴と考えられるであろう。



第4図　第20次調査遺構平面図（1）

ＳＫ－215

本土坑はトレンチの南方、ＳＫ-204の南４ｍで検出した方形プランの土坑である。ＳＫ-217によって切られていることや調査区域外に本土坑がひろがっていることからその全体像は明らかにできない。長軸推定 2.0m 以上短軸 2.0m 以上で、深さ 1.3m を測る。土坑の断面形態は土坑中位下半が垂直の壁面で方柱状を呈すが、上半は皿状に広がる。埋土は大きく３分層され、上層・暗黄褐色土層、中層・暗茶褐色粘質土層、下層・黒粘と青灰色シルト層である。遺物は土坑底面で、斧柄(縦斧柄)未成品２点、柱材１点が出土した。さらに中層では多量の遺物の出土をみた。土器、炭化籾、焼土塊、焼木などがあるが、このうち、炭化籾と焼土塊は特に多く、本遺跡の最近の調査では例を見ない。土器は完形品はなく、大形破片で炭化籾などと混在した状態で出土した。その中に１点であるが、口頸部を打ち欠き、胴部下半に穿孔を施した土器（第16図－30）を土坑中央付近で検出した。また、これらの土器片の中には熱による変形を受けたもの（図版18－８～11）も含まれていた。さらに炭化物層を除去した下面において土製投弾が9点まとまって出土した。

本土坑の埋没は第Ｉ様式後半である。また、土坑の性格としては床面直上の木器よりこれらを貯蔵する穴と思われる。中層における遺物群は火災等による後片づけ品の廃棄、あるいは多量の炭化籾を含んでいることから何らかの祭祀にかかわる遺物の廃棄とも考えられる。また、第14次調査においても焼土塊等が出土しており、今後、本地区を中心に遺構・遺物のあり方を検討する必要があろう。

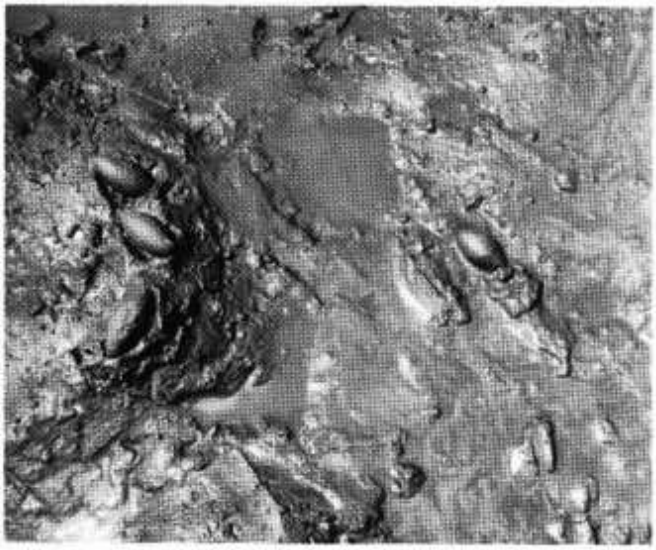
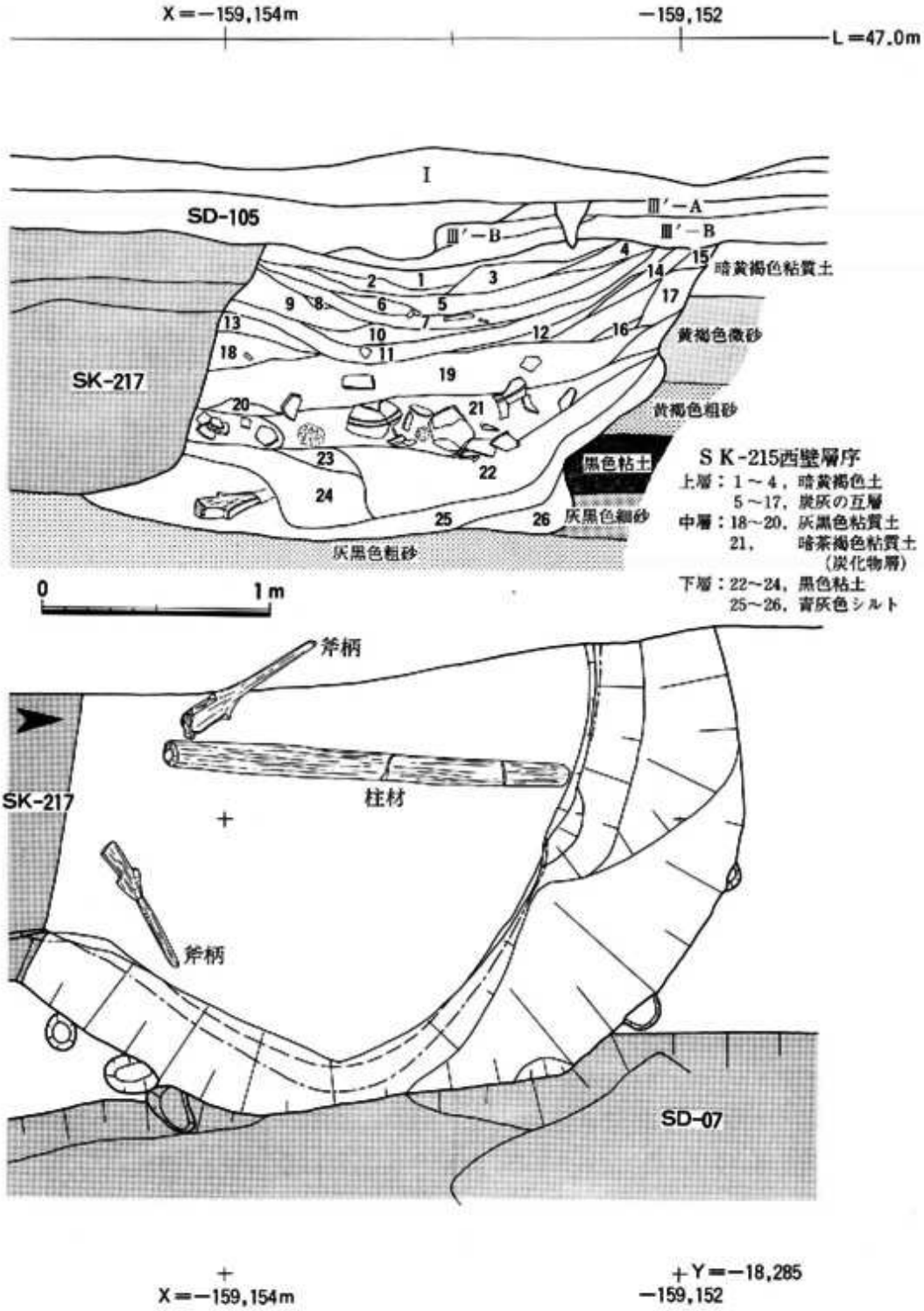


写真１　ＳＫ－215　投弾出土状況

ＳＤ－201

本溝はトレンチ北半で検出した大溝である。南東から北西方向に軸をとる溝で、幅約 4.5m 、深さ 0.9m を測る。溝の断面形態は逆台形を呈するが、溝の南側斜面は三段になっており、段掘りがなされている。溝はＳＫ-218を切ってつくられているが、ＳＫ-213･220には切られている。埋土は10cm前後の粘土・粘質土層によってうすく構成されているが、溝の下位では層の厚さが30cm前後になる。

遺物は溝の中位より出土しており、平鍬の未成品、手網状木製品、つる状の植物を束ねたものなどを検出した。



第5図　ＳＫ-215 遺構平面図及び断面図（Ｓ＝1/20）

住居跡関連遺構

第８次調査・第11次調査・第14次調査など近辺の既往の調査と同様、今回の調査においても多数のピット群を確認することができた。なかでも密度が高いのは、後世の削平を免れて、弥生時代の遺構面が当遺跡としては例外的に高く保存されていたトレンチ南半の西側部分である。また、この区域では中世溝ＳＤ-07の側壁にあらわれた基本層序の断面を観察しながら調査を進めた結果、ピットを含む複数の遺構群が検出面を異にして存在することを確認することができ、新知見となった。そこで、ここではこの区域のピット群および関連遺構について報告を行なう。

第４表　トレンチ南半西側部分の遺構

遺構群	遺構番号	形　態	時　期	備　考
1	SD-08	浅い小溝	中世	
	SX-102	住居跡状の落ち込み	古・後	埴輪、須恵器が出土
	SK-106	大形土坑	弥・Ⅲ	湧水あり、井戸？
	SK-107	大形土坑	弥・Ⅲ	湧水あり、井戸あるいは貯木施設
	SK-114	すり鉢状の浅い土坑	弥・Ⅲ	埋土は炭・灰層
	SK-115	皿状の浅い土坑	弥・Ⅲ	埋土に焼土粒を多く含む
	SK-116	浅い土坑	弥・Ⅲ	埋土に炭・灰を含む
	SD-105	浅い落ち込み	弥・Ⅲ	住居跡の可能性がある
	ピット群			
2	SK-113	すり鉢状の土坑	弥・Ⅰ	埋土に炭・灰を含む
	SK-117	すり鉢状の土坑	弥・Ⅰ末	埋土は茶褐色土
	SK-118	すり鉢状の土坑	弥・Ⅰ中	埋土は濃い茶褐色土
	SK-119	長方形のやや深い土坑	弥・Ⅰ末？	底面に木の皮を敷く？
	SD-111	浅い小溝	弥・Ⅰ	
	ピット群			
3	SK-215	大形土坑	弥・Ⅰ中～新	湧水あり、底面に縦斧柄未成品２点、中層に土器群
	SK-217	大形土坑	弥・Ⅰ新	湧水あり、貯木施設？　埋土は青灰色粘土
	SK-219	大形土坑	弥・Ⅰ新？	湧水あり、貯木施設？　埋土は青灰色粘土

トレンチ南半の西側部分の基本土層は他の区域と異なり、第Ⅱ層・旧水田床土層と第Ⅲ層・茶褐色土層がなく、代わりに認められるのは第Ⅲ'層・暗茶灰色粘質土層である。この層は上からＡ・暗灰褐色土層、Ｂ・茶褐色土層に細別でき、両層の上面からそれぞれ多数のピットや埋土に炭や灰を含む浅い土坑などを検出した。便宜上、前者を第１遺構群、後者を第２遺構群とする。更に、より下位の第Ⅳ層・暗黄褐色粘質土層上面ではＳＫ-215、ＳＫ-217などの大形土坑を検出したが、これを第３遺構群とする。各遺構群に含まれる個々の遺構は第４表に示すとおりであって、土器が示す時期と検出層序との対応に大きな矛盾はない。第１遺構群に属する遺構には、幅の広い落ち込み（ＳＤ-105，ＳＸ-102)、大形土坑（ＳＫ-106，ＳＫ-107)、埋土に炭や灰を含んだ皿状の浅い土坑（ＳＫ-114，ＳＫ-115，ＳＫ-116)、ピット群がある。時期については、ＳＤ-08，ＳＸ-102のような古墳時代以降のものもあるが、他の土坑や落ち込みはすべて第Ⅲ様式を中心とする弥生時代中期に属しており、ピット群についても同時期の所産と捉えてよいであろう。第２遺構群に属する遺構には、埋土に炭や灰を含んだすり鉢状の土坑（ＳＫ-113，ＳＫ-117，ＳＫ-118)、

浅い小溝（ＳＤ-111)、ピット群などがある。土器が示す時期は第Ⅰ様式末である。第３遺構群に属する遺構は平面が方形の深い大形土坑である。埋土に暗青灰色土を持つもの(ＳＫ-217, ＳＫ-219)と灰色粘土を持つもの（ＳＫ-215）の２者があるが、いずれも完掘時には激しい湧水があった。時期は第Ⅰ様式の後半である。

注目されるのは、第３遺構面の遺構と第２・第１遺構面の遺構との間に顕著な性格の違いがあるということである。第３遺構面の大形土坑は貯木施設の性格が考えられるが、第２・第１遺構面にはトレンチ南半の大形土坑群につながるＳＫ-106, ＳＫ-107を境に明らかな大形土坑が見られず、ピットや小土坑の密集地となっている。ピットについては、所属遺構群は不明ながら、柱根の遺存していたものが１基あり、他のものについても柱穴と考えてよいであろう。小土坑については、埋土に多量の炭・灰や焼土粒を含んでいることから炉穴の可能性が考えられる。いずれも性格としては住居跡に関連する遺構であることは明らかであるが、配置にまとまりが見られないため、現時点では明確な建築物のプランを抽出することは困難である。かなりの高密度で切り合い関係を保ちながら存在していることから、長期間にわたって継続して家屋が営まれていたのであろう。

以上の事実から、この区域においては弥生時代前期にはトレンチ北半とともに大形土坑の群在地であったのが、前期末から中期の段階には居住区に変化したことが明らかになったと言えるだろう。また、ピット群が大きく前期末と中期中葉の二時期のものに分離できたことも特筆する必要がある。

(3). 弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構はトレンチ南半で、ＳＸ-201と柱穴群を検出し、北半では井戸などの土坑を多く検出した。トレンチの南半と北半では居住空間の利用が異なるようである。

ＳＸ－201

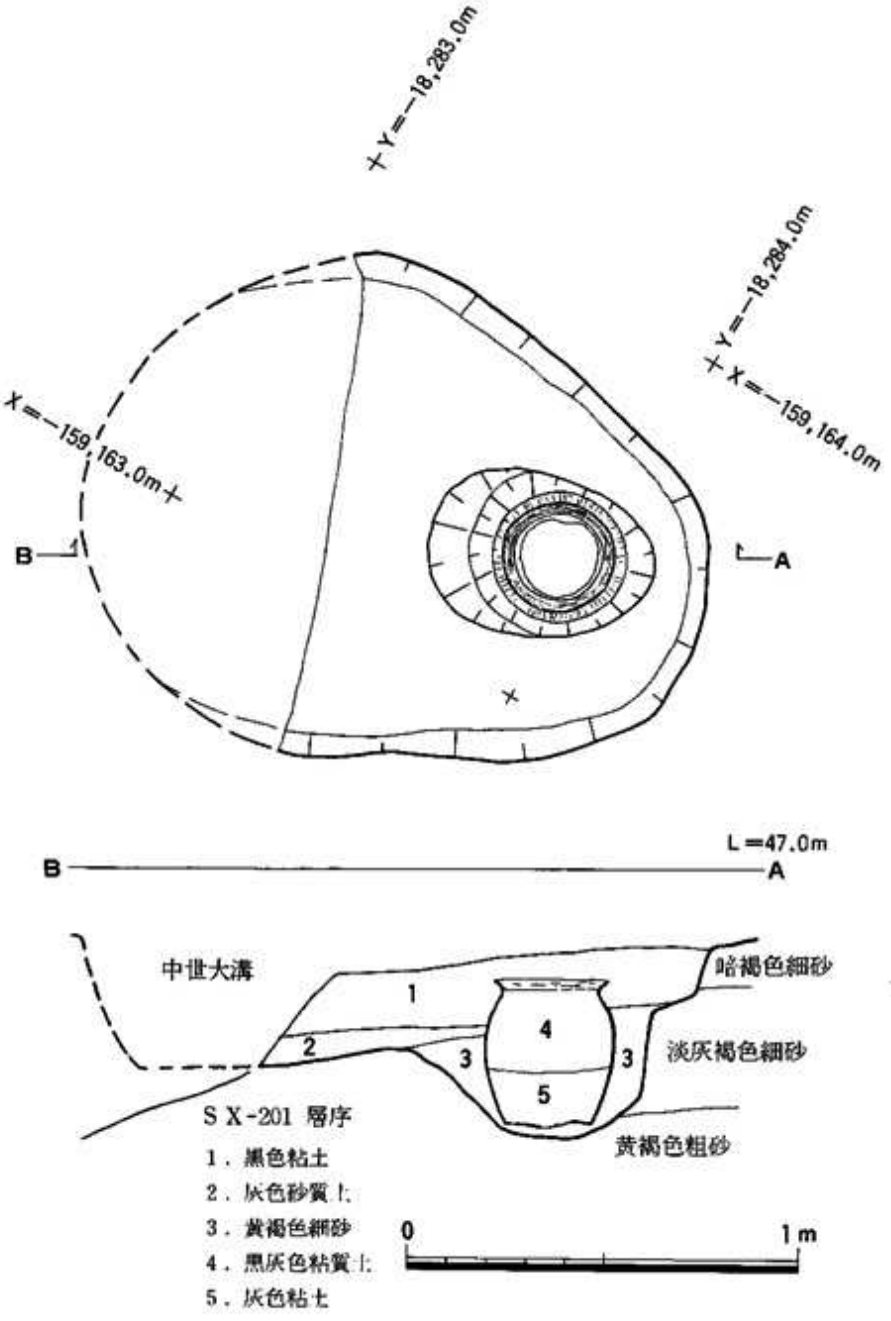
トレンチ南端で検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈すると思われるが、東側は中世大溝によって切られている。土坑は二段掘りになっているが、下段の掘り方は土坑の中心より西側に寄っている。上段は推定長軸1.6m、短軸1.3mを測る。また、下段は長軸0.58m、短軸0.42m、深さ0.32mを測る。下段の掘り方中央には底部を打ち欠いた大形甕が直立させた状態で据えられていた。土坑は粗砂中に掘りこまれており、湧水による土坑壁面の崩壊を防ぐために、甕が据えられたと考えられる。一種の集水施設と思われる。甕は口縁部から７～13cmぐらい地上に露出していたが、黒色粘土によって完全に埋没したようである。第Ⅱ様式の所産であろう。しかし、櫛描文の土器はわずかで、第Ⅰ様式の土器が大半である。

ＳＫ－103

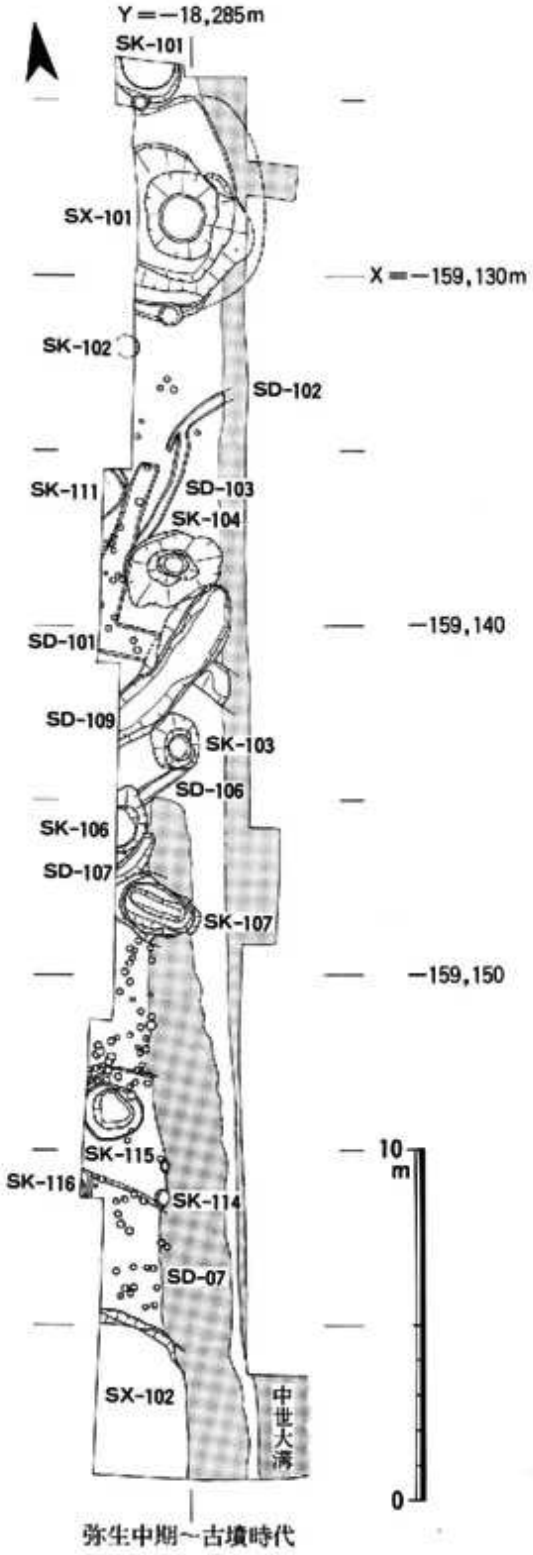
トレンチ中央で検出した土坑である。土坑の平面形態は楕円形で、長径 1.6m、短径 1.3m、深さ 1.6mを測る土坑である。土坑の断面はロート状を呈す二段掘りで、下段部分は円筒状であ

る。土坑の底面は灰色砂層を掘りぬいて灰色粘土層に達している。土坑の埋土は大きく4層にわかれる。上層は黒灰色粘質土、中層は黒色粘土、下層は灰黒色粘土、最下層は灰黒色砂質土である。遺物は上層と中層の間に土器片が多くみられたほかはほとんど含まない。しかし、完形の水差形土器が中層と下層の境界部分から出土している。この土器は土坑中位のテラス部分よりやや下位で検出された。

本土坑は土坑のプランから井戸と考えられるが、水差形土器は井戸が廃棄される段階に投棄されたものと思われる。時期は第Ⅲ様式である。



第6図　SX-201 遺構平面図及び断面図（S＝1/20）



第７図　第20次調査遺構平面図(2)

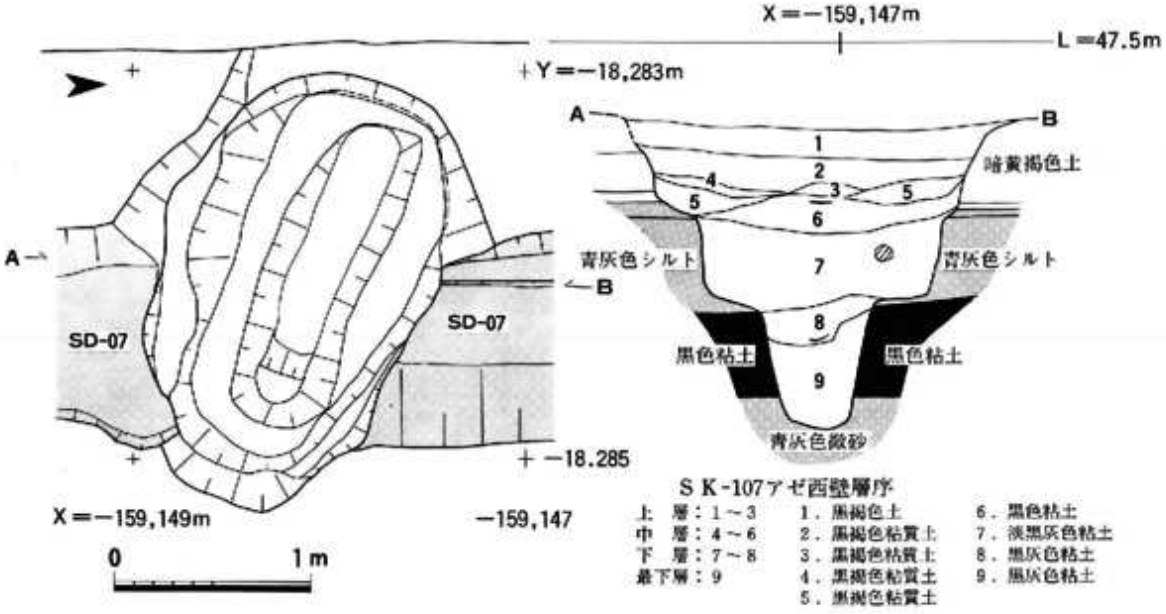
ＳＫ－107

本土坑はトレンチ中央に位置し、ＳＫ-103の南５ｍで検出した土坑である。土坑の平面は長楕円形を呈するもので、本遺跡ではあまり例をみない形態である。土坑の断面形態は三段の逆台形を呈するが、二段目と三段目の間には広いテラスを有する。土坑の規模は長軸 2.3m、短軸 1.4m、深さ 1.6mを測る。土坑の埋土は大きく四分層され、上層は黒色土、中層は黒色粘土、下層および最下層は黒灰色粘土である。各々の大別層は土坑中位のテラス付近で変化がみられる。遺物は各々の層から出土している。上層では多数の土器少片、中層では丸鍬の未成品、下層上位では長さ２ｍの丸太材が出土している。また、下層下位では手斧の柄、半完形の壺などがあるが、特に注目されるのは完形の壺に入った卜骨が出土したことである。壺は横転した状態で出土し、上面は土圧によりこわれていた。この壺内部にはイノシシの肩甲骨を用いた卜骨が入っていた。卜骨は土器内部の端に、密着するように検出した。

本土坑の性格は明らかにできないが、卜骨が廃棄された時期は本来の機能が失なわれてからであろう。その後、土坑埋没過程で、丸鍬等の貯蔵用に変化していったと考えられる。本土坑の時期は第Ⅲ様式である。

ＳＸ－101

本土坑はトレンチの北端で検出した大土坑である。土坑上面はトレンチ外に広がり、また、土坑の東側は中世大溝によって欠失している。土坑上面の平面プランは楕円形を呈すが、下部は円筒状になっている。土坑の規模は長径約 6.5m、短径推定約５ｍにおよぶ。深さは 2.4mを測る。土坑の北側に約1.5mのテラスを有すが、他の部分では数段の段掘りをなし、中央に径約1.4m の円筒状の掘り方をつくる。土坑の北西側では、壁面が崩壊し、オーバーハングして



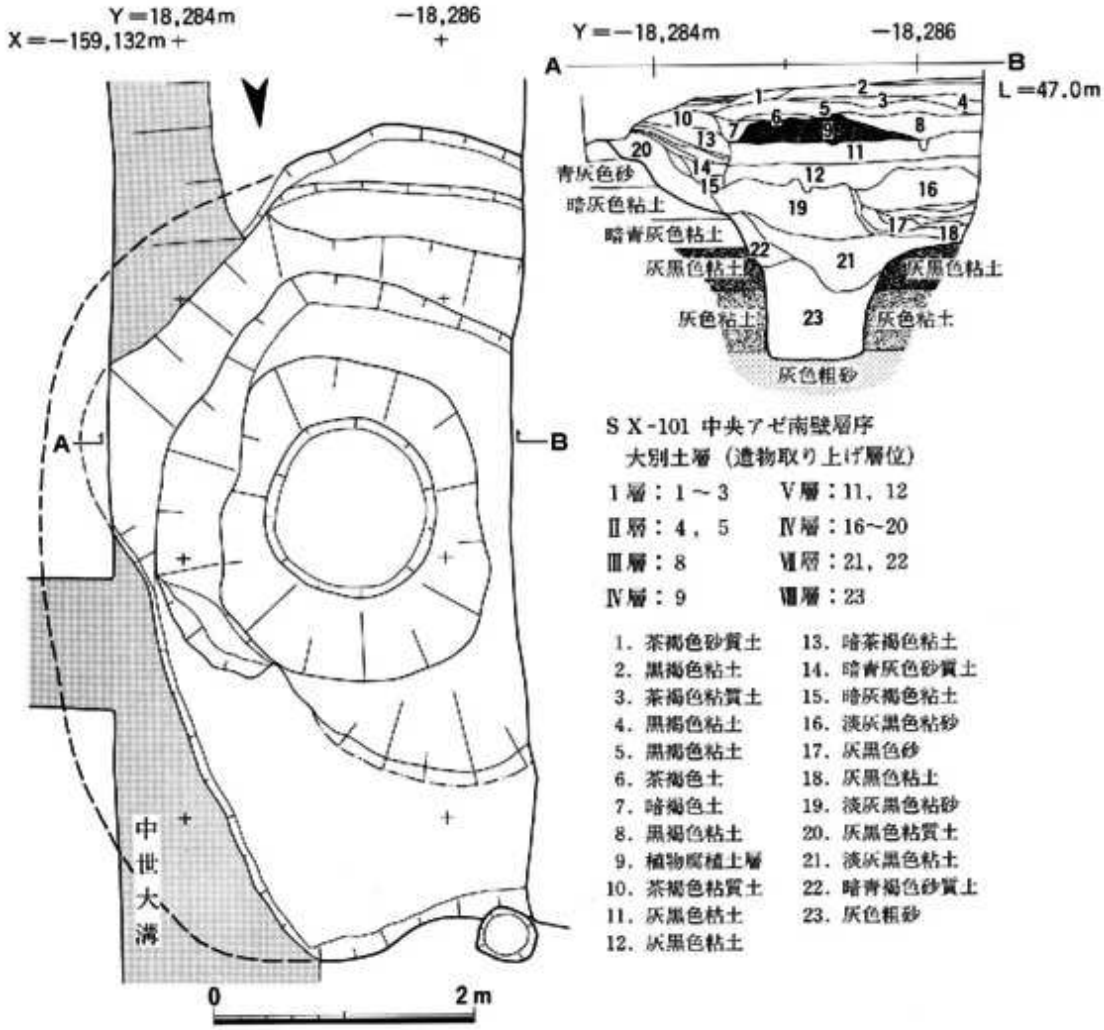
第8図　SK-107 遺構平面図及び断面図(S＝1/60)

いる。土坑の埋土は大きく八分層される。第Ⅰ～Ⅲ層は黒色土・黒色粘土で、10cm前後の土層の厚さで形成されている。第Ⅳ層は植物腐植層で土坑全体を覆っている。第Ⅴ層は灰黒色粘土で、粘性が強い。第Ⅵ層は灰黒色砂質土や粘砂によって形成された土層である。第Ⅶ層は淡灰黒色粘土層、第Ⅷ層は灰色粗砂層で壁面崩壊時の流入土と考えられる。遺物は第Ⅰ層から第Ⅵ層にかけて多く出土した。第Ⅱ・Ⅲ層では半完形の土器群が、第Ⅳ層の植物腐植層は籾殻などを多く含んでおり、この層中よりイノシシ肩甲骨を用いた卜骨、さらにこの卜骨から10cm離れた所では脚部を欠失した高杯杯部が同一面で出土した。また、鹿角製のハンマーも出土している。第Ⅴ層では卜骨片や犬の骨、第Ⅵ層においても、卜骨片が散在した状態で出土している。さらに、このⅥ層では完形の広口長頸壺（内部で穀物が炭化）や細頸壺、鉢、ミニチュア土器などが一括で出土しており、注目される。また、笊の断片や巻貝(アカニシ)、横槌なども検出している。なお、卜骨については第Ⅳ～Ⅵ層にかけて出土しており、出土地点も土坑全体に広がっている。

本土坑はその形状や立地から井戸と考えられるが、埋没する過程で卜骨や獣骨、土器などを多量に廃棄したのであろう。土坑の埋没時期は第Ⅲ様式である。

SD－109

本溝はトレンチ中央やや北よりで検出した大溝である。南西一北東方向に軸をとる溝であるが、北東側で溝は収束している。溝幅約 1.4m、深さ 0.7m を測る。溝の断面形態はU字形を呈すが、溝斜面ではわずかにテラスを有する。溝の北側斜面中位には径２～３cmの棒を溝にそわしていることが判ったが、どのような性格を有していたのかは不明である。溝内の堆積は10cm前後の薄い



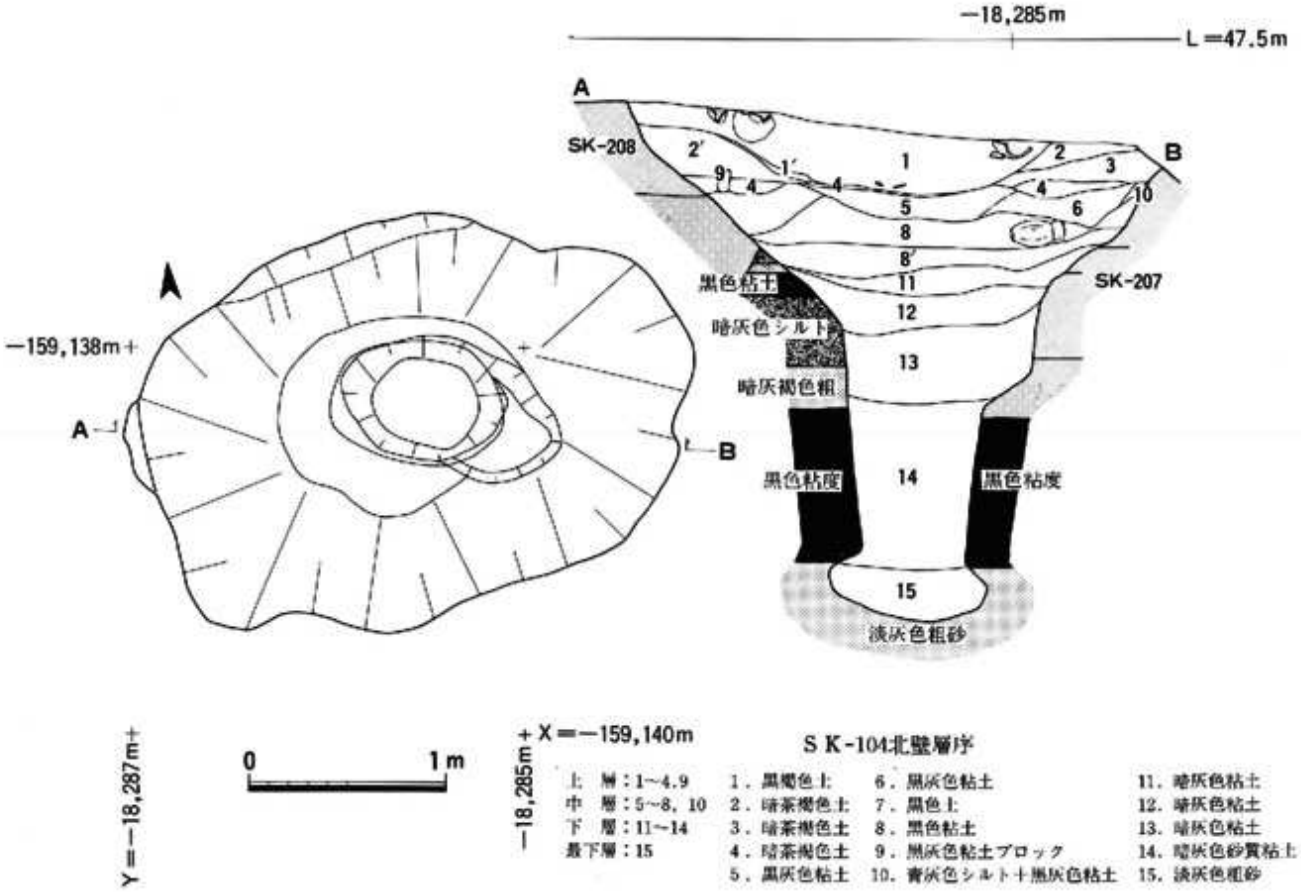
第9図　SX-101 遺構平面図及び断面図（S＝1/60）

土層で形成されており、土層の堆積は複雑である。土層は粘土から粘質土へと変化し、埋没したようである。

遺物は少なく、トレンチ西端で、長さ90cm、幅10cm前後の建築材と思われるものが出土したのみで、他は土器、獣骨片である。時期は第Ⅲ様式である。

(4). 弥生時代後期の遺構

弥生時代後期の主な遺構はトレンチ北半で検出した土坑二基である。いづれも後期前葉のもので、第８次や第14次調査で検出したような後期後半の諸遺構は含まれていないようである。



第10図　ＳＫ-104遺構平面図及び断面図（Ｓ＝1/40）

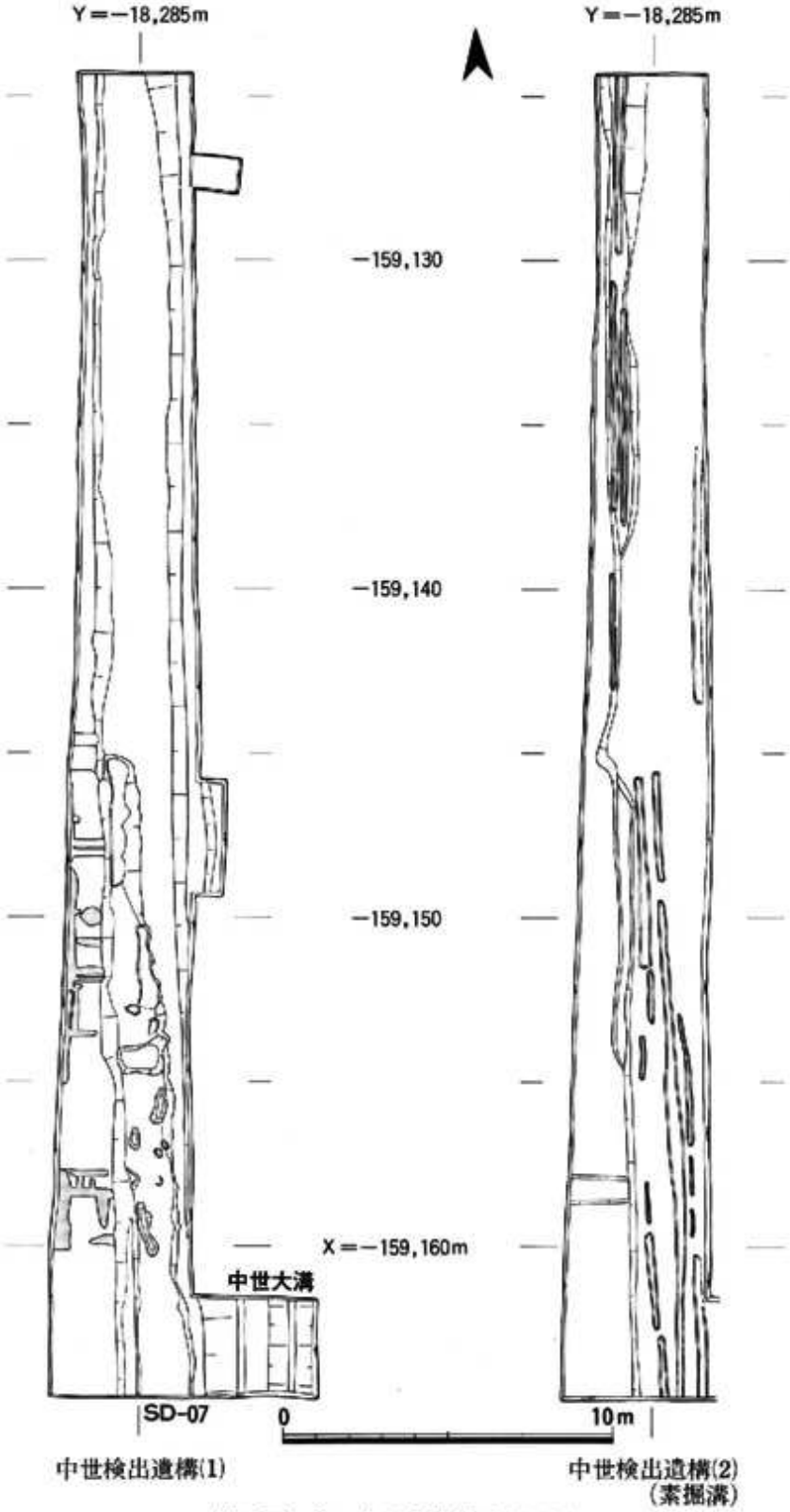
ＳＫ－101

トレンチ北端で検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈すると思われるが、土坑の約半分が調査区域外におよんでいるため明らかにできない。推定短軸 1.9m、深さ 1.4m を計る。土坑の断面は逆台形を呈し、底部は粗砂層に達している。土層は大きく二層に分層されるが、いずれも黒色・黒灰色の粘土あるいはシルト層である。遺物は上層の下位より完形の短頸壺二点を検出している。それ以外は土器片であまり遺物を含んでいない。

本土坑はその形態や坑底の砂層などから、井戸としての性格があたえられよう。なお、短頸壺は機能喪失段階に投棄されたと考えられる。時期は第Ⅴ様式前葉である。

ＳＫ－104

トレンチ中央やや北よりで検出した土坑である。平面は楕円形で、長軸2.85m、短軸2.15m を測る。土坑の断面形態はロート状を呈し、坑底では壁面が崩壊し、袋状となっている。深さ 2.7m を測る。土坑の堆積は大別すると四つに分かれ、上層は黒褐色粘質土、中層は黒色粘土、下層は暗灰色粘土・粘質土、最下層は淡灰色粗砂層となっている。最下層は土坑壁面が粗砂の為、崩壊して形成したものである。中層までは自然堆積である。



第11図　第20次調査遺構平面図(3)

遺物は上層で大量の土器を検出した。壺・甕・器台などが目立っている。土器廃棄坑として転用したのであろう。中層では完形の短頸壺と孔を穿ったイノシシの下顎骨、用途不明の棒状木製品がまとまって出土した。下層以下ではほとんど遺物を含んでいない。

本土坑はその形状から井戸と考えられる。井戸としての機能が失なわれた段階に中層の遺物群が投棄されたと考えられる。上層の土器群は土器の廃棄坑として転用されたものであろう。時期は第Ⅴ様式初頭である。

(5). 中世の遺構

中世の遺構はトレンチ全面で検出した。中世大溝と素掘溝などがある。中世素掘溝は大溝が埋没した後に形成されたようである。

中世大溝・ＳＤ－07

中世大溝はトレンチ東端で南北39m にわたって検出した。ほぼ、南北方向に軸をとる溝で、溝幅推定 4.0m 、深さ 1.1m を測る。埋土は大きく二分され、上層の暗茶褐色土と下層の暗灰色粘土である。遺物は少ない。上層の埋土から出土した土師器より、14世紀末から15世紀頃に埋没したと考えられる。

一方、ＳＤ-07は中世大溝の１m西側で検出した。しかし、トレンチ南半のみで、南北に約18.5m検出し、北側は収束している。溝幅 1.5m 前後で、深さ 0.4m を測るが、溝の掘り方は雑で、底面は一定でない。遺物はほとんど出土していない。この溝のため、トレンチの西側はテラス状に遺構面が残存することとなった。

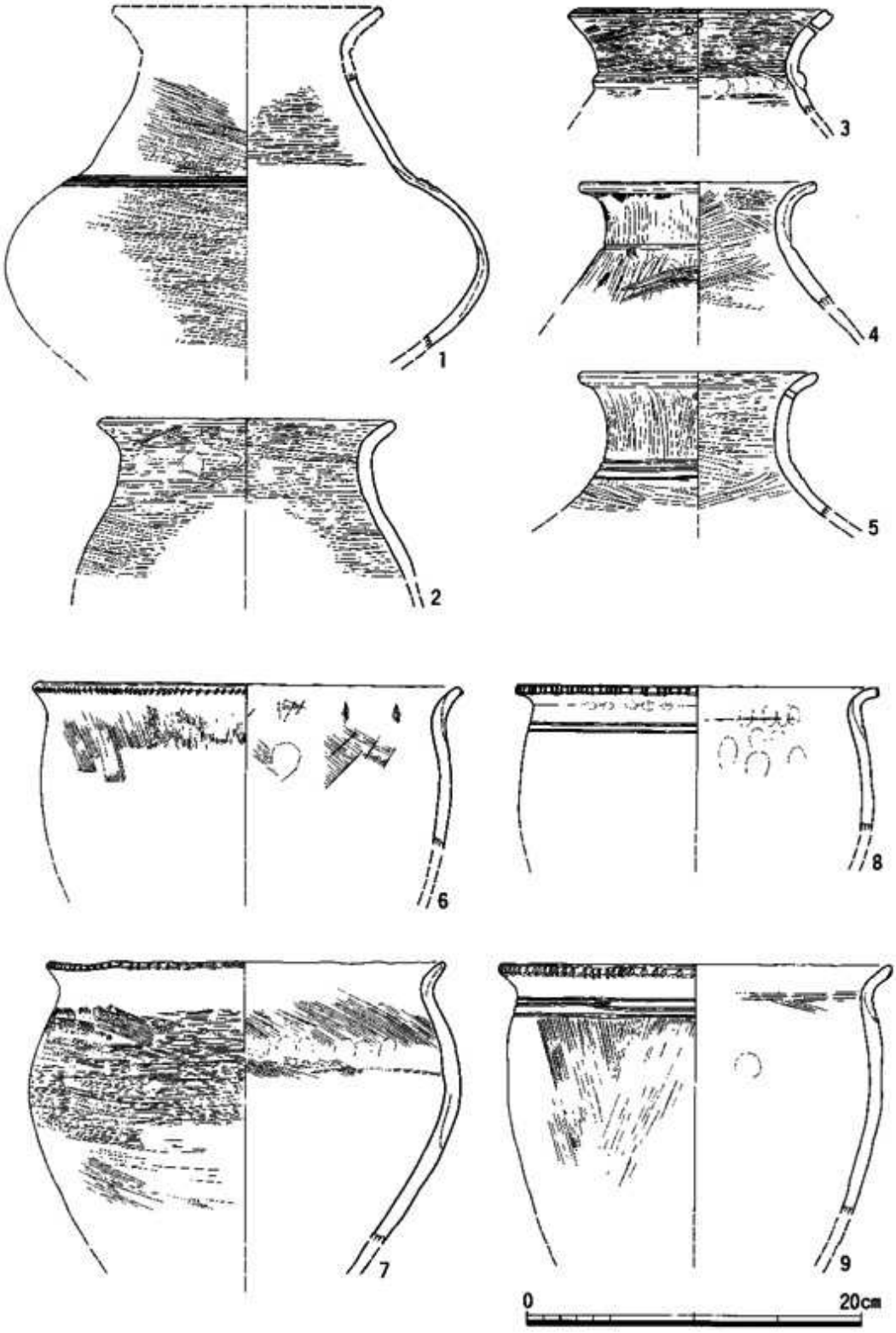
３．出土遺物

(1). 土器

第20次調査で出土した土器は弥生時代前期から古墳時代後期までの土器と中世の土器がある。とりわけ、この中で大部分を占めるのが弥生土器である。弥生土器はほぼ全期間の土器が揃っているが、第Ⅱ様式、第Ⅳ様式、第Ⅴ様式後半の土器は土器総量からみれば少ない。本項では、これらのすべてについて触れることは不可能であり、この中で特に注目される土坑出土の一括品について述べていきたい。土坑出土土器の中で量的に保証され、土器編年上、重要な位置を占める土器をとりあげることとする。

ＳＫ－205出土土器（第12図）

ＳＫ-205の土坑より出土した土器はコンテナ約４箱で、弥生前期の土坑の中では比較的多い方である。土坑中位の粘土層から破片であるが、多くの土器を検出した。これらの土器群は壺・甕を主体としながらも蓋や鉢をわずかに含んでいる。壺は文様からみれば、２点の粘土による浮文



第12図　S K-205 出土土器（S＝¼）

(1点は段の下方に貼り付け突帯を付けたもの）を含んでいるものの沈線と段を施したものが主流を占め、Ⅰ様式の中でも古相の様相を表わしていると思われる。

壺　1～5は中形の壺である。いずれも口縁部が短く外反するものである。調整は内外面ともにミガキを施す。1は胴部が強く張り出したもので扁球形を呈す。頸部と胴部の界は段を有し、段下に3条の沈線をめぐらす。2は胴部が縦長の球形になるもので、口縁部、頸部、胴部の界は不明瞭である。しかし、各々の界は段がくずれたような曲線を描く。3は口縁部に一条の沈線をめぐらし、口頸部界に一帯の高い削り出しを有している。4・5は口頸部界に各々1条、3条の沈線をめぐらす。

鉢　6・7は中形の鉢である。やや体部が張り出した形態で、口縁部はゆるやかに外反する。口縁部は6・7ともに刻目を有す。調整は細いハケ状工具とナデによって仕上げている。両者には外面に煤の付着がみられ、煮沸用として使用したと考えられる。

甕　8・9は小形の甕である。わずかに体部が張り出し、口縁部は短く外反する形態である。8は大きく外反し、端部は面を有す。8は口縁部に刻目、体部上端に二条のヘラ描沈線をめぐらす。外面はナデ調整である。9も同じく口縁部に刻目、体部上端に3条のヘラ描沈線をめぐらす。内外面ともにハケ調整がみられる。

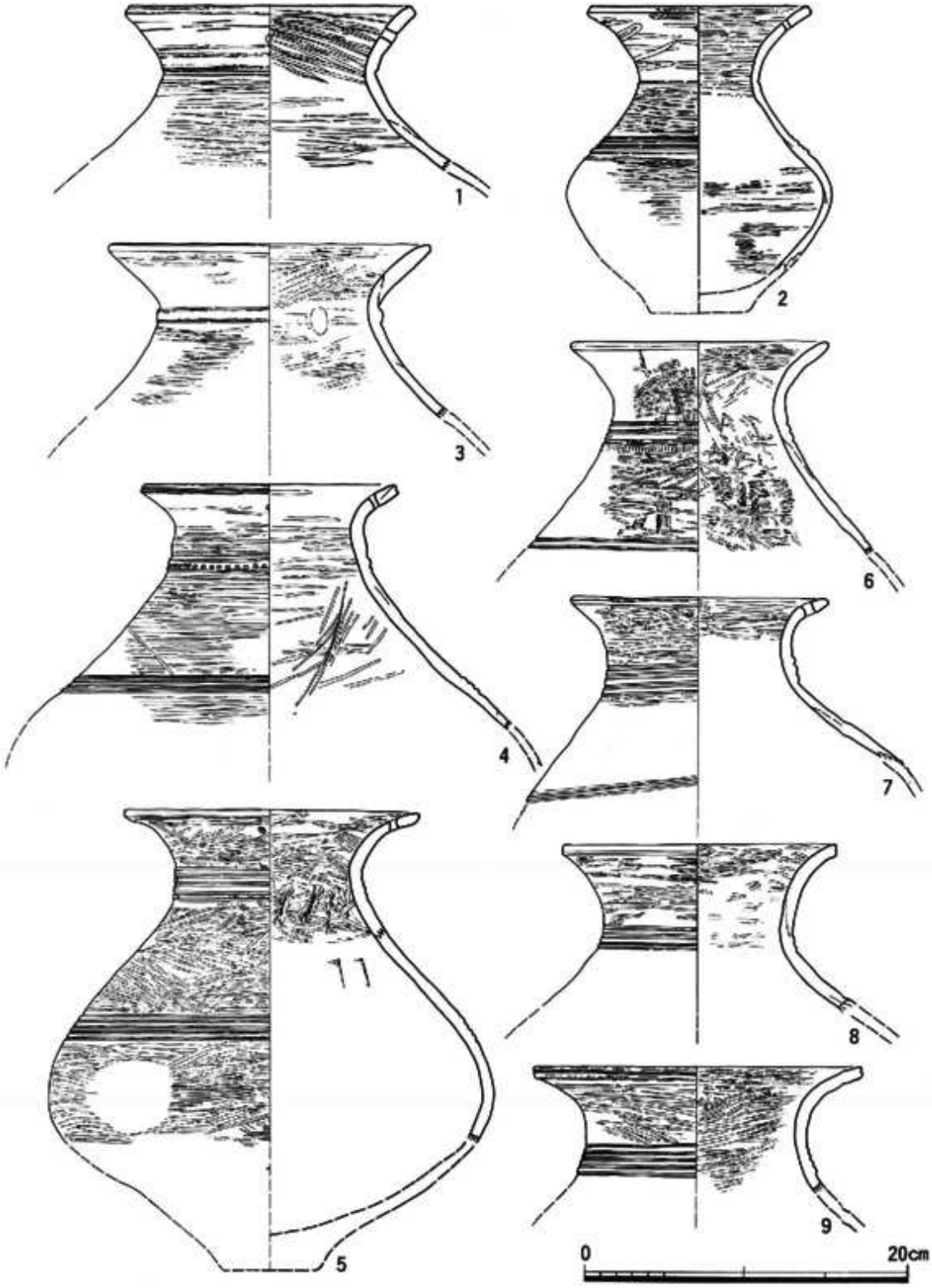
ＳＫ－215出土土器（第13～25図）

ＳＫ-215の中層より多量の半完形土器が出土した。これらの土器には二次焼成を受けたものが多く、火災に伴う一括廃棄品の可能性が高い。また、上層は暗黄褐色土で人為的に埋めたと思われることから、中層の土器群は土器廃棄から土坑埋没まで短期間でおこなわれたものであり、良好な一括資料を示している。第13～25図に示した土器は中層の土器群の一部である。本遺跡においてこれほどの量におよぶ前期の良好な資料は今までに検出していない。

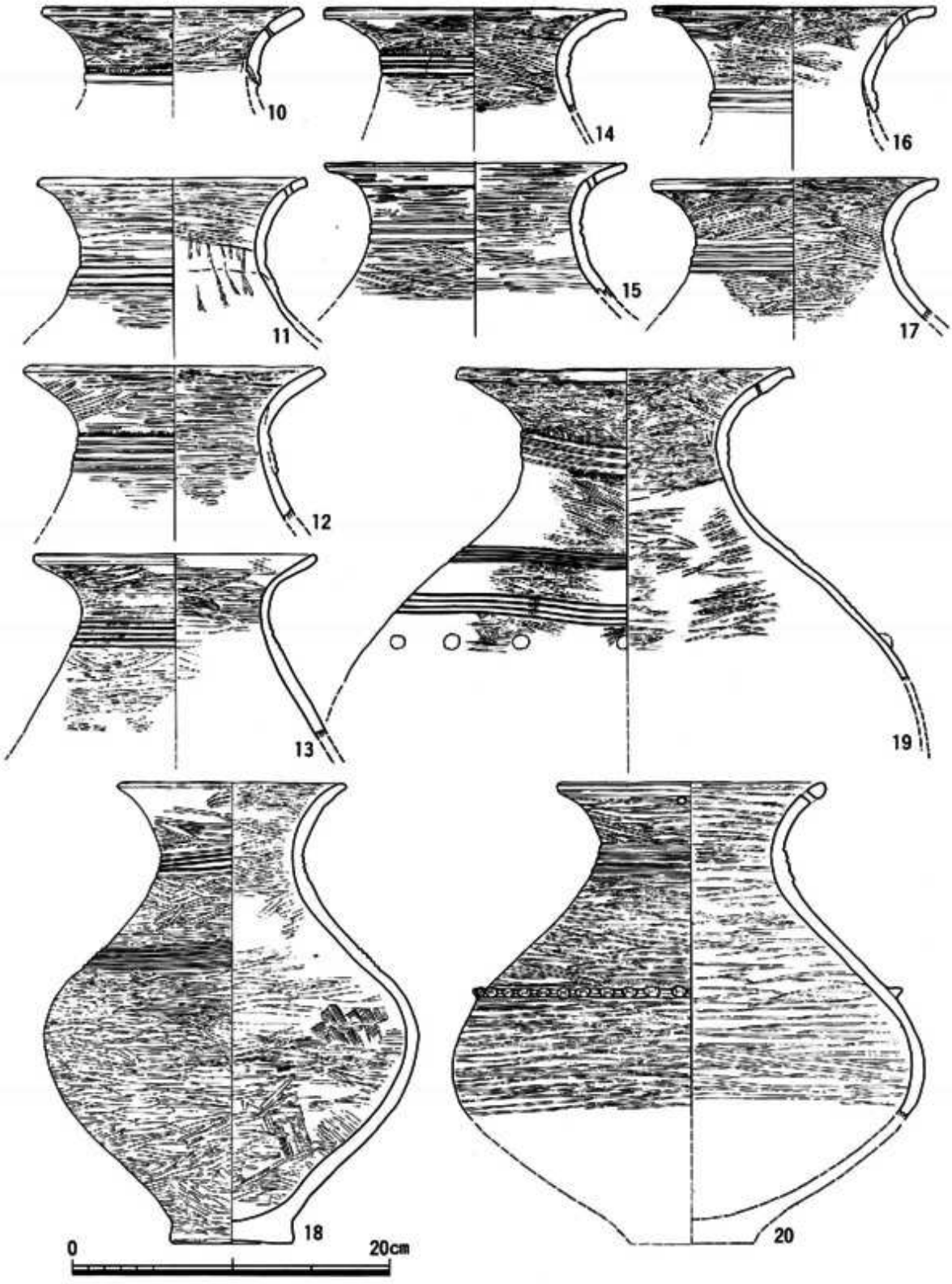
器種では壺・壺蓋・甕・甕蓋・鉢などを検出しているが、中でも壺は比率的に高い。壺は小形壺はほとんどなく、中形壺が主流を占める。

壺　1・2は口頸部界に段を有する壺である。1は中形の壺で、口縁部はあまり外反しない。端部は面を有する。口頸部界には段を有するが、段の成形は頸部側をハケ状工具で低くし、ミガキをおこなうものである。削り出しの成形と同じ方法によるものである。2はやや小形品となるものである。口縁部は長く大きく外反する。本土器の文様は口頸部界と頸胴部界にみられる。口頸部界には1の土器とは逆の成形で、口縁部側を低く削り出す手法によって段を成形している。頸胴部は削り出し突帯上に3条の沈線をめぐらしている。

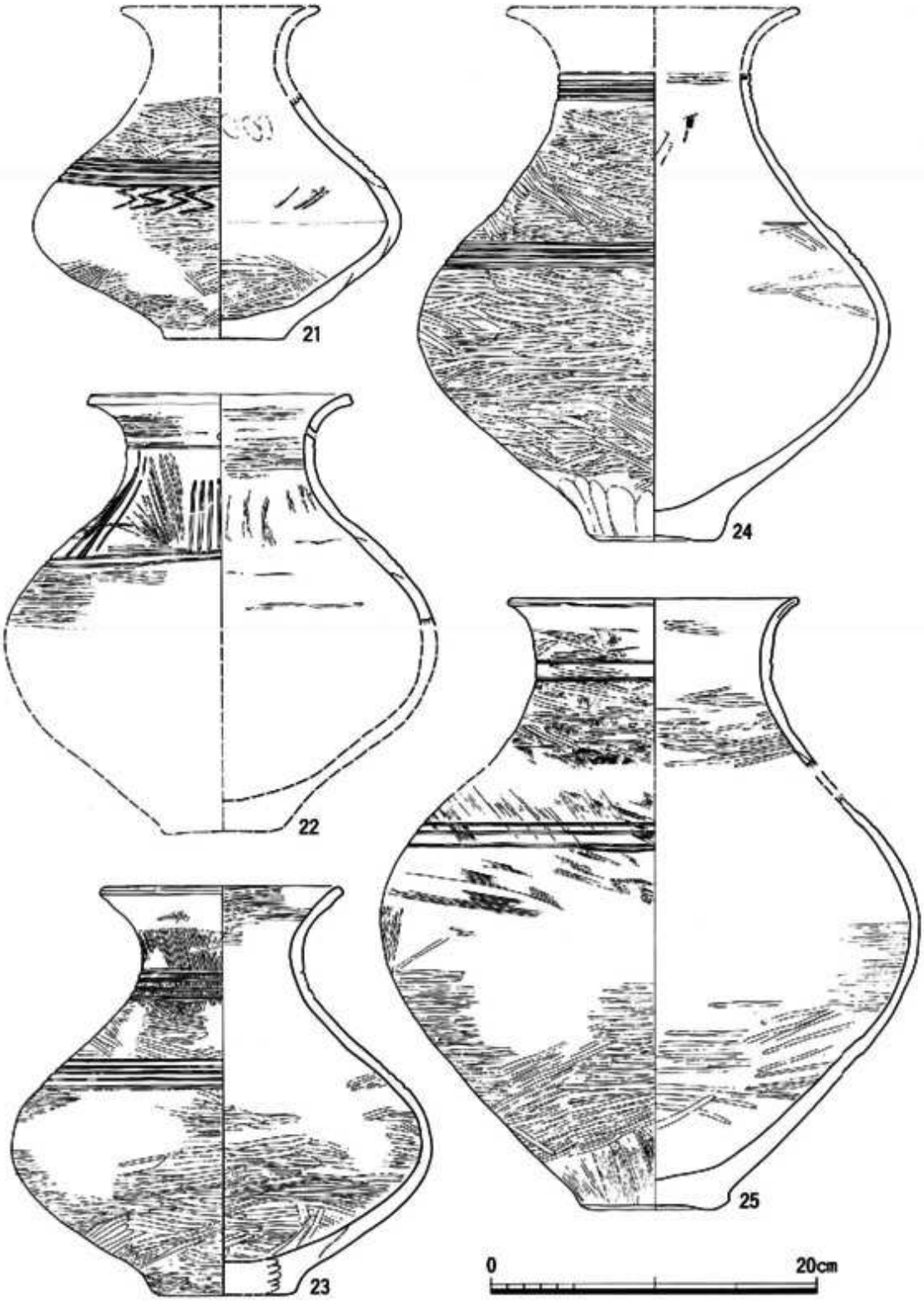
3～34は中形の壺である。形態がわかるものは少ないが、大きく分類するならば、胴部が強く張り出し、扁球形を呈するもの（5・19・20・21・23・31・34）と胴部が球形にちかいもの（18・24・25・30）との二種がある。前者には胴径が40cmちかくなるもの（19・31・34）もあるが、大半は20～30cm前後のものである。この19・31・34は文様構成からみれば、頸胴部界以外に沈線



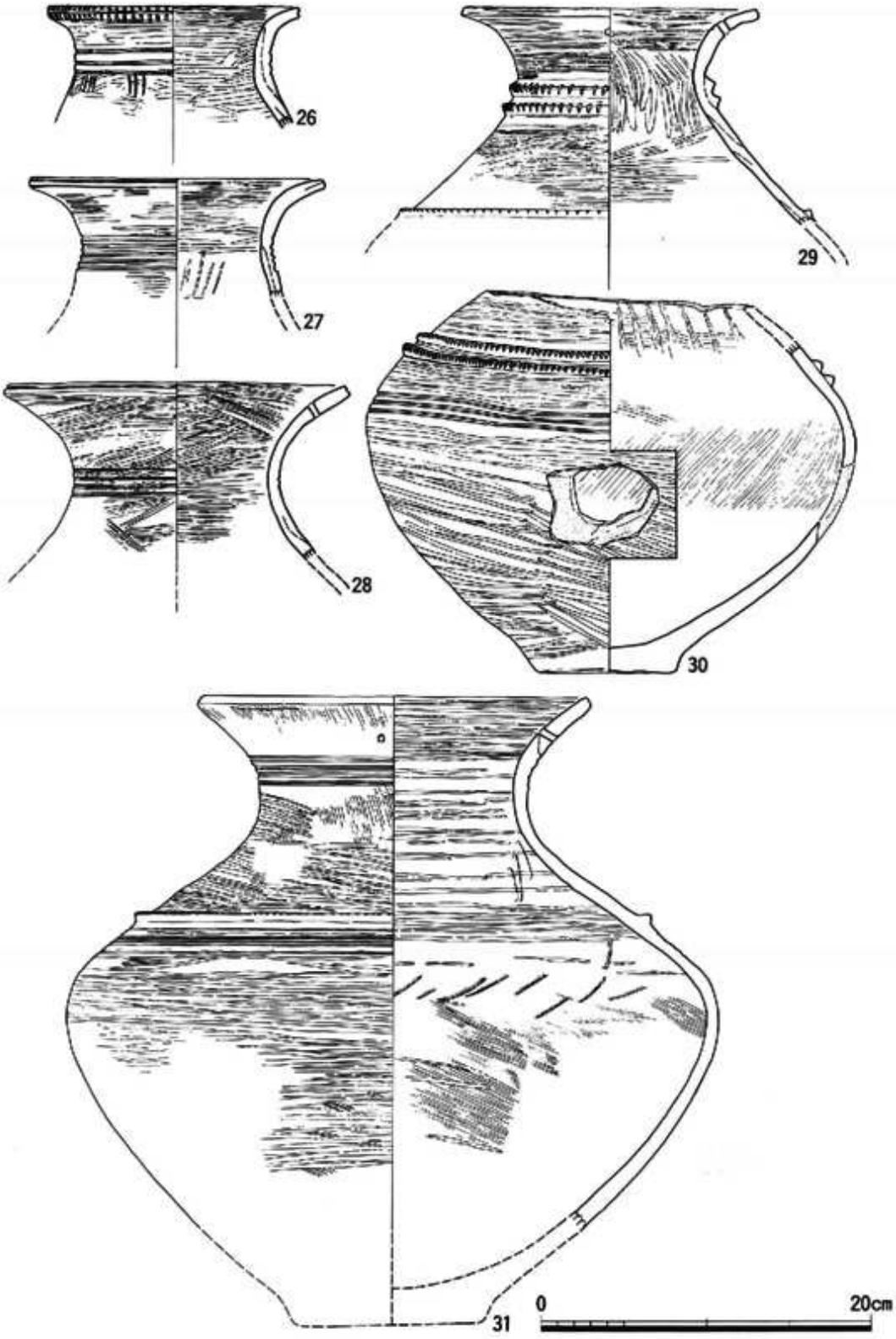
第13図　SK-215 出土土器1（S＝¼）



第14図　S K-215 出土土器 2 （S＝¼）



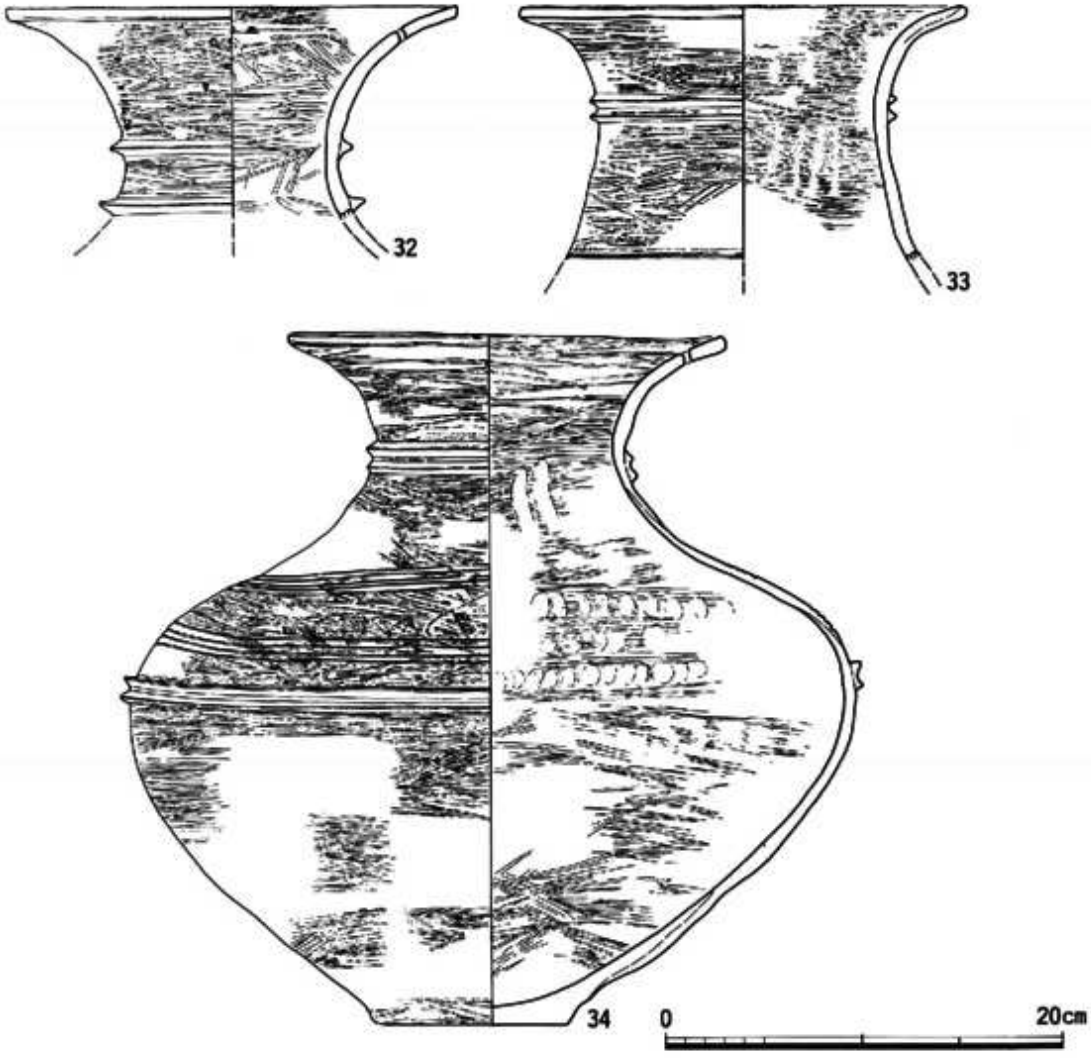
第15図　ＳＫ-215 出土土器３（Ｓ＝¼）



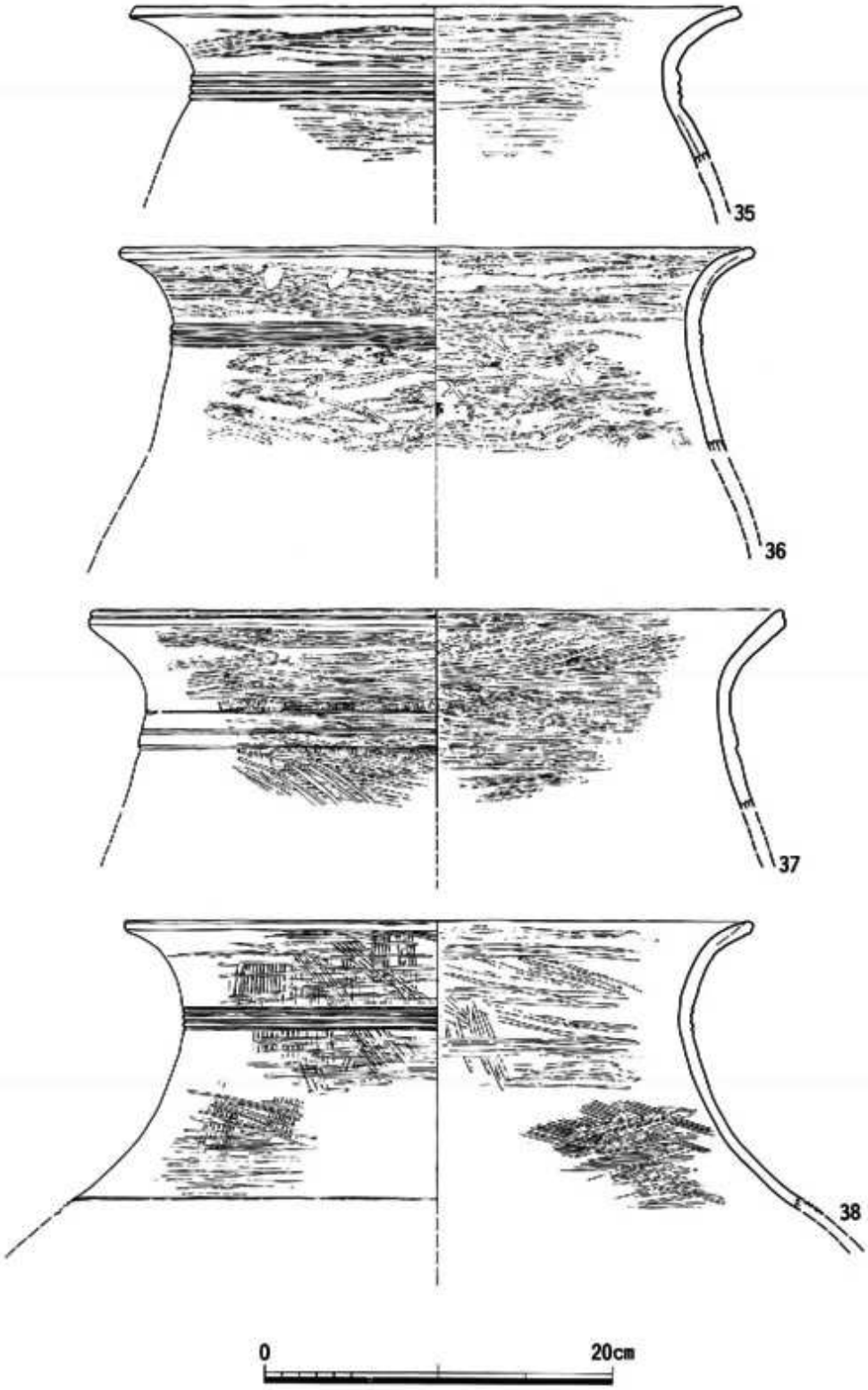
第16図　ＳＫ-215 出土土器４（Ｓ＝¼）

あるいは貼り付け突帯を有し、新しい傾向がみられる。これらの土器について主に文様面から記述をすすめる。

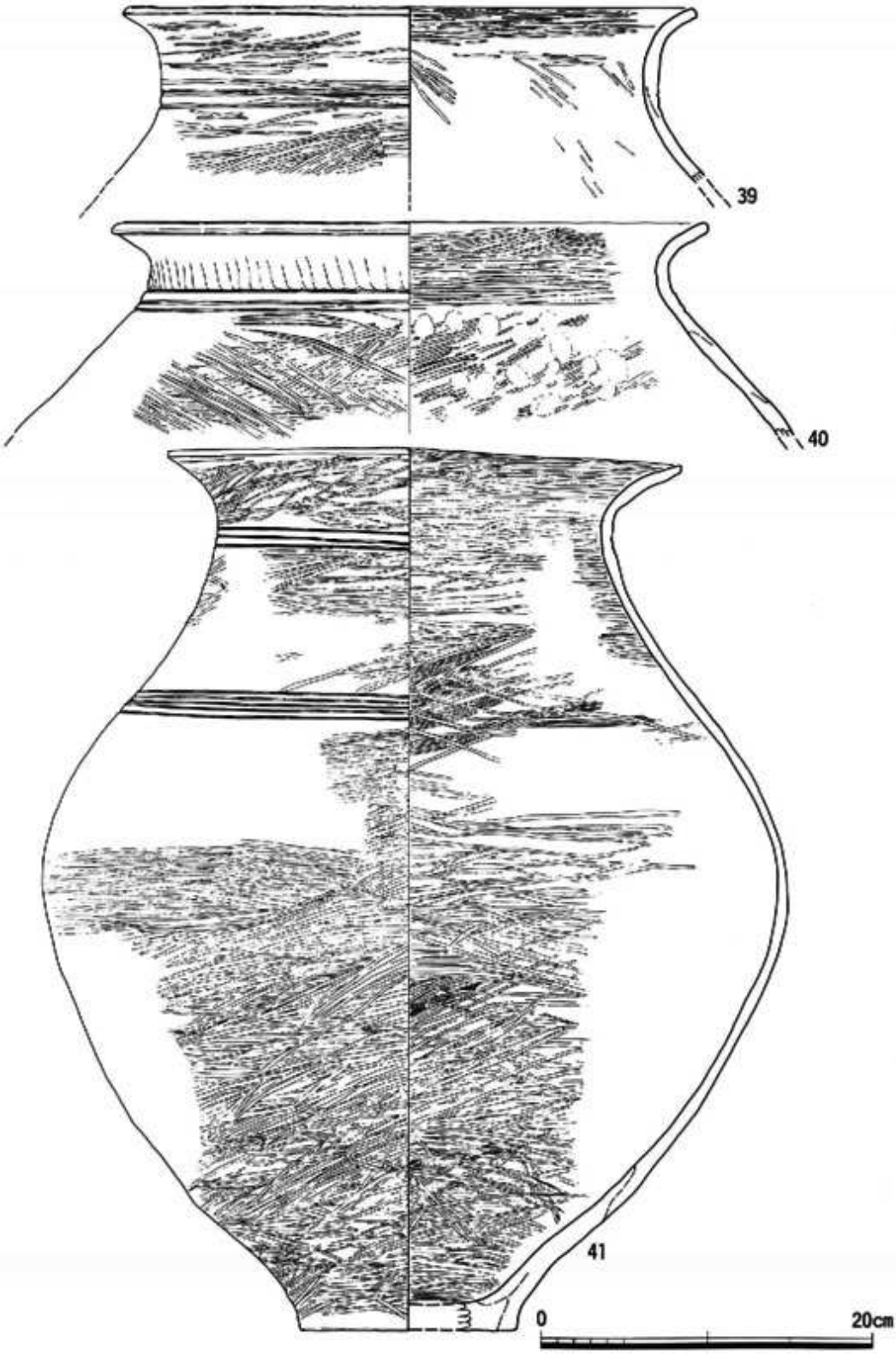
3・4は口頸部界に一帯の削り出し突帯を有する。4は削り出し突帯上に径2㎜の円形刺突文をめぐらす。また、口縁端部には一条のヘラ描沈線文が、頸胴部界には胴部側のみを削り出し、段をつけ、段の上側（頸部側）に3条のヘラ描沈線をめぐらす。3・4の土器はともに強い二次焼成を受けている。5は口頸部界に削り出し突帯を有し、突帯上に3条のヘラ描沈線をめぐらす。頸胴部界は頸部側のみを削り、段としている。段の下側に4条のヘラ描沈線をめぐらす。6は口頸部界の口縁部側を削り出し、段をつくっているが不明瞭な部分にはヘラ描沈線をめぐらしている。7・8は6とは逆に口頸部界は頸部側を削り出し、段としている。段の上側に3条のヘラ描沈線をめぐらしている。9は頸部側を削り出し、段の上側に4条のヘラ描沈線をめぐらす。また、



第17図　SK-215 出土土器5（S＝¼）



第18図　SK-215 出土土器6（S＝¼）



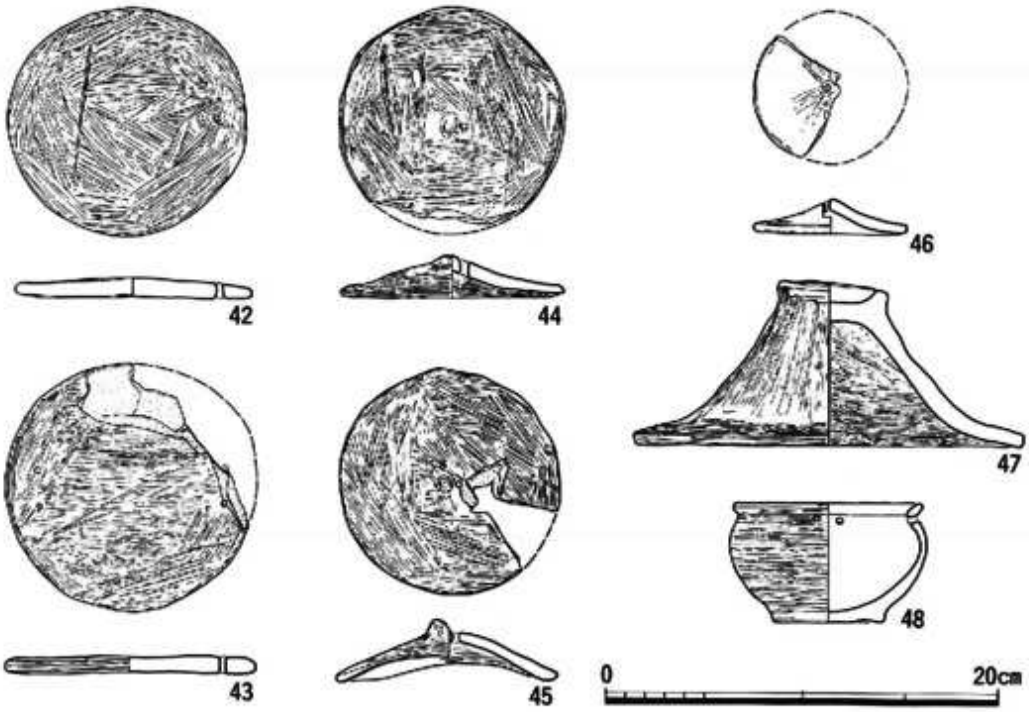
第19図　S K-215 出土土器 7 （S＝¼）

口縁端部にも一条の沈線を描く。10は一帯の削り出し突帯をめぐらしているが、3・4に比べ突帯部は低く、突帯の幅もやや狭い。11～17は口頸部界に削り出し突帯を有するものである。突帯上には1条（15）から4条（12）のヘラ描沈線がめぐらされている。全体に突帯は低く不明瞭であるが、14・16の突帯は高く削り出されている。18は口頸部界と頸胴部界に削り出し突帯を有し、突帯上には各々3条・4条の沈線をめぐらす。19は口頸部界と頸胴部界に削り出し突帯をめぐらし、突帯上に2条の沈線を描く。胴部には4条のヘラ描沈線とその下位に円形浮文（乳状突起）を貼付するが剥落している。20は口頸部界に削り出し突帯を有し、突帯上には二条のヘラ描沈線を施す。頸胴部界には一条のヘラ描沈線をめぐらした後、その沈線上に貼り付け突帯をつけ、突帯は山形状につまみ出す。この貼り付け突帯を上面（口縁部）からみると鋸歯状を呈することになる。

21～28はヘラ描沈線を施したものである。21は頸胴部界に5条のヘラ描沈線を施し、その沈線下にはヘラによる羽状文を描いている。この文様は部分的に欠落している為、不明なところはあるが、胴部半面に施したと考えられる。22は口頸部界に1条、頸胴部界に2条のヘラ描沈線をめぐらす。頸部には3条ないし4条のヘラ描縦線を描く。23・24は口頸部界、頸胴部界に4条ないし5条のヘラ描沈線をめぐらすものである。これに対し、25は2条・3条のヘラ描沈線で、沈線間の間隔は広くなっている。26～28は口縁端部に1条の沈線をめぐらすものである。26の口縁端部は1条の沈線を施した後、縦線を描く。また口頸部界の3条のヘラ描沈線下には3条ないし4条の縦線を描く。胎土は中河内地方のものにちかい。

29～34は貼り付け突帯を有する壺である。29は口頸部界・頸胴部界に2帯の貼り付け突帯を有するもので、突帯上にはヘラによる刻目が施されている。30は頸部から口縁部を意識的に打ち欠いたと思われる壺で、胴部下半には穿孔がみられる。頸胴部界には2帯の貼り付け突帯がみられ、その下には3条のヘラ描沈線が施されている。31は最大胴径39.5cmを測るもので中形の壺の中でもやや大形に属するものである。口頸部界に4条のヘラ描沈線、頸胴部界には1帯の貼り付け突帯が施されている。この突帯の下には6条の沈線がある。その6条のうち、中の4条は竹管状工具（2条の内側の間隔 2.5mm）によるもので、その両端の沈線はヘラによるものである。32は口頸部界に2帯の貼り付け突帯を有するが、突帯の間隔は他に比べ、ひろい。33は口頸部界に2帯の貼り付け突帯を有し、頸胴部界には削り出しによる段あるいは突帯が施されている。本土器は頸部が広がらず、立ちあがっていることから他の土器とは形態が異なるものである。34は口頸部界と頸胴部界に各々2帯の貼り付け突帯をめぐらすものである。突帯間の頸部には、5条と4条のヘラ描沈線が施されている。器壁に他の土器に比べ薄い。

35～41は大形壺である。口径は30～40cmを測るもので、長胴形を呈する。口縁部は短く外反し、頸部はあまり広がらないものが多い。35・36・37・40は口頸部界に削り出し突帯がみられるものである。削り出し突帯は口縁部側が深く削り出されている。37は口縁部側が不明瞭でヘラ描き沈線を上から描き、明確にしようとしている。38・39・41はヘラ描沈線を施したものである。41は



第20図　ＳＫ-215 出土土器８（Ｓ＝¼）

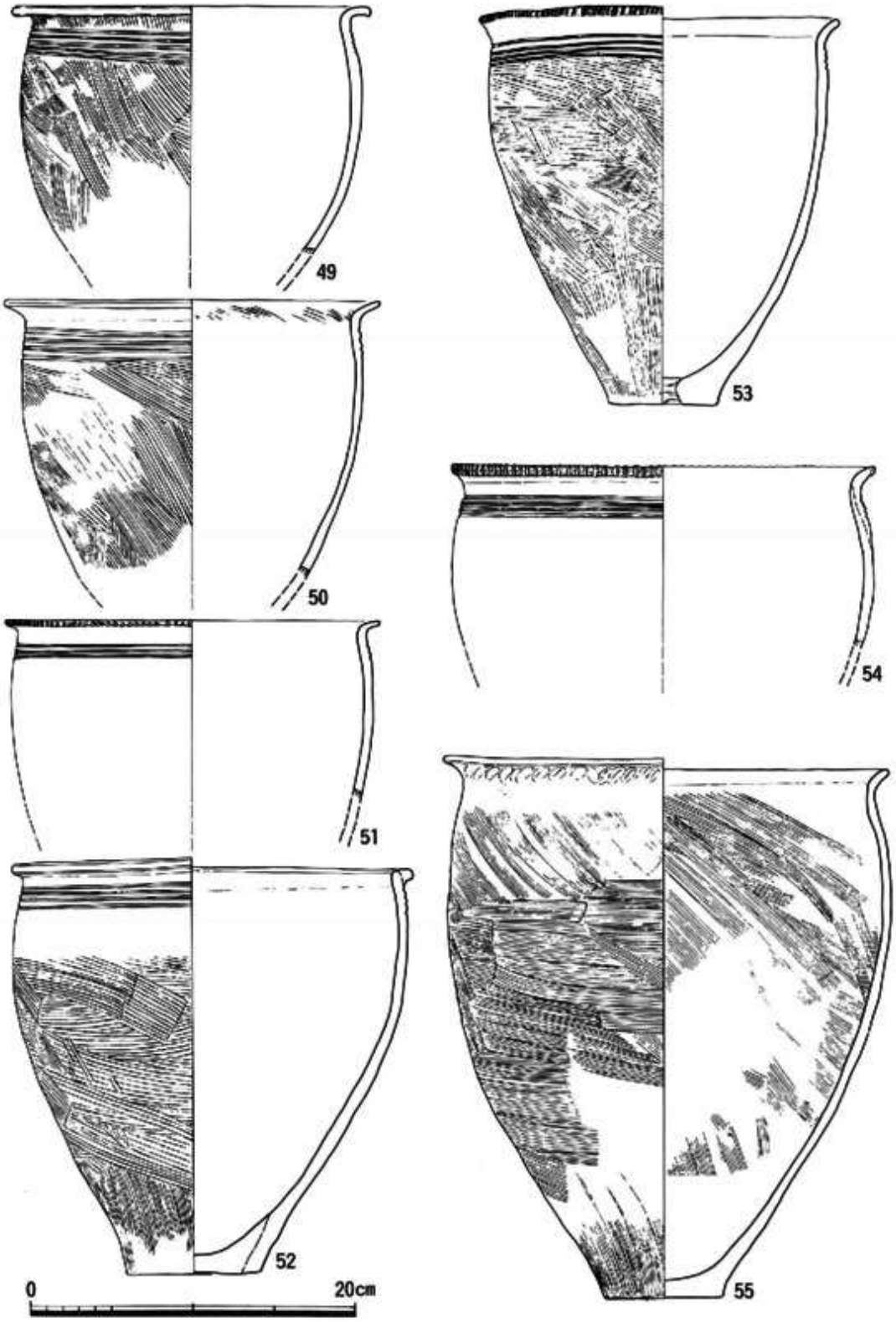
口頸部界に３条、頸胴部界に５条の沈線が描かれている。

45は小形の無頸壺である。胴径10.2cmを測るもので、口縁部は短く外反する。底部は壺の大きさに比して大きく底径 5.5cmを測る。

壺蓋　42～46は壺蓋である。42・43は円板形、44～46は笠形を呈する。各々、細かいミガキが施されている。42はつまみ部が２つ付くものである。紐孔は１個（42・44・45）と２個１対(43)のものがある。

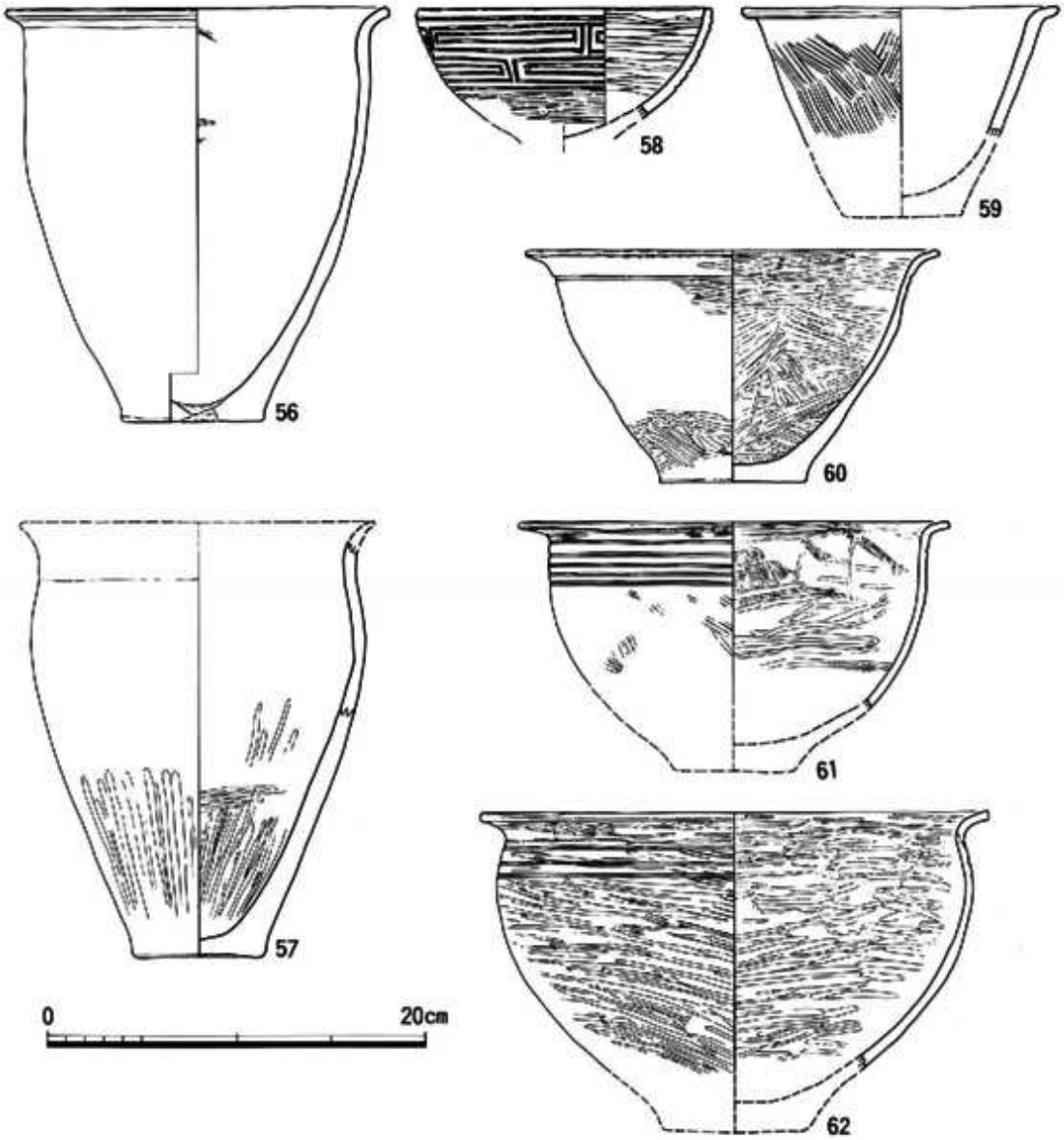
甕蓋　47は笠形を呈する甕用の蓋である。外面は縦位の細条のハケが施されているが、裾部や内面にはミガキがみられる。内面には煮沸時の煤の付着が端部から２cm程のところまでみられる。

甕　49～57は甕である。49～53・56・57は中形、54・55は大形品である。49・50はやや体部の張るタイプで、５条あるいは４条のヘラ描沈線が施されている。外面には斜位方向のハケが明瞭に残っている。この二つの甕は他の甕とハケや胎土・焼成をやや異にするものである。52は口縁が逆Ｌ字状を呈するもので、体部上端外側に小さく貼り付けをおこない、口縁部をつくっている。外面には４条のヘラ描沈線とハケがみられる。本品で注目されるのは煤の付着部位である。外面では沈線より上の口縁部に煤がみられ、それより下位には付着はない。また、内面では炭化物の付着が底から口縁部にかけてみられる。甑のような使用が考えられるものである。53は焼成後に

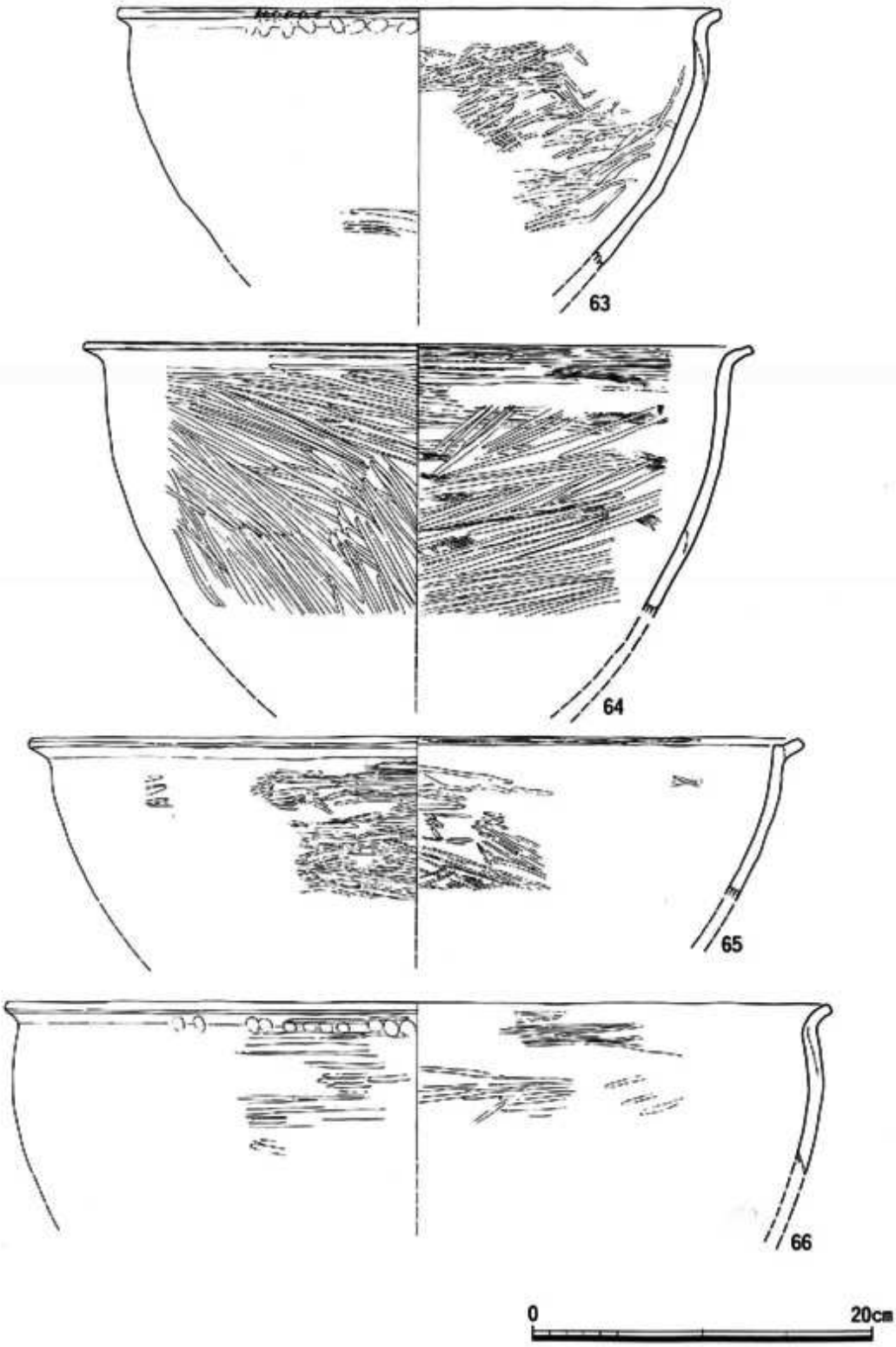


第21図　SK-215 出土土器9（S＝¼）

底部を穿孔したものである。外面はハケを施した後ナデ調整をおこなっている。煤の付着がみられる。52は内外面にハケ調整が施されている。他に比べ、器壁が薄い。口縁部は指によって作り出しており、ヨコナデがあまりおこなわれていない為、口縁部は整っていない。外面には煤の付着がみられる。56・57はヘラ描沈線をともなわない甕である。56の外面は丁寧なナデ調整がおこなわれており、体部下半から口縁部にかけて煤の付着がみられる。底部には焼成後の穿孔がみられる。57は体部下半の内外面にミガキが施されており、甕の形態であるが鉢として考えるべきものかも知れない。煤の付着はみられない。



第22図　S K-215 出土土器10（S＝¼）

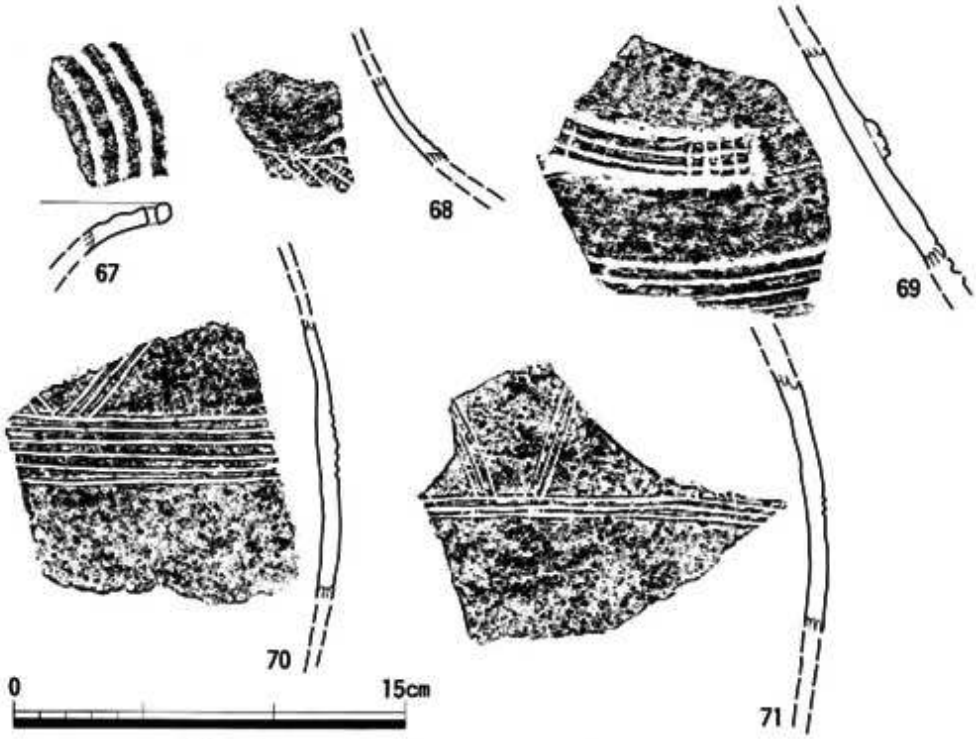


第23図　ＳＫ-215 出土土器11（Ｓ＝¼）

鉢　58～66は鉢である。59～61は小形、62は中形、63～66は大形鉢である。58は椀とも考えられるもので、形態的・文様的に類例のない資料である。外面には工字文あるいは横型流水文ともいえるようなヘラ描文様が描かれている。上・下端一条のヘラ描沈線の中を４条一組の区画文様で構成しているものである。各々一組の文様は大半が４条の沈線で区画した後、縦線で仕切り二重の長方形をつくるものである。外面には赤色塗彩の痕跡がみられる。59は二次焼成を受けているものである。60～62は体部にやや張りをもつもので、１条～５条のヘラ描沈線がみられる。61は口縁端部に局部的な刻目をつけている。59はハケ調整、60～62はミガキ調整で器面を仕上げている。63・64・66は口縁部が短く外反するもので、内・外面はあまり丁寧な調整を施していない。65は逆Ｌ字状を呈する口縁の鉢である。口縁部は上端部外側に貼りつけている。外面はわずかに削っており、その上にミガキを施している。

ＳＫ－215出土土器文様（第24図・図版18）

第24図67は中形の壺の口縁部である。口縁内面には３条の凹線がみられる。凹線はミガキによって凹ませているようである。内・外面ともミガキを施している。径４mmの紐孔が一ヵ所みられる。色調は暗褐色を呈し、本遺跡出土の他の壺とはやや色調・焼成は異なるようである。68は小形壺の頸胴部の破片である。ヘラ描による斜格子文がみられる。69は中形壺の頸胴部破片である。



第24図　ＳＫ-215 出土土器拓影（Ｓ＝⅓）

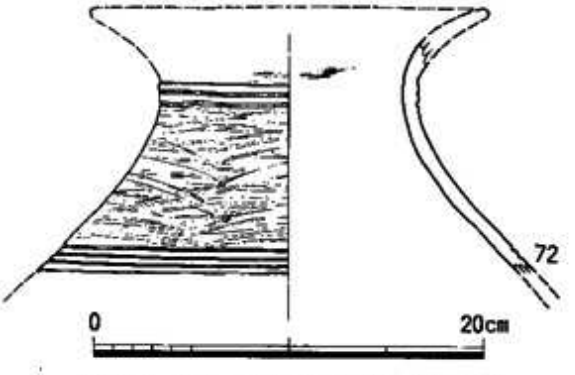
頸胴部界に削り出し突帯があり、突帯上には4条＋αのヘラ描沈線が施されている。また、頸部には扁平な貼り付け突帯があり、突帯上に2条のヘラ描沈線を施した後、数条の縦線を引く。

70・71は大形甕の体部破片である。口縁部の下側に3条のヘラ描斜線をもって山形文を描いている。その後、山形文の下端にあわせて数条のヘラ描直線文をめぐらしている。

図版18—1は中形壺の口頸部の破片で、一帯の貼り付け突帯の上下端に円形刺突（竹管状）文をを施している。2は中形壺の頸胴部の破片である。扁平な削り出し突帯とその下位に乳状突起がみられる。4は中形壺で、扁球形を呈する胴部を有する。2帯1組の貼り付突帯を頸部と頸胴部界の二ヵ所にみられる。また、この突帯を結ぐように縦の二帯の貼り付け突帯がつけられ、矩形に区画されることになる。さらにこの矩形内側には赤色顔料による区画線と渦文らしきものが描かれている。5は中形壺の胴部破片である。胴部中央には浮文による双頭渦文、また、頸胴部界には貼り付け突帯の剝落の痕跡がみられる。7は中形壺の破片である。口頸部界には削り出しの段、頸胴部界には一条の沈線がみられる。また、頸部には逆U字形の浮文が貼りつけられている。

ＳＫ—215出土搬入土器（第25図）

ＳＫ-215から伊勢湾地方産の土器を4点確認している。全て中層出土で、壺2点、甕2点である。壺は第24図—67の口縁部の破片と第25図—72の頸胴部片である。甕は第21図—49、50である。72を除く土器については、既に記述しているのでここでは省くことにする。72は口頸部界に2条、頸胴部界に4条の沈線をめぐらす。口縁部界の上端を削り出し段としている。外面には横位のミガキを施している。色調は暗赤褐色を呈し、他の唐古産の土器とは明らかに異なる。67の壺口縁も内面に凹線をめぐらす特徴をもっていることから、これらの壺は西志賀式第二類に比定できるものと考えられる。

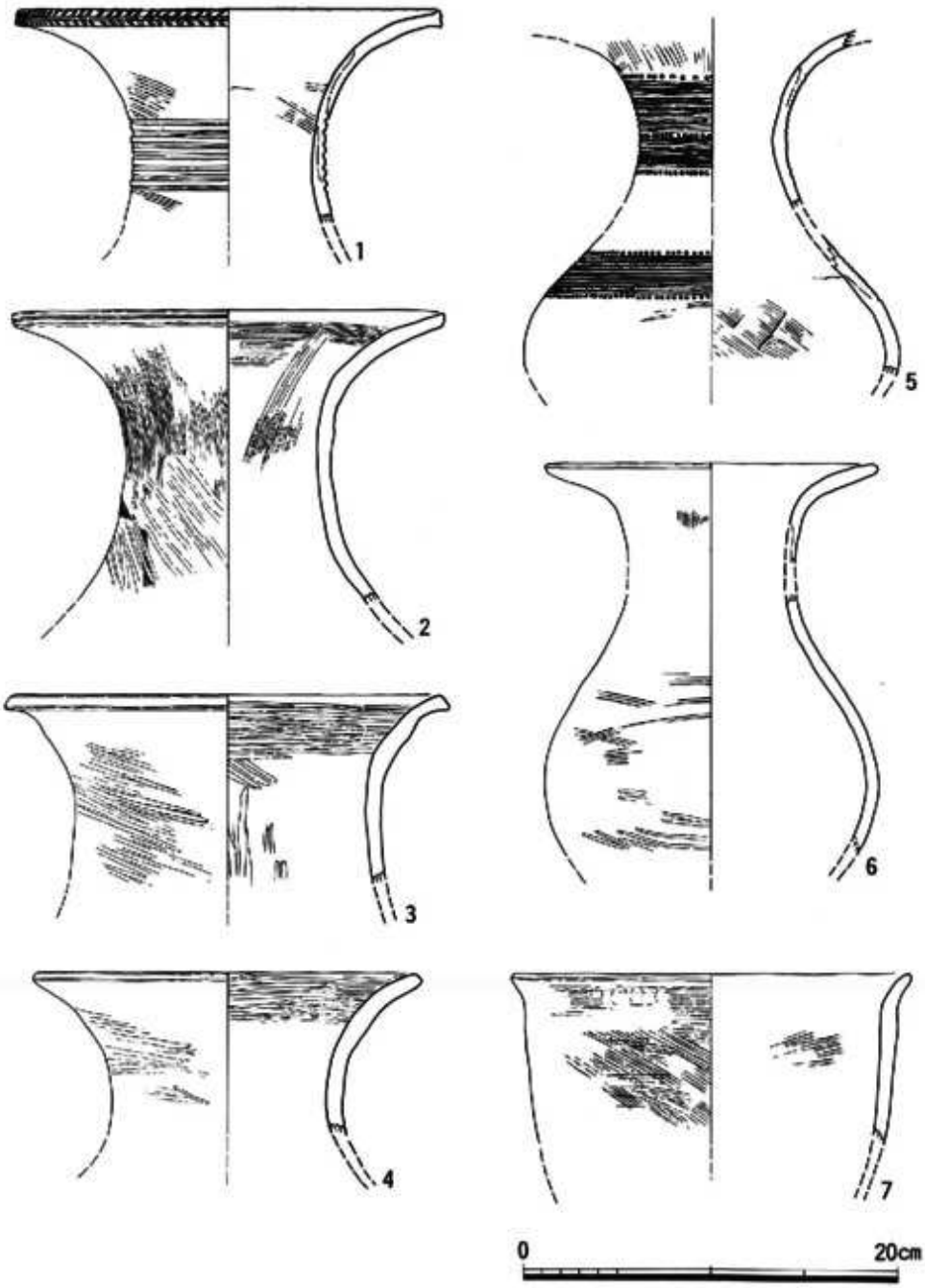


第25図　ＳＫ-215 出土土器（Ｓ＝¼）

ＳＫ—212出土土器（第26図）

第26図に示した土器はＳＫ-212の上層より出土した土器群である。暗灰色粘質土より比較的まとまった状態で出土した。本土坑の上層には櫛描文をともなう土器が小片で数点存在している。しかし、無文あるいはヘラ描沈線のものが主流を占めている。

壺　1～6は長い頸部と大きく外反する口縁部を有するものである。1～4は中形の中でもやや大きく、5・6はそれより小さい。1の口縁部は端面をもち、一条のヘラ描沈線を施した後、



第26図　SK-212 出土土器（S＝¼）

沈線の上下に斜線を描き綾杉文にしている。頸部には太めのヘラ描沈線を７条めぐらしている。２は口縁部に一条のヘラ描沈線を描いているが、頸部には文様をもたない。全体にハケ調整であるが、頸部下半にはミガキがみられる。３・４は頸部が太くなる形態である。３・４ともに文様をもたない。調整はミガキをおこなっている。５・６は同形態の壺で、５は胴部がやや扁球形を呈するものである。５は頸部に10条と７条、胴部に11条のヘラ描沈線を施している。さらに、沈線の上下端には頸部では竹管文（円形の一端が欠けている）、胴部では円形刺突文を押圧している。６は無文の壺である。ハケ後ナデを施し、胴部下半にはミガキがみられる。

甕　７は甕である。全体に器壁が厚く、口縁部の外反もゆるやかである。外面にはハケ調整がみられる。

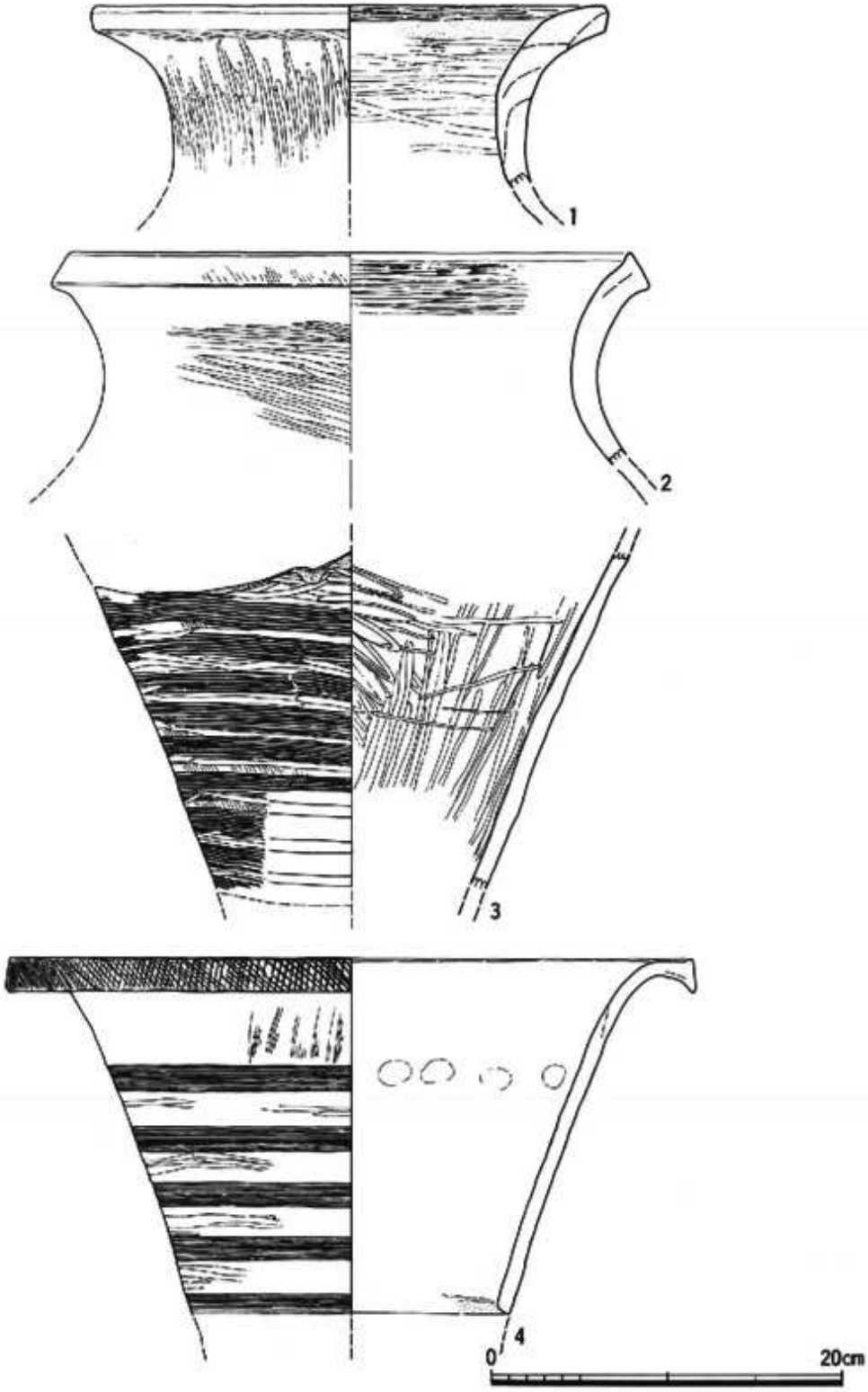
ＳＸ－101出土土器

ＳＸ-101の土坑より出土した遺物は今回の調査で出土した土坑遺物の中で最も多い量である。本土坑は井戸と考えられるが、井戸が埋没する過程で、随時土器廃棄がおこなわれている。埋没土層は幾層にも分層されるが、土坑中位に存在する灰色粘土層とその上位の植物層をもって土層の形成は大きく異なる。土層間の土器接合もこれによってほぼ分かれるものである。この植物層より上位の土器を上層土器として、また、灰色粘土層より下位の土器を下層土器としてとりあつかうことにする。上層土器と下層土器の間では明確な器種の消長はみられないが、セリエーションとしてとらえるならば、注目すべき資料となろう。第Ⅲ様式の良好な土器群とみなされるものである。

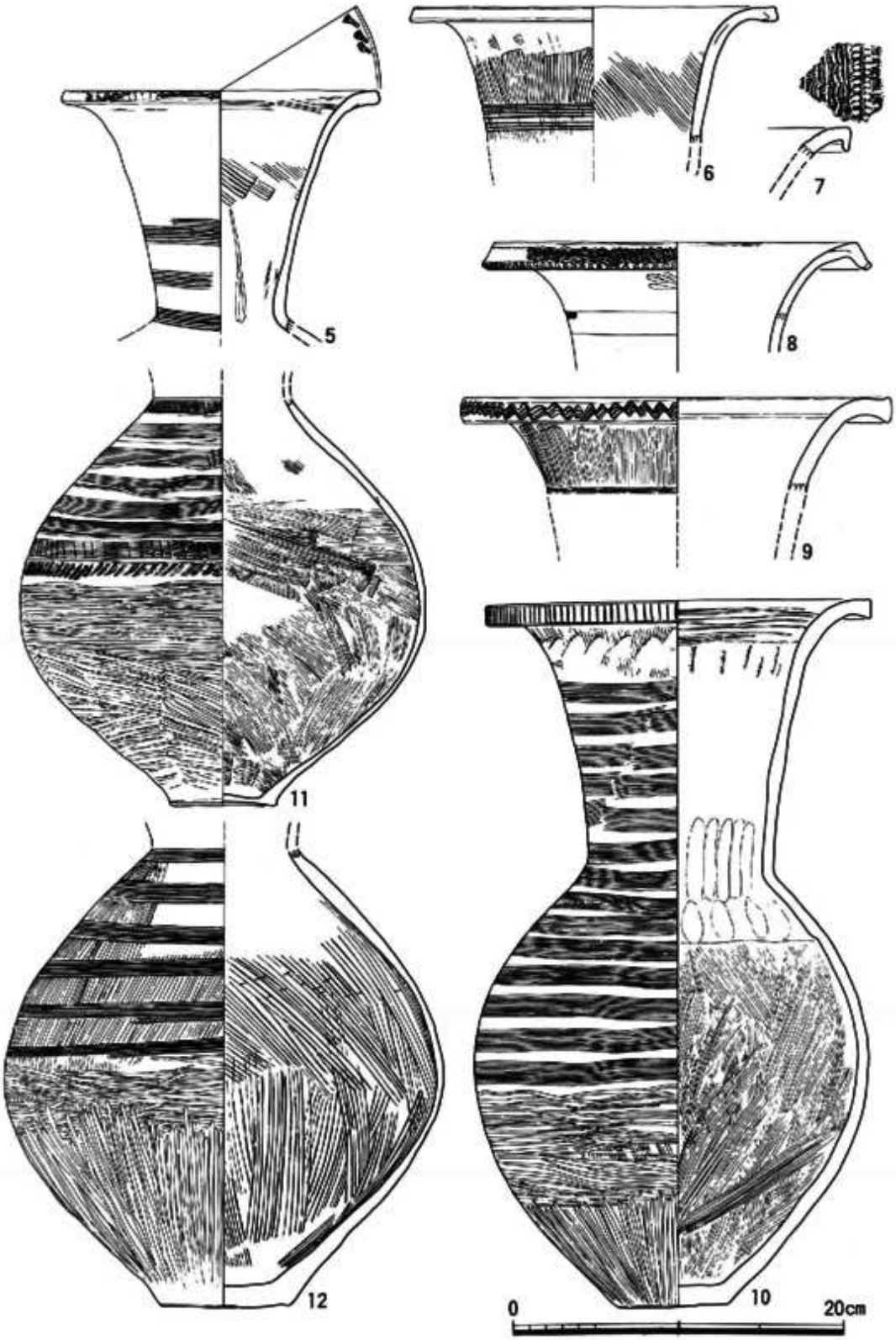
ＳＸ－101下層出土土器（第27～32図）

壺　１・２は広口壺の大形品である。両者とも器壁が厚く、口縁部は端面をもつ。２の口縁端部は内側にわずかに立ち上がる。本土器は色調が淡灰褐色を呈し、在地産とは異なる。

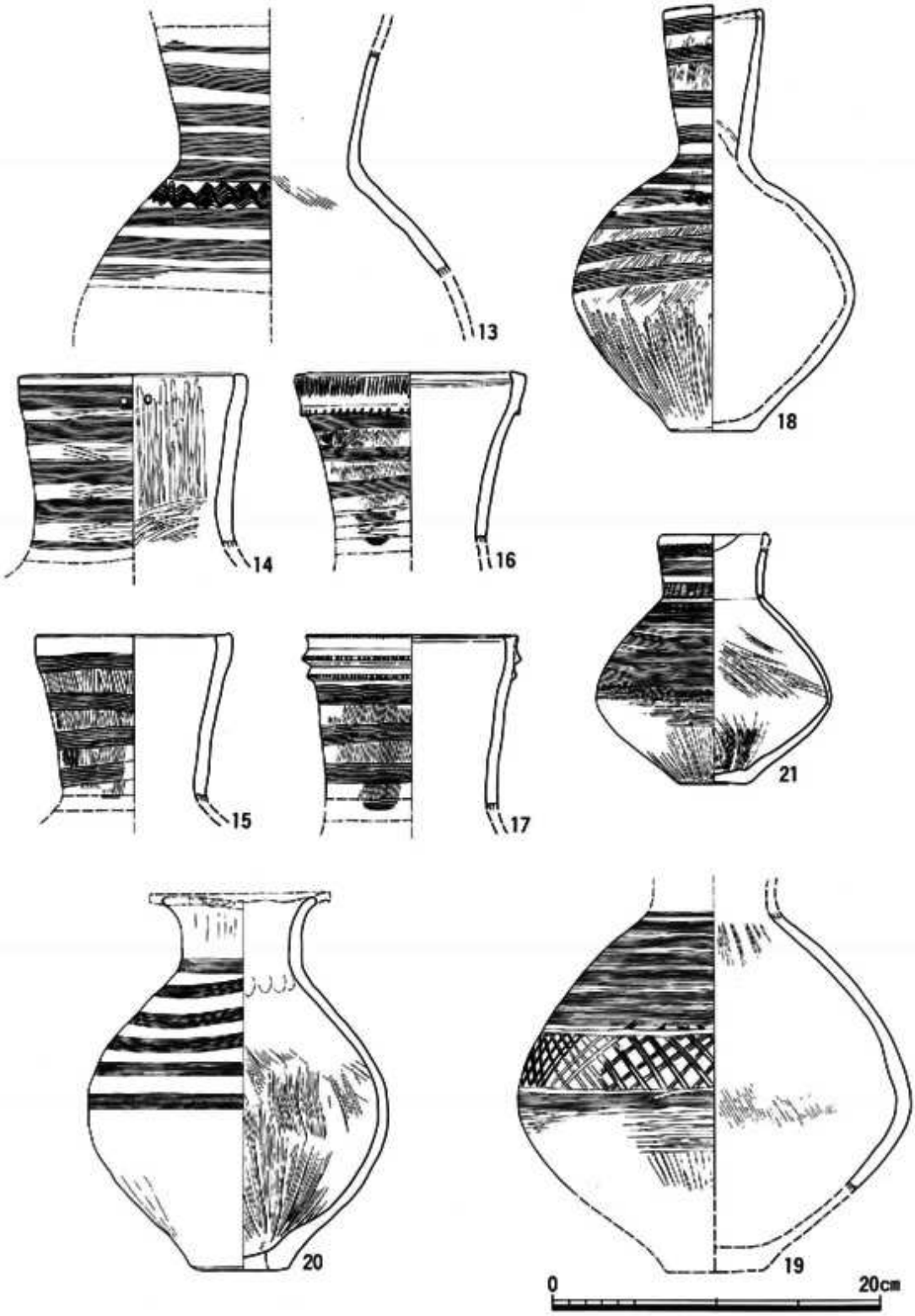
３～13は広口長頸壺である。３・４は大形で、頸部のみの破片である。外面には櫛描直線がみられ、文様間にはミガキが施されている。４の口縁部は上下に肥厚し、端面にはヘラによる斜格子文が施されている。この二点の土器はともに二次転用されたと考えられ、３は頸部上端、４は頸部下端の破面を磨いている。５～９は口縁部の破片である。口縁部は５・６のように肥厚しないもの、７・８のように垂下するもの、９・10のようにわずかに上下に肥厚するものの３種がある。端面の施文は５・８・９が櫛描波状文、７がヘラ描烈点、10が櫛描烈点である。胴部の文様はいずれも櫛描直線文である。７の口縁部は上端に刻目、口縁内面には粗いハケを施した後、太い櫛描波状文をめぐらしている。近江系の土器と思われる。10は完形品である。頸部から体部上半にかけて櫛描直線文が14帯描かれている。文様間のミガキはみられない。内面の体部下半には炭化した植物遺体がみられるが、未鑑定の為、不明である。11，12は体部のみの破片である。11の櫛描文は上から簾状文、直線文５条、簾状文、烈点で文様間にミガキを挿入している。体部下



第27図　ＳＸ-101 下層出土土器１（Ｓ＝¼）



第28図　S X-101 下層出土土器 2 （S＝¼）



第29図　S X-101 下層出土土器 3 （S＝¼）

半は横位のミガキを施している。全体に器壁は薄い。12は体部上半に櫛描直線文を6条描いている。体部中位に横位のミガキを施した後、下半に縦位のミガキを施している。内面はハケ調整で、局部的な圧痕を残している。13は頸部から体部上半にかけての破片である。外面は櫛描直線文が主体であるが、体部上半には1条の波状文を描いている。文様間のミガキはみられない。

14～17は直口壺である。口縁部下に突帯をめぐらすもの（16，17）と突帯を有さないもの(14，15）がある。これらの頸部文様は櫛描直線文である。14は文様間にミガキがみられるほか、内面もミガキを施しており、他の3つの土器とは異なる。また、口頸部上端には紐孔があけられている。16は口縁下に一条の突帯を垂下させ、刻目をつけている。口縁部には櫛描刻点をめぐらしている。17は口縁下に2条の貼り付け突帯をつけ、突帯上と口縁部に刻目を施している。口縁部は16と同様に内側に肥厚させている。

18・19は細頸壺である。18は完形品である。18はほぼ球形の体部に細頸がつくもので、口縁部はわずかに内湾する。外面には10帯の櫛描直線文が施されている。文様間のミガキはみられない。体部下半には縦位のミガキが施されている。19はやや大形で、体部の破片である。体部上半と下端に櫛描直線文をめぐらし、直線文の間に3条一対の単位をもつ斜格子文を施す。さらに各文様間には太めのミガキを充填している。内面はハケ後、ナデている。また、櫛描を描く時に内側に手をあてた痕がみられる。

20は広口壺である。口縁端部を欠失しているが、欠失後も使用していたため、煤の付着がみられる。体部にも煤が付着しており、体部下半は火熱による器面の剥落が激しい。体部上半には6帯の櫛描直線文が描かれている。

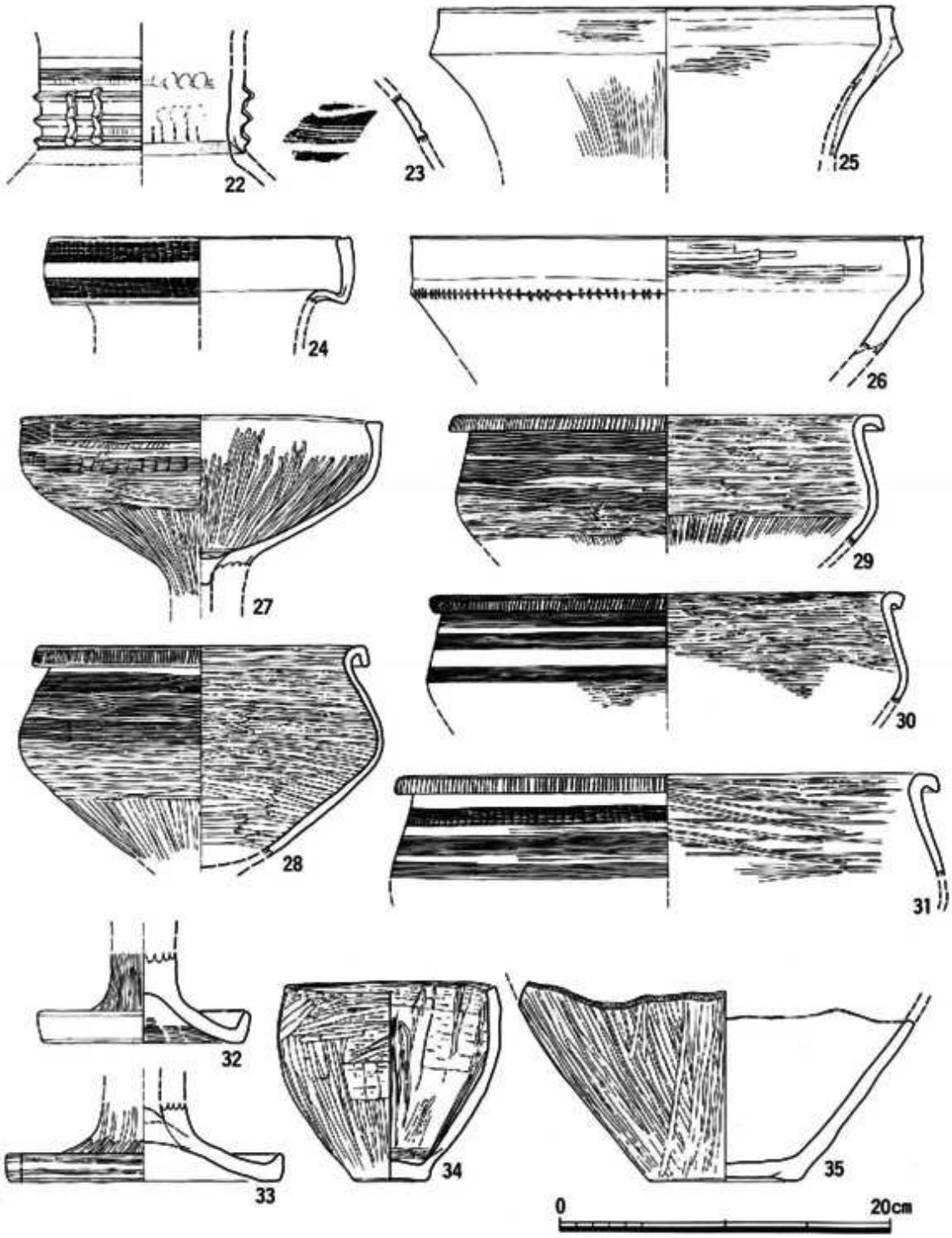
21は水差し形土器と思われる土器である。外面は櫛描直線文を主体とし、上・下端に波状文、頸部に2帯の簾状文を描いている。体部の文様間にはミガキが施されている。体部下半は縦位から横位のミガキを施している。さらに体部下半には局部的な磨滅痕がみられ、水差形土器特有の磨滅痕と一致する。内面は粘土をかきとるようなハケを施し、その後ナデ調整をおこなっている。

22は細頸壺と考えられる頸部破片である。頸部下端に3帯の貼り付け突帯と2条の縦位の棒状浮文をつけている。突帯の上・下には櫛描直線文がみられる。頸部下端は欠損後の磨滅がみられ、何らかに転用されたのであろう。

23は壺胴部の破片と思われる。1帯の櫛描直線文を描いた後、その上・下に凹線を施している。上の凹線は波状を呈するようである。これらの施文の後、丁寧なミガキを施し、赤色塗彩をおこなっている。内面は剥落の為調整は不明である。尾張地方からの搬入土器と考えられる。

24～26は受口状の壺である。24は受口部の屈曲がきつい。口縁部には2帯の簾状文を施している。25・26は頸部が広がり、口縁部がやや内側に立ちあがるものである。26の口縁下には刻目を施している。全体にハケ後、ナデ調整をおこなっている。

鉢　27は鉢部が完形である。口縁部の折り返しをもたないもので、内側に肥厚している。外面



第30図　ＳＸ-101 下層出土土器４（Ｓ＝¼）

には櫛描直線文と簾状文が描かれ、その間にはミガキが施されている。体部下半は縦位のミガキの後、横位のミガキを施している。脚部は欠失しているが、円盤充填がみられる。28～30は口縁部を折り曲げているもので、口径が20～30cm前後のものである。口縁部の折り曲げはまだ体部に密着していない。端部は櫛（29）あるいはヘラ（28・30・31）で烈点を施している。体部は大半が櫛描直線文で、31の上端のみ簾状文である。文様間はミガキをおこなっている。

32・33は鉢あるいは高杯の脚部である。両者とも脚端部は上方へ大きく突出している。32の脚柱部は中実、33は中空で円盤充填部が剝落している。

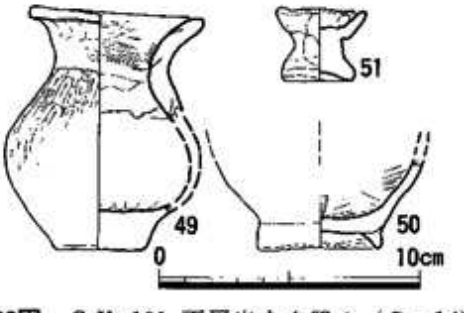
34は完形品で、厚手の粗雑な鉢である。外面は縦位のミガキの後、横位のケズリを上半に施している。さらにケズリの上にミガキが施されている。内面にもケズリ痕がみられる。ミガキは雑におこなっている。底部も削っている。35は甕の体部下半である。上部欠失後、破面を磨き、鉢として転用している。外面にはミガキがみられる。内面は器面が剝落している。

甕　36～41は小形の甕である。36・38・41は体部が張るもので、これに対し、37・39・40は体部が張らないものである。また、口縁部が外方へ肥厚するもの（36・38・39・40）としないもの（37・41）がある。前者は口縁端部まで粗いハケがみられ、内面は横ハケが施されているのに対し、後者は口縁部にヨコナデが強く施される為、ハケは残されない。39は口縁外面の上・下にハケ状工具による刻目、内面には烈点状にハケを用いている。41は口縁部の屈曲が明瞭である。煤の付着はみられない。

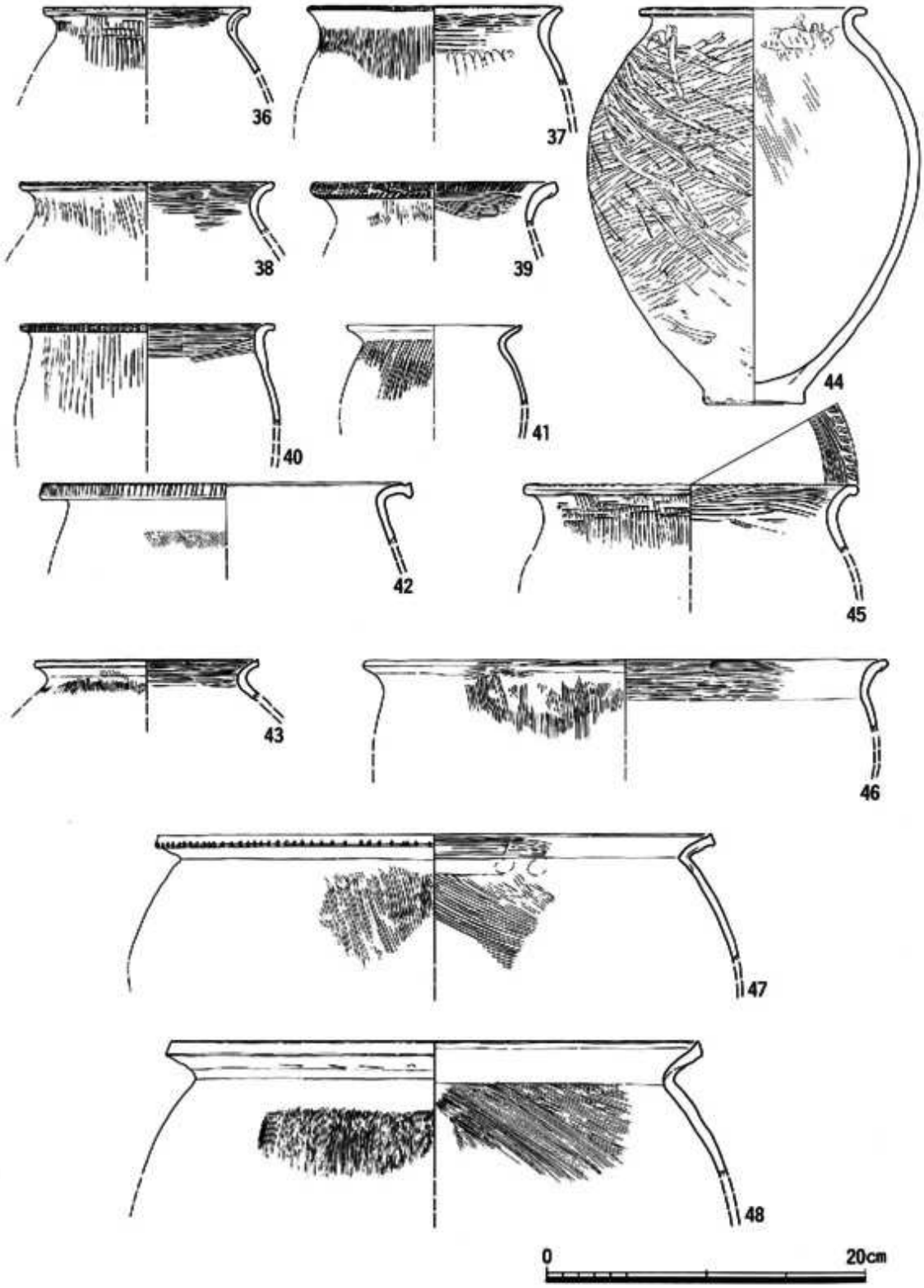
42～45は中形の甕である。42は口縁部が大きく外反し水平になるもので、端部はハネ上げ口縁となっている。ヨコナデが発達しており、ハケは体部上半にみられるだけである。端部はハケ状工具による烈点がみられる。43・44は体部が大きく張るタイプである。43の口縁部は端面を有し、わずかなハネ上げ口縁となっている。外面は強くヨコナデを施し、内面は粗い横ハケをもちいている。44の甕は第13次調査ＳＤ－06最下層出土土器と接合したもので、溝と土坑の貴重な接合資料である。口縁部は短く外反し、ヨコナデが施されている。外面は全体にケズリをおこない、その上にミガキを施している。内面もわずか削っているが、ハケ後ナデ調整をおこなっている。45は口縁端部をわずか肥厚させ、上端にハケ状工具による烈点を施している。内外面とも粗いハケによる仕上げである。

46～48は大形の甕である。46は口縁端部を肥厚させ、ハケによって仕上げている。47・48はヨコナデ手法の発達したもので、口縁端部はわずかに肥厚している。内外面ともにハケがみられるが、ナデ調整をおこなっている。47の口縁端部にはハケ状工具による刻目が施されている。

ミニチュア土器　49・50は壺のミニチュアである。49は全体に器壁が厚いが、体部は外面を削っ



第32図　ＳＸ-101 下層出土土器６（Ｓ＝⅓）



第31図　ＳＸ-101 下層出土土器５（Ｓ＝¼）

ており、やや薄くなる。口縁部内面はハケ後ナデ調整をおこなっている。50は底部に高台が付くもので、高台は貼り付けた後ケズリとナデで整えている。体部外面は器面剥落の為、調整は不明である。内面にはハケがみられる。51は手づくね土器で、大きな台部に小さくつくり出した鉢部がのっている。全体に指頭痕がよく残っている。

ＳＸ－101上層出土土器（第33～42図）

壺蓋　1は笠形を呈する壺用蓋である。外面はハケをおこなった後、ケズリ、さらにミガキを施している。裾端部は強いヨコナデをおこない、端部はわずかに肥厚している。内面はハケ後ナデ調整である。紐孔は2個一対と思われるが、一孔は一度穿孔を失敗して粘土を充塡してからもう一度穿っている。

壺　2～8は広口壺である。2～5は口縁部・体部に文様をもつもの、6～8は文様をもたない壺である。2は小形壺で、口縁部に櫛描波状文、体部に直線を施している。3は口縁端部が肥厚し、ハネ上げ口縁となっている。口縁の上面には櫛描烈点を施している。また、頸部の体部の界には簾状文をめぐらしている。4・5も3と同様の壺であるが、頸部は直立ぎみである。5は口縁部に強いヨコナデが施されている。口縁部に櫛描波状文、体部に直線文が施されている。

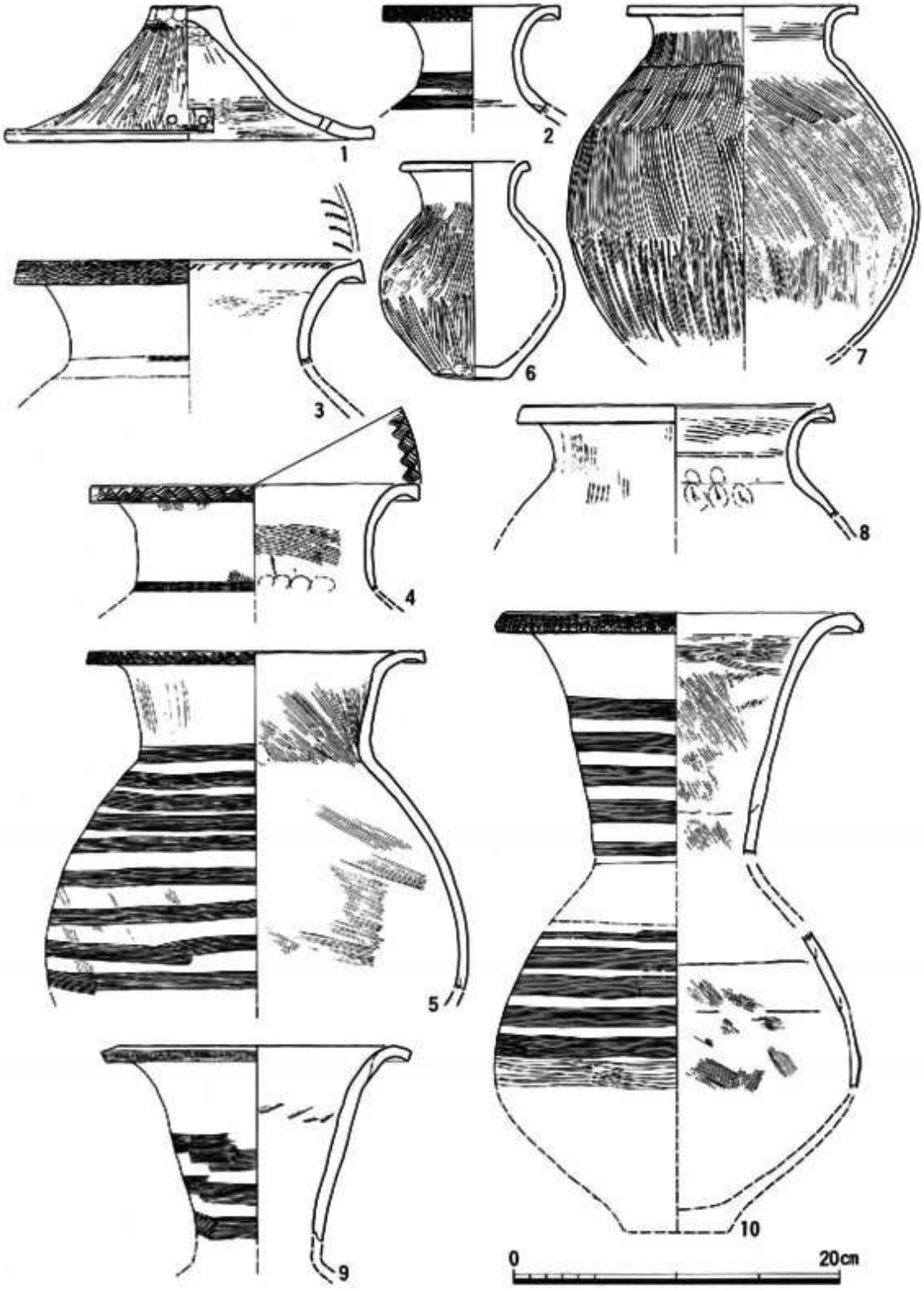
6は小形壺で完形品である。体部下半にはミガキがみられる。口縁部にはヨコナデが施されている。体部下半には煤の付着がみられる。7は全体をハケで仕上げている。体部下半にはミガキ、口縁部にはヨコナデが看取される。外面には煮沸に伴う煤の付着がみられる。8は7に比べ、器壁が厚く、口縁端部はハネ上げ口縁となっている。

9～17は広口長頸壺である。9～15は頸部に文様をもつもの、16・17は文様をもたないものである。また、9・12・14は小形、10・11・13・15は大形である。口縁部は櫛描波状文と簾状文がある。10は口縁部を下方へ垂下させ、端部に刻目を入れている。広口長頸部の体部文様は直線文で文様間のミガキはみられない。17は頸部にヘラ記号的なものがみられる。

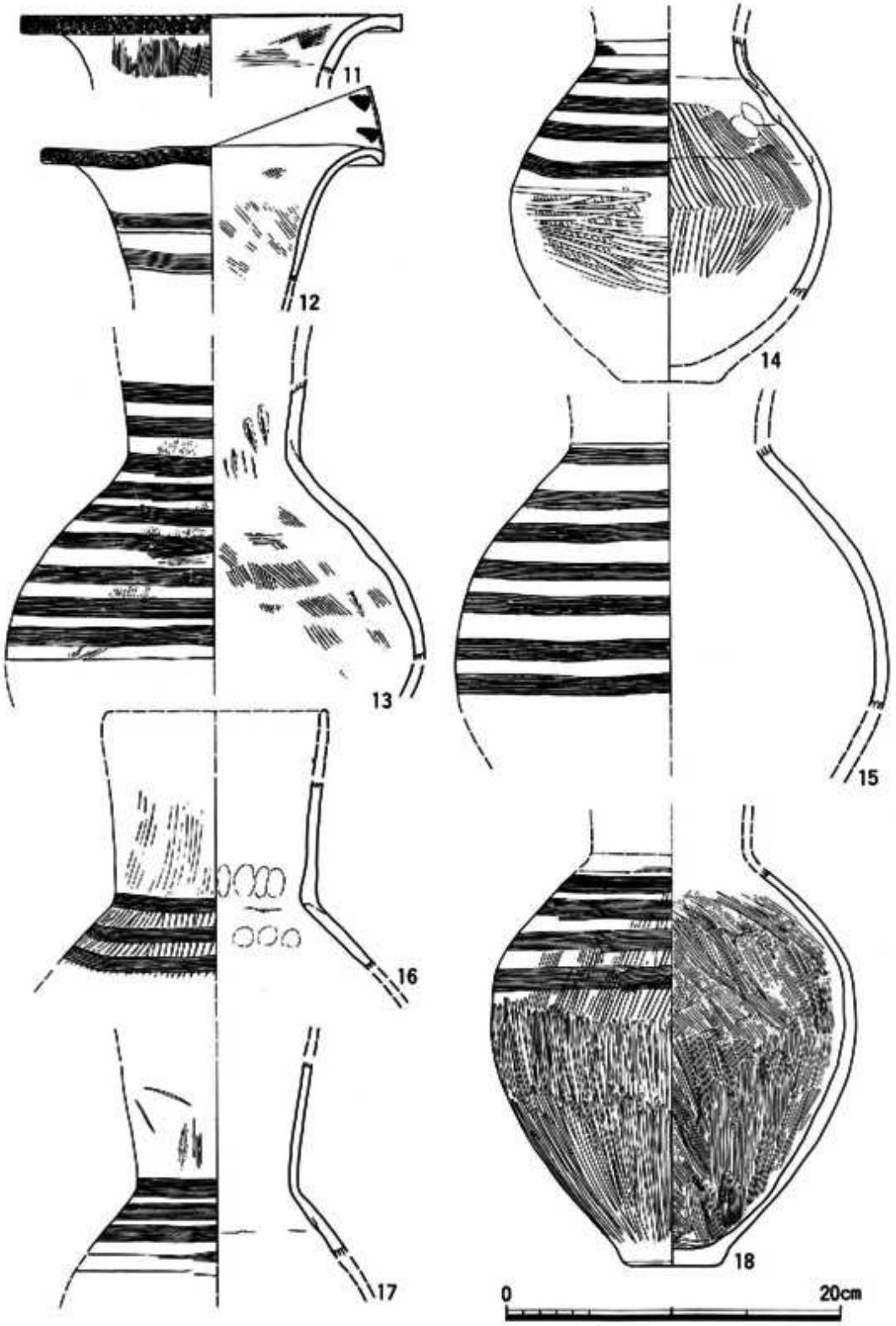
18・19は直口壺である。18は頸部の破片で直線的に立ち上がるものである。文様は櫛描直線文を施す。18は体部の破片である。外面はハケを施した後、上半に直線文、下半にミガキ調整をおこなっている。内面はハケを施している。

20～26は細頸壺である。22・25は小形、20・21・23・26は中形、24は大形である。口頸部は細く立ち上がる頸部に内湾する口縁部を有する。20にみられる文様は真正の櫛原体ではないもので直線文と波状文を描いている。21は口縁部に櫛描波状文、頸部に直線文、頸部下端に簾状文を施している。22は文様をもたない。口縁部にはどれも強いヨコナデが施されている。23～26は体部の破片である。23は頸部欠損後に破面を磨き使用している。文様はバリエーションがあり、直線文・簾状文・斜格子文・波状文・烈点文などが組み合わされている。文様間にはミガキがみられる。25は体部下半に穿孔がみられる。

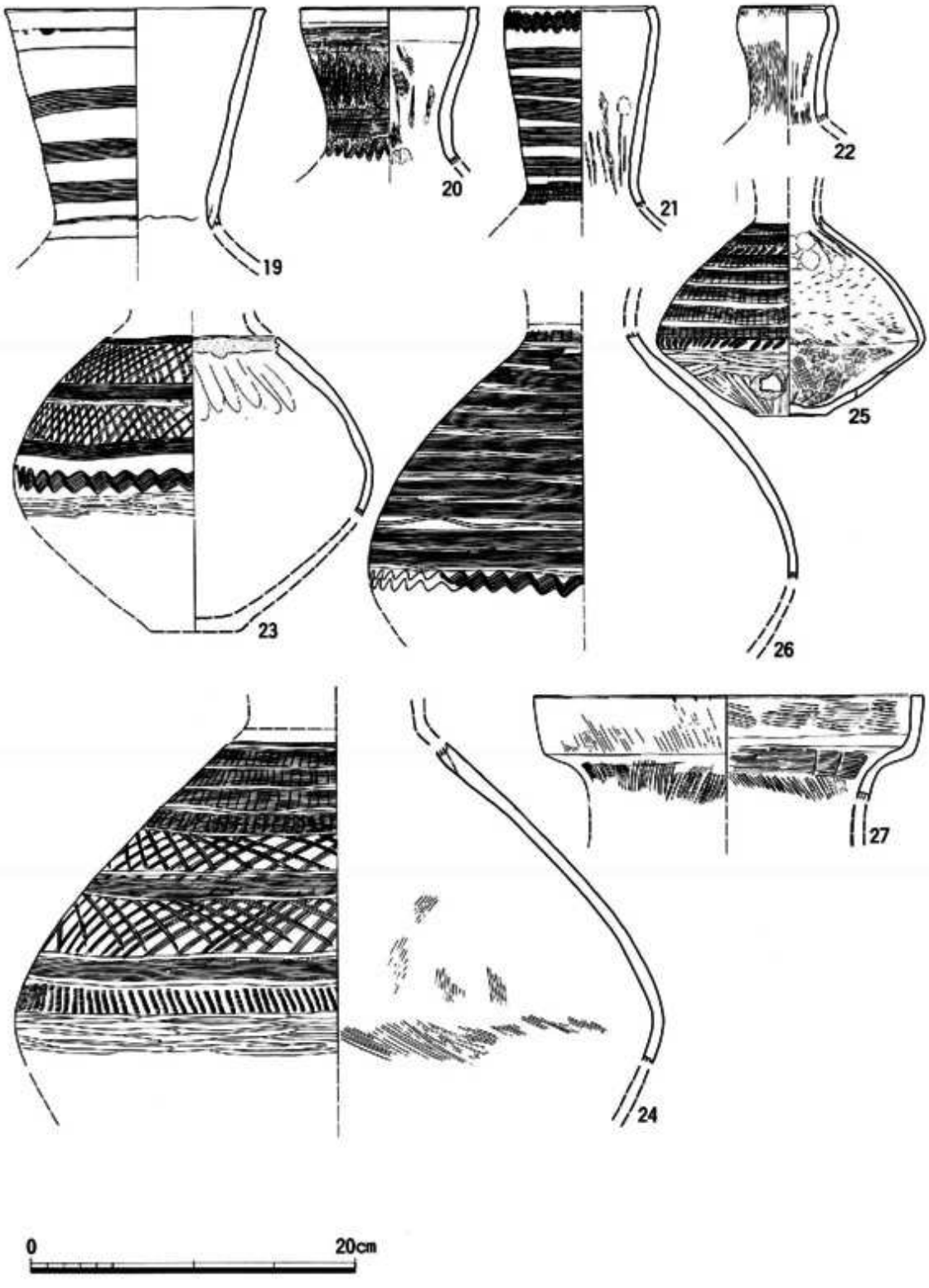
27～29は短頸壺である。27は粗いハケ調整後にナデが施されている。口縁部には局部的な弱い



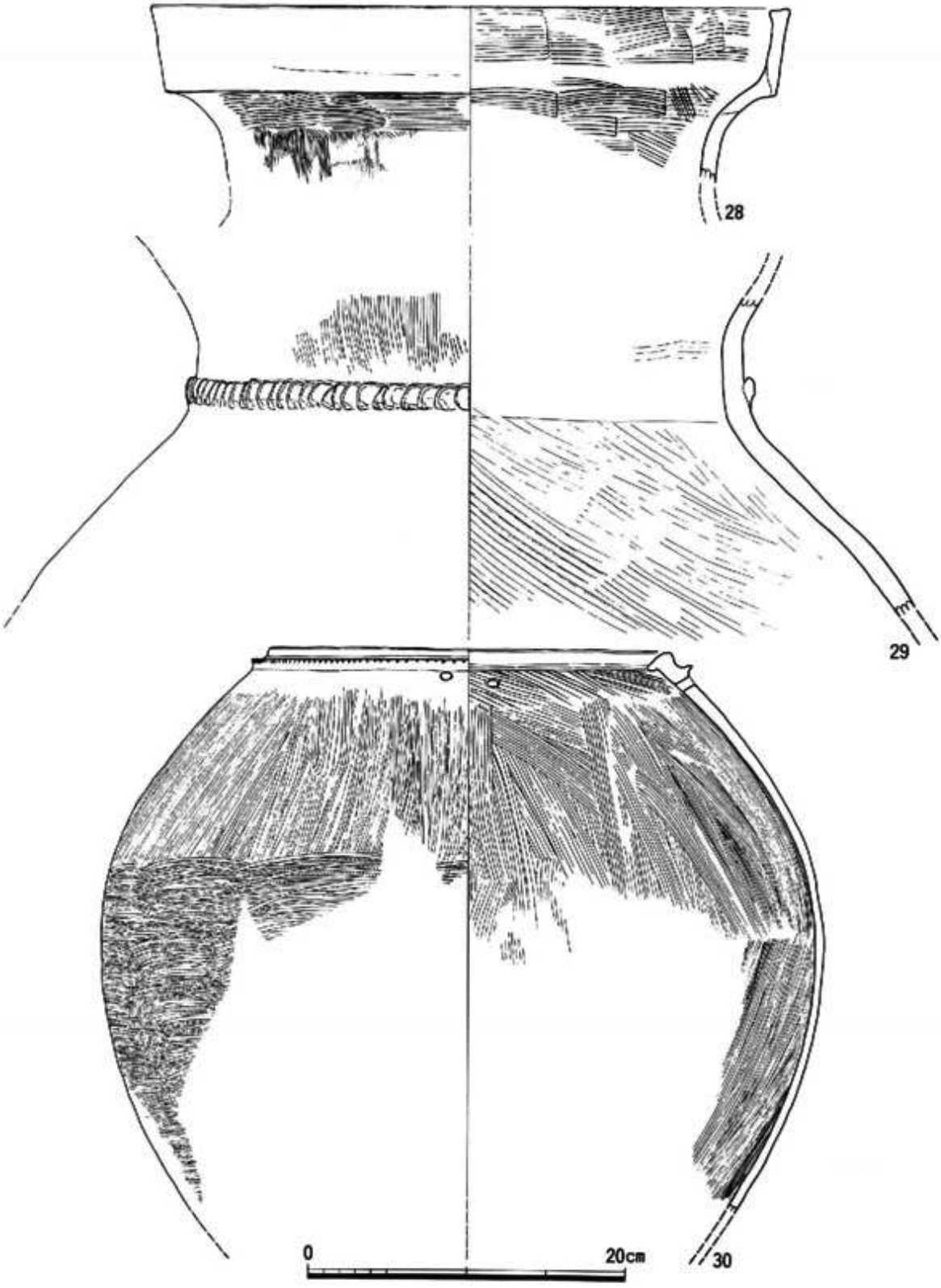
第33図　S X-101 上層出土土器1（S＝¼）



第34図　S X-101 上層出土土器 2 （S＝¼）



第35図　S X-101 上層出土土器 3 （S＝¼）



第36図　S X-101 上層出土土器 4 （S＝¼）

刻目がつけられている。28・29は大形品である。28は頸部から口縁部が明確に屈曲する。29は頸部下端に粘土の貼り付けをおこない、指頭圧で文様化している。

30は無頸壺である。球形の体部を有し、口縁部はヨコナデによって内方へ突出している。また、口縁部下には断面三角形の鋭い突帯がめぐっている。突帯上には刻目が施されている。体部はハケによって仕上げ、外面の下半は横位のミガキが施されている。全体に器壁は薄い。

31～33は水差形土器である。31は把手部の小形である。貼り付けによる把手を有し、上面・側面に櫛描烈点を施す。頸部・体部上半は簾状文、その下は直線文である。32は体部がやや扁球形を呈すものである。把手は挿入法によるものである。体部は全体に簾状文を施し、その下端には波状文をめぐらしている。33は球形にちかい体部を有し、貼り付けによる大きな把手をつけている。文様は上下両端に櫛描波状文、くびれ部に簾状文、その間を直線文をもって充填している。体部下半には縦位→横位ミガキがみられる。34は摂津から搬入された壺と考えられる。

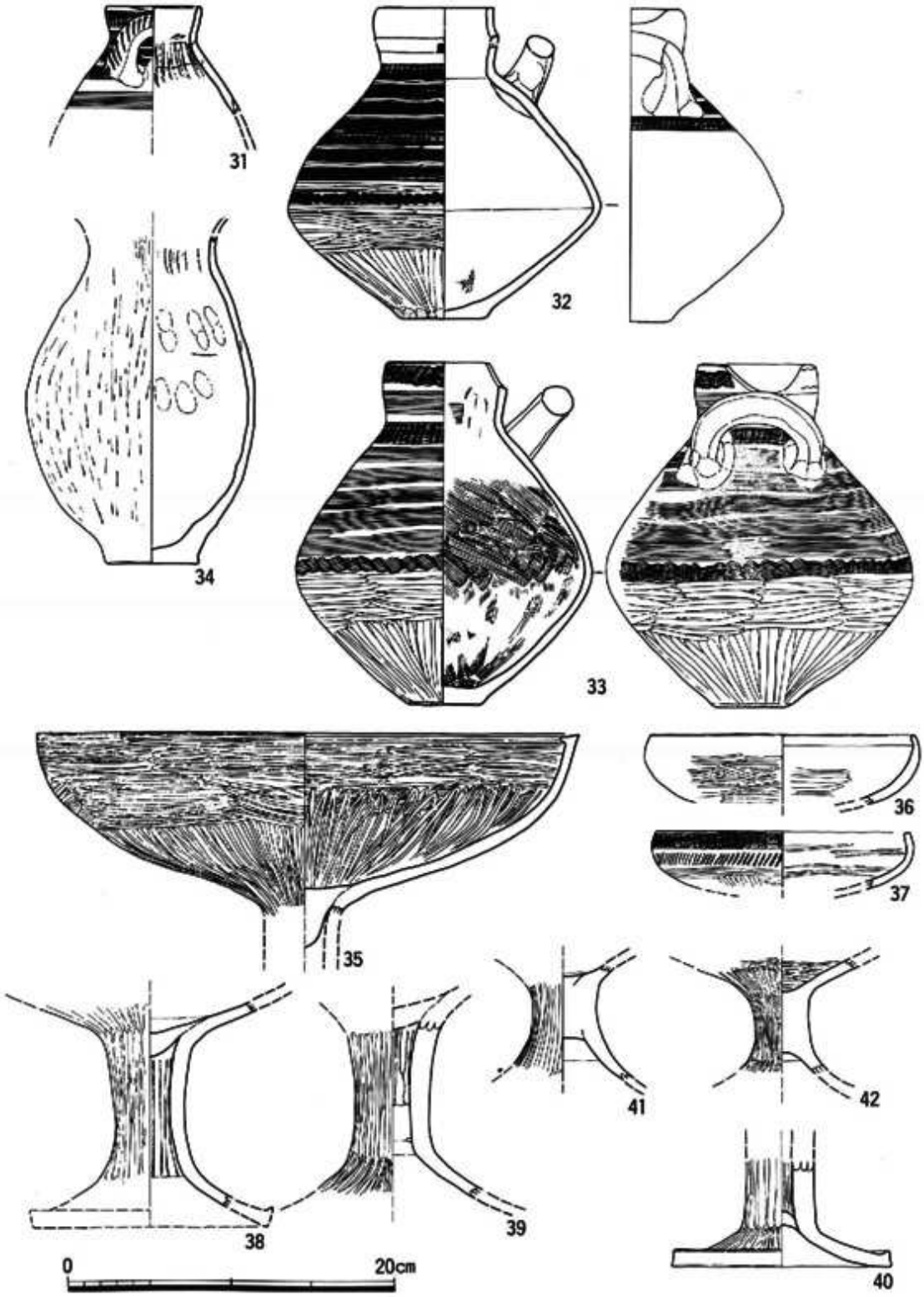
高杯　35～37は杯部、38～42は脚部の破片である。35は杯部が完存しており、保存状態の良好な優品である。口径33.5cmを測る大形高杯である。杯部は椀状を呈し、口縁部は内側へ肥厚する。脚柱部部分には円盤充填がみられる。杯部下半の内外面は放射状のミガキ、また、上半は横位のミガキを丁寧に施している。内面は燻したように黒色を呈している。35・36は小形品で、内湾する口縁部を有している。36は口縁部をヨコナデ、37は櫛描簾状文と烈点文を施している。

38～40は中空、41・42は中実の脚柱部である。38の脚柱部外面はケズリの後ミガキを施している。また、内面にはしぼり痕が残っている。円盤充填は剥離している。40は裾部の円盤充填もおこなっている。41・42は短い脚部である。

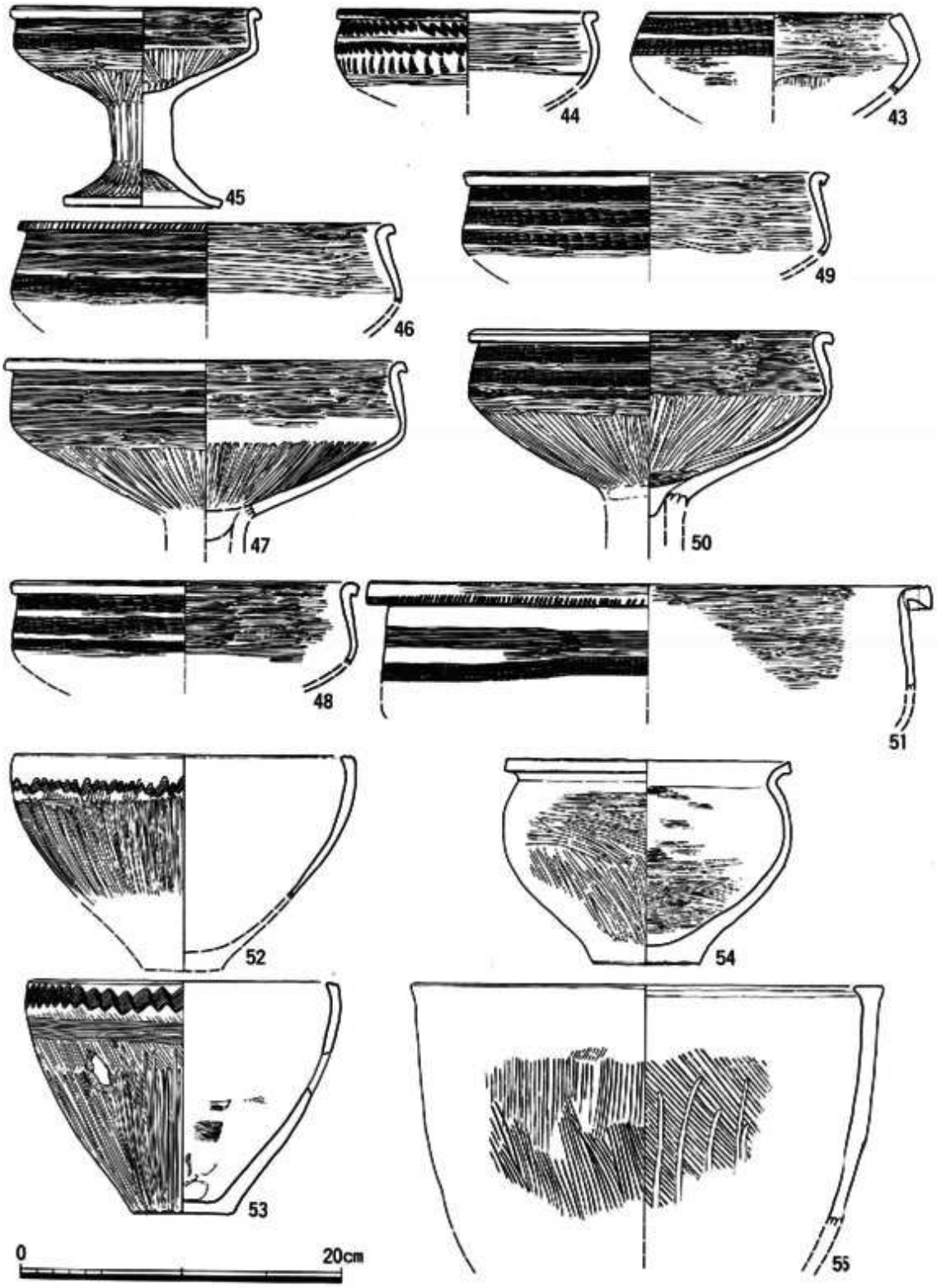
鉢　43～51は台付鉢と考えられるものである。43は口縁部の折り返しをもたないもので、内側へわずかに肥厚し、端面を有する。鉢部は明瞭に屈曲する。櫛描簾状文を2帯めぐらしている。44～51は口縁部を折り返すもので、鉢部に明瞭な屈曲をもたないもの（44）ともつもの(45～51)に分かれる。44は櫛描波状文をめぐらし、下段に扇形文を描く。波状文の間にはミガキがみられる。後者の45～51の鉢は大きさによって小（45)、中(46～50)、大(51）の三大別できる。これらの土器は形態・文様・調整において大差はない。鉢部の立ち上がり部分はやや内傾し、口縁部の折り返し部は鉢部と接着していない。文様は櫛描直線文・簾状文が主体に施されている。文様間にはミガキが挿入されている。内外面ともに丁寧なミガキ調整が施されている。

52・53は椀形の鉢である。半球形の体部に内湾する口縁部が付く。52は櫛描波状文、53は波状文と直線文が描かれている。52は体部下半にケズリを施した後ミガキをおこなう。53は体部中央に穿孔がみられる。54は扁球形の体部に外反する口縁が付く。体部外面や体部下半の内面にはミガキがみられる。口縁部はヨコナデを施す。55は円筒状にちかい体部を有する鉢と思われる。口縁部はヨコナデを施し、内方へ突出する。内外面ともハケがみられるが、内面には粗いミガキが施されている。

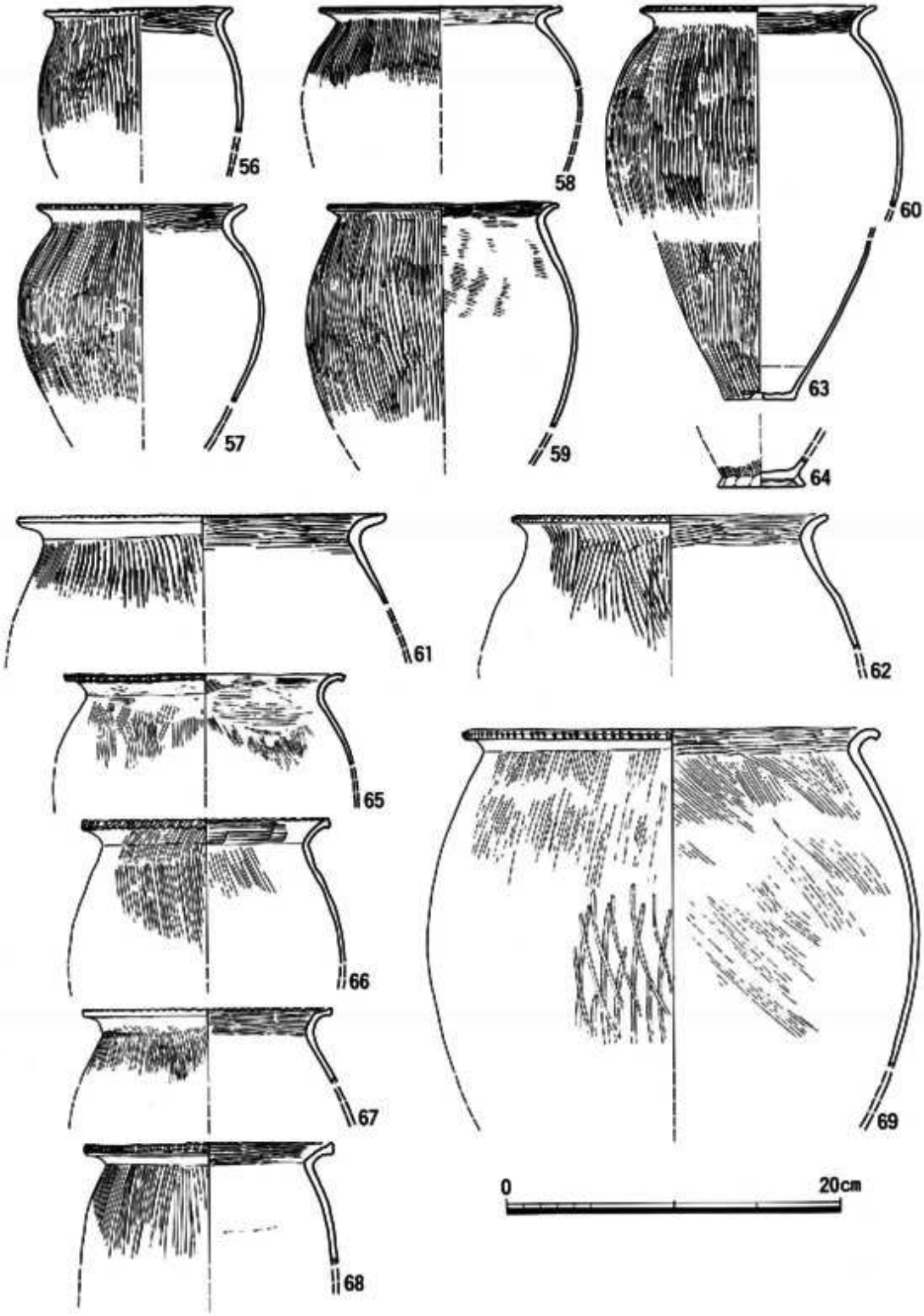
甕　甕はその形態・調整手法から五大別できそうである。56～62は口縁と体部の界が不明瞭で、



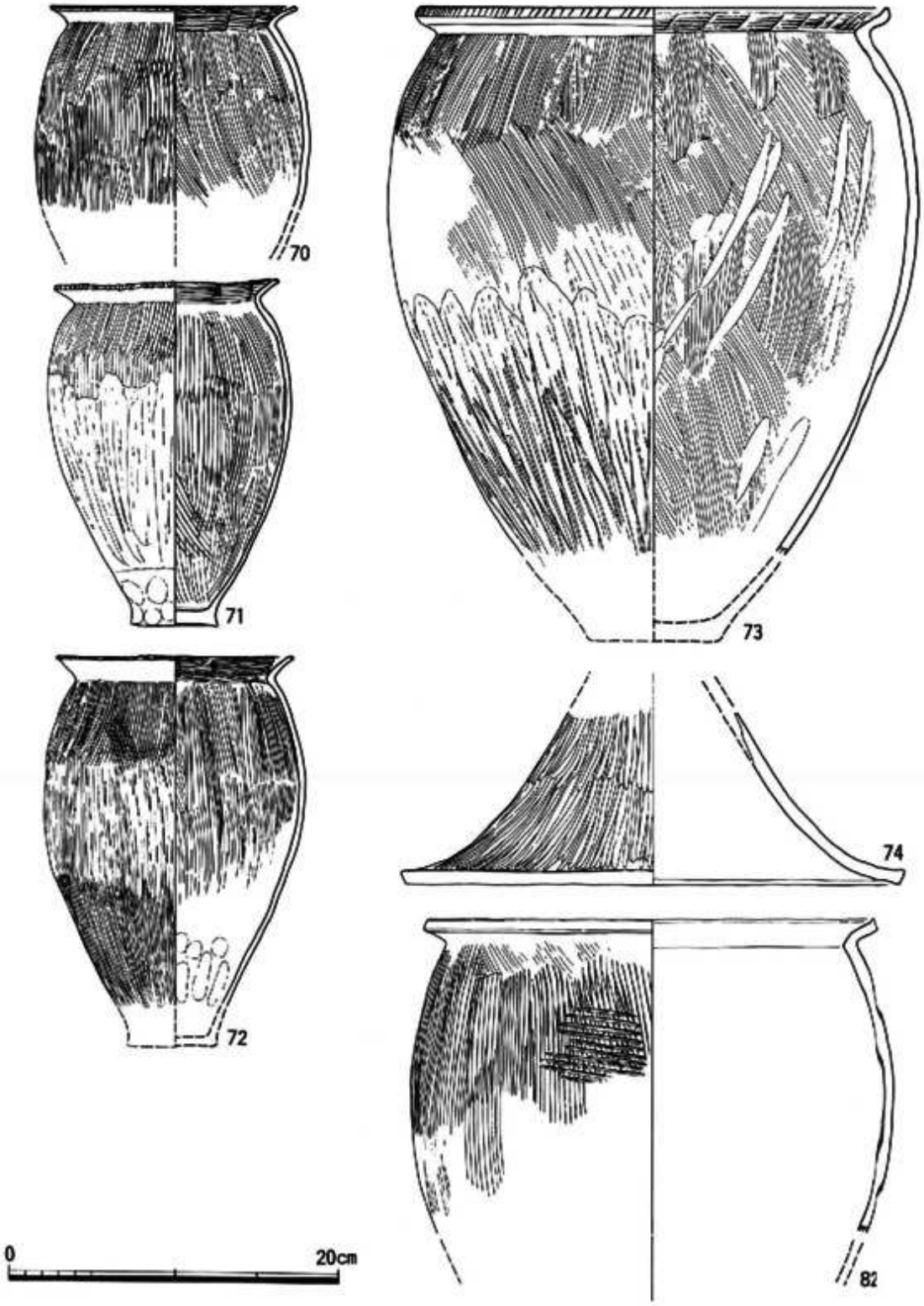
第37図　S X-101 上層出土土器 5（S＝¼）



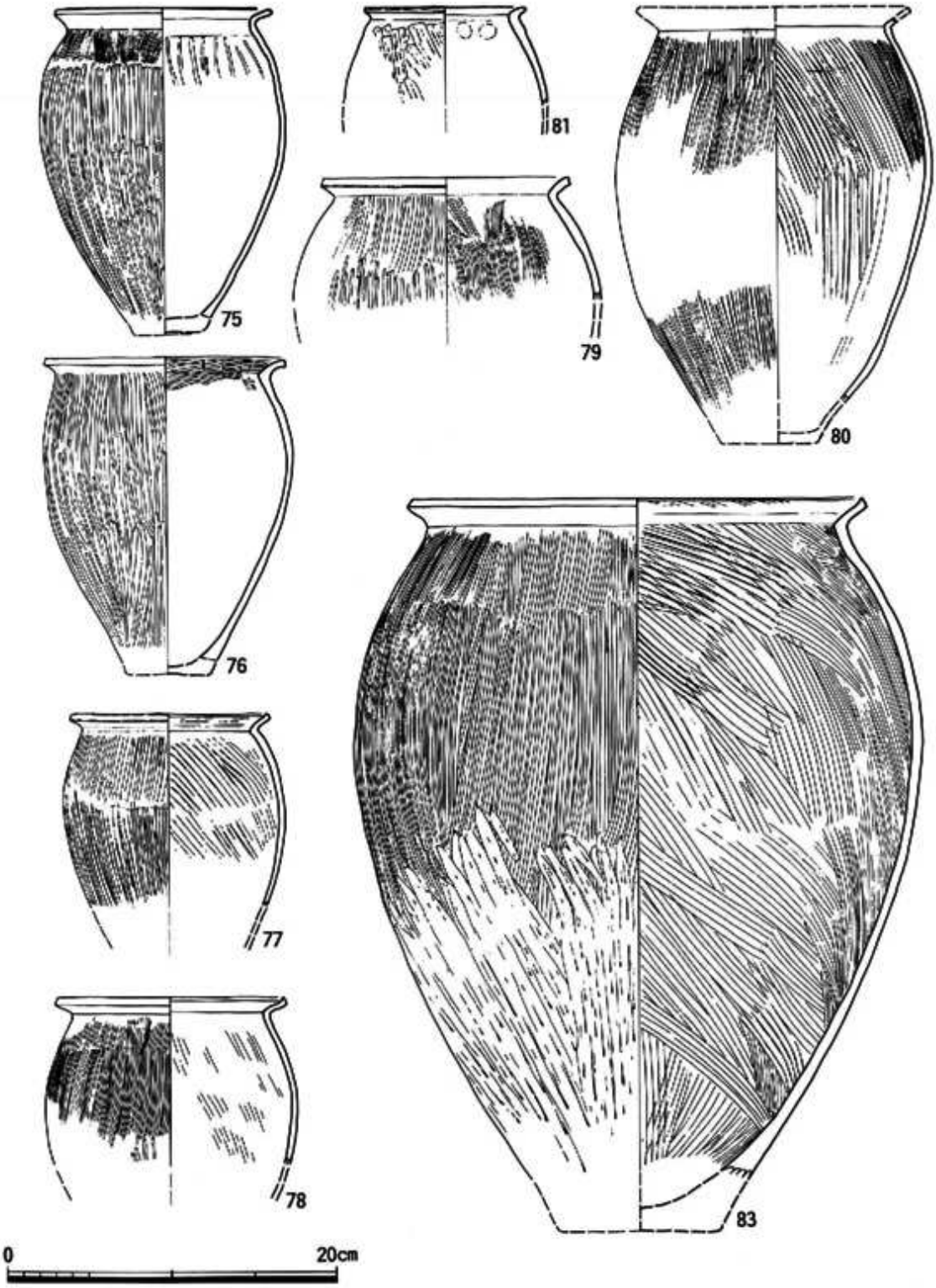
第38図　S X-101 上層出土土器 6 （S＝¼）



第39図　S X-101 上層出土土器 7 （S＝¼）



第40図　S X-101 上層出土土器 8 （S＝¼）



第41図　S X-101 上層出土土器 9 （S＝¼）

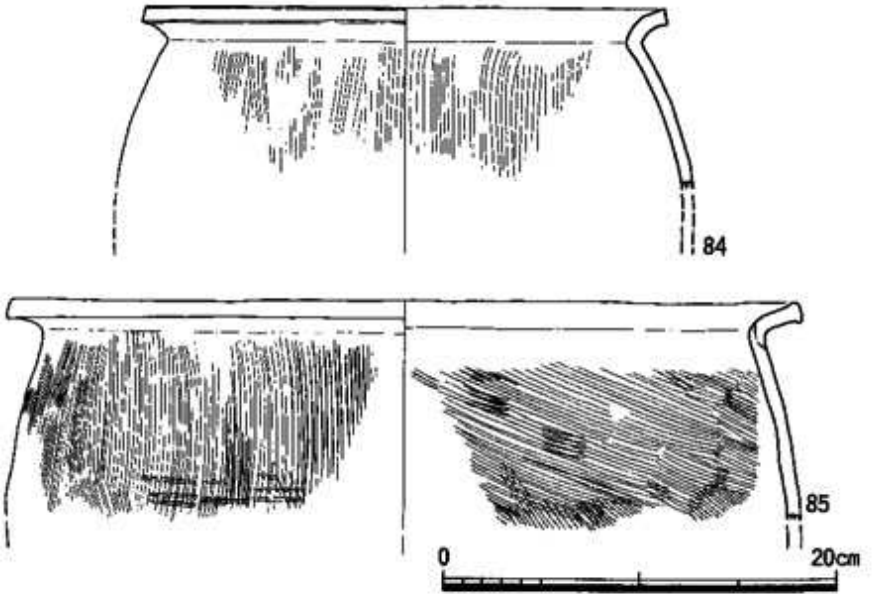
外面と口縁内面に粗いハケが施されている。これらの中には口縁部径と体部径が同じ位のもの(56)と体径の方が大きくなるもの（57～62）の二種がある。また、57～62の口縁部には弱いヨコナデ調整が施されるものが多い。口縁内面のヨコハケはハケ原体の静止痕がみえないものが多い。器壁は薄く、煤は厚く付着している。いわゆる「大和型甕」の範疇でとらえられるものであろう。これらの甕の底部としては63・64があげられよう。63は焼成後の穿孔がみられる。64は脚台部を貼り付けたもので例外的なものである。

二番目の甕として65～69があげられる。これらは前述の甕より口縁部の屈曲が明瞭になってきているもので、口縁端部はやや肥厚ぎみで刻目を強く施す。体部外面のハケは単位がわかるもので、前述の甕とは原体がちがうようである。口縁内面もヨコハケを施す。口縁部はヨコナデにより端面を有するようになる。

三番目の甕は70～73で、口縁部の屈曲は明瞭で、端部は丸くおさめる。調整はハケ後、体部下半をケズリやミガキを施す。口縁部は刻目を施す。71の底部はやや突出ぎみで、底部は厚みを増す。口縁部内面はハケ原体が明瞭にわかるヨコハケ、体部内面もハケ調整をおこなっている。これらの土器も煤の付着は厚い。

四番目の甕として75・76があげられる。これらの甕は口縁部の屈曲が明瞭で、あまり体部の張らないものである。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ後にミガキ調整を施している。75はミガキの下にケズリがみられる。76の口縁部内面は大和型甕ふうのヨコハケであるが静止痕がみられるものである。口縁部には刻目はみられない。

五番目として77～80・82～85の甕があげられる。これらの甕は口縁部の屈曲が明瞭で、口縁部はヨコナデ手法が発達しハネ上げ口縁化が進んでいる。体部はハケ調整が主体である。体部下半



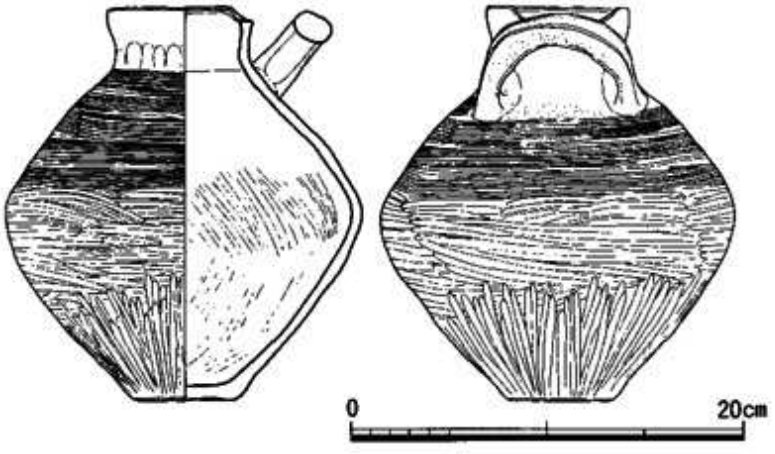
第42図　ＳＸ-101 上層出土土器10（Ｓ＝¼）

外面の調整では78・83にケズリ、79にミガキがみられる。また、82の甕ではタタキの後、ハケを施しているが、局部的な最終のタタキがみられる。74の甕蓋はこのタイプの甕に対応するものであろう。

81の甕は小形甕で口縁部は短く屈曲する。外面は下から上へケズリを施している。この甕は前述の5タイプの範疇でとらえられないものである。

ＳＫ－103出土土器（第43図）

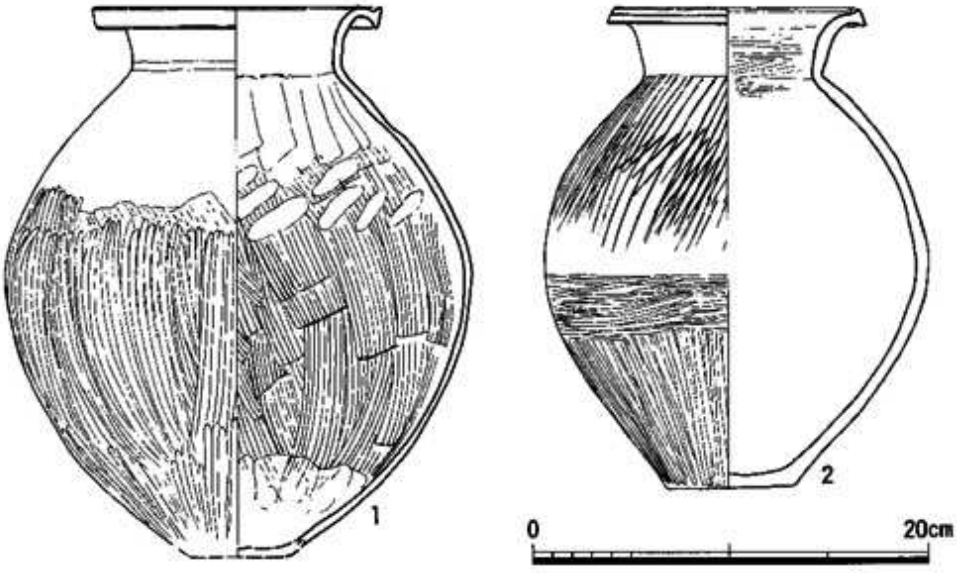
水差形土器　第43図の土器は土坑中位より出土した水差し形土器である。本土器は完形品で、形の整った優品である。球形にちかい体部に短い口頸部がつく。口頸部はやや内湾しており、把手側には抉りが設けられている。把手は大きく貼り付けによるものである。文様は体部上半に5条の櫛描直線文が描かれている。直線文は一度に描かず、3回に分けて継ぎ足している。文様間にはミガキがみられる。体部下半は横位→縦位のミガキが施されている。内面にはハケがみられる。また、把手付近と把手の反対側の底部縁辺には使用による磨滅がみられる。



第43図　ＳＫ-103 出土土器（Ｓ＝¼）

ＳＫ－107出土土器（第44図）

壺　1・2ともにＳＫ-107の第9層より出土した土器である。1は半完形、2はほぼ完形の壺で2の壺内部には卜骨が入っていた。1・2は同形態で煤の付着が厚い。1は2に比べ、二まわり大きく、器壁は薄く丁寧なつくりをしている。体部上半はナデ、下半は縦位のミガキを施している。内面はハケを施すが、底部と体部上半はナデでハケを消している。全体に煤の付着がみられるが、頸部と体部の界には帯状に煤の付着がみられないことから紐状のものを巻きつけていた可能性も考えられる。2は体部上半に粗いハケを有するが、体部下半に縦位の、体部中央部に



第44図　ＳＫ-107 出土土器（Ｓ＝¼）

横位のミガキを施している。内面はナデ調整である。口縁部はヨコナデを施す。

ＳＫ－104出土土器

ＳＫ-104は深さ 2.6m を測る大規模な井戸であるが、この井戸の埋没過程で多量の土器が廃棄されている。土器は中層（第８層）に短頸壺の完形品、上層（第１層）に多量の半完形土器群が含まれていた。これら二層の間には土器の接合関係がみられず、各々、まとまった資料である。この二層間の土器では中層の土器が上層よりやや古い様相を占めていると思われる。上層の土器群では未だ、小形鉢の出現をみていない。また、器種構成では広口壺が量的にかなり多く、高杯・器台は少ない。

第１層出土土器（第45～54図）

壺　１～17・27・28は広口壺である。形態的には器高が30cmを越えると考えられる大形品（１～16）、次に器高が20～30cmを測る中形品（17・28）、20cm以下の小形品（27）に分類される。大形品は縦長の球形を呈する体部に各々、特徴的な口頸部がつく。１～10は口縁端部が下方が張り出し垂下口縁を呈している。８の口縁部には２個一対の円形浮文（浮文の中心に竹管を押圧）を８ヶ所に貼付する。９は局部的な竹管文が２ヶ所に押圧される。11・13・14は口縁端部を上方へハネ上げたものである。14は鋭く突出させている。12・15はわずかに下方は肥厚したものである。13～16の口縁端部には擬凹線がめぐらされている。また、12・16には竹管文がみられる。これら大形の広口壺の外面はハケ後ナデ調整を施し、その上にミガキをおこなうものが多い。内面

はナデ調整が多い。16の広口壺の体部下半には穿孔がみられる。中形の広口壺には球形の体部(17)、または扁球形の体部（28）がある。28は体部と頸部の界に二帯の竹管文がめぐらされ、その下に矢印状の記号文が刻まれている。

18～26は短頸壺である。これらは縦長の球形に直立する口頸部がつく。器高30cm前後のもので、ほぼ同形態である。これらの短頸壺の中には同一作者によるものと考えられるものがある。18～21はほぼ同形で、同一のハケ原体と思われる調整具を用い、手法も類似している。さらに18・19・20の短頸壺下半には扇形状の記号文を各々描いており、注目される。22も類似しているが、口縁部には片口を抉り込んでいる。23は両側に把手をつけている。やや粗雑な感を与えるものである。24は体部下半にケズリがみられる。25はハケ調整をおこなっているが、接合痕が残り、厚手の粗雑なつくりである。形態的に他の短頸壺とは大きく異なるものである。26は口頸部を欠失している。体部下半にはケズリ、上半はハケ後にミガキを施している。体部下半には穿孔がみられる。

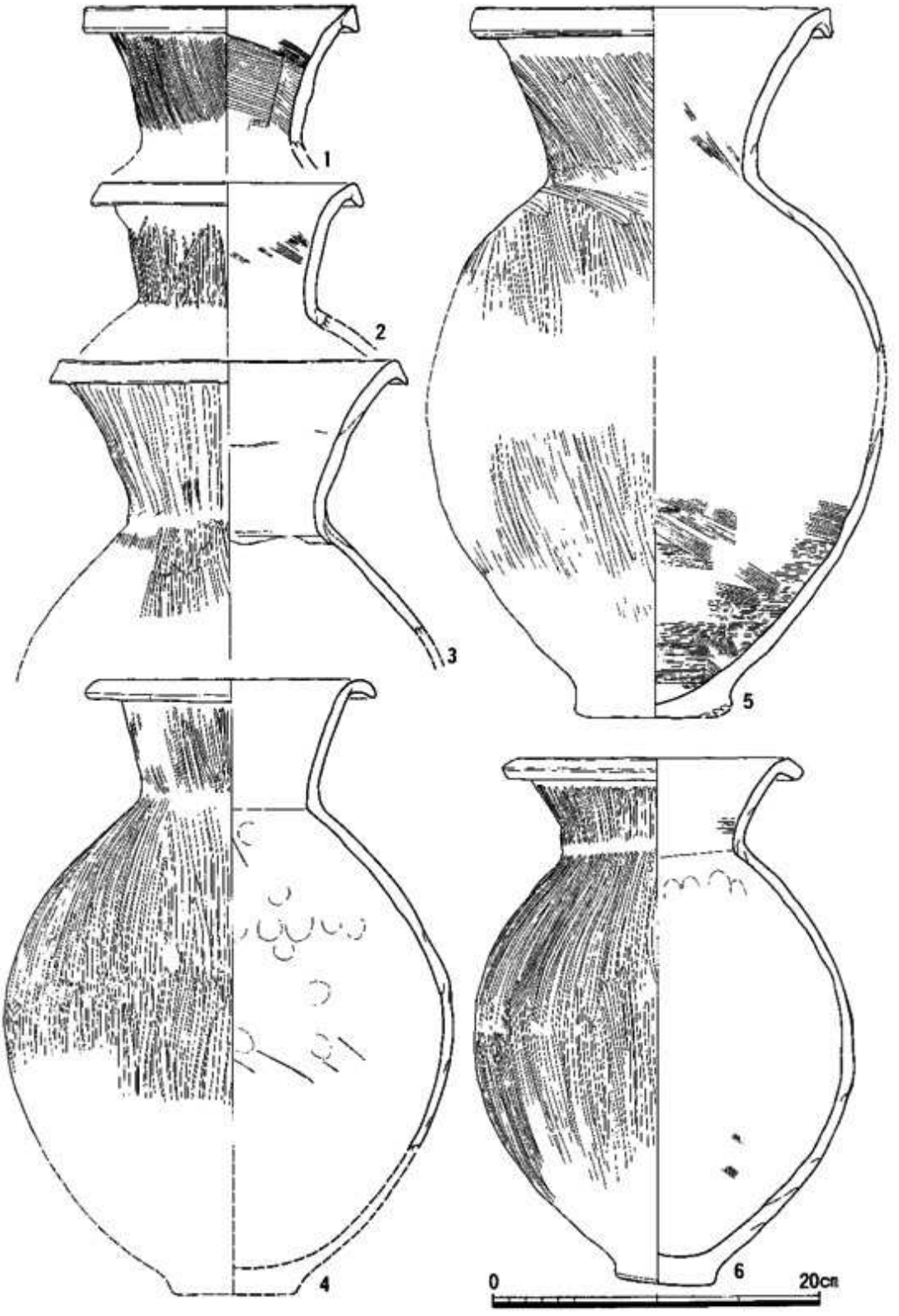
29～32は長頸壺である。ほぼ直立する口頸部を有するもの(29～31)と上外方へひらく口頸部を有するもの（32）がある。30は口頸部の長さが25cmにもなる大形品である。頸部中央に穿孔が、頸部下半には「一」の字状の赤色塗彩が施されている。また、頸部と体部との界にはヘラ描烈点がめぐらされている。

34～37は無頸壺である。小形（34)、中形（35・36)、大形（37）に三大別でき、小形・中形品には台部が付けられている。36は円盤充塡によるものである。また、体部の屈曲部も擬口縁化されており、高杯杯部の成形に通ずるものがある。口縁部は端部を折りかえすもの（36・37）と折りかえさないもの（35）の二種がある。調整はどれもミガキ調整を丁寧におこなっている。

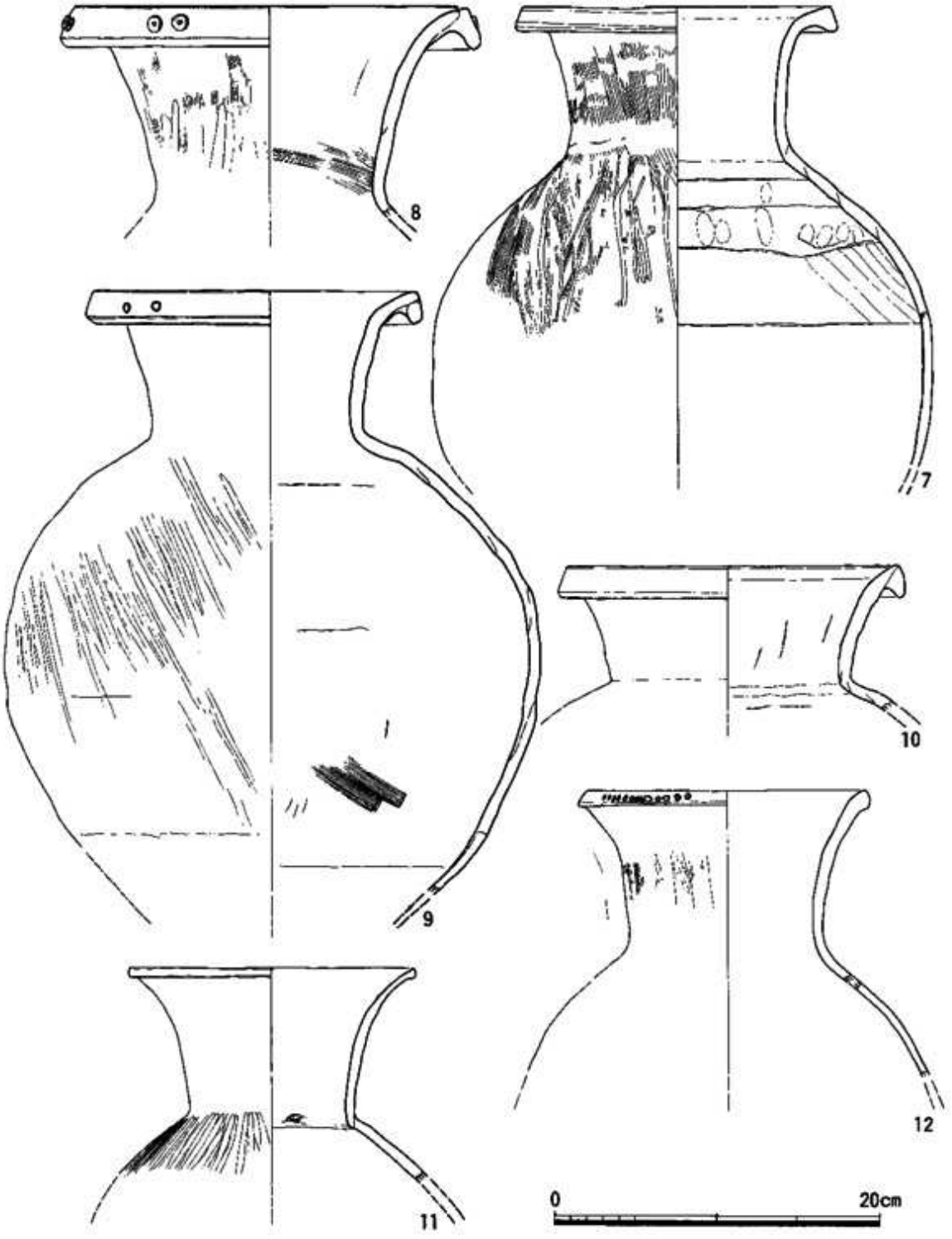
高杯　38～42・44～54は高杯である。38～41は皿形の杯部を有するものである。38・42は立ち上がり部の屈曲が不明瞭なもので、38には受部の上下に浅い凹線状の沈線がめぐらされている。42は口縁部に凹線がみられる。42の調整は器面剝落のためわからない。39～41の杯部は明瞭に屈曲する受部を有する。上方へ短く立ち上がり、口縁端部は面を有する。

高杯脚部の形態は大きく二種で、円錐形（44～47・51～54）と柱状形（48～50）である。さらに各々には大・小の二つがある。円錐形の脚部は裾があまり広がらないもので、脚部の高さは裾径より大きくなるものが多い。44・45にはヘラ描沈線が２帯めぐらされている。46は長方形と円形の透孔が組み合わされている。51は小形で内外面にケズリを残している。48はヘラ描沈線が三帯描かれており、44・45の沈線と似ている。48は棒状工具をさし込んで脚部を成形している。48～51は裾部・柱状部・杯部の三分割による成形である。これらの脚部の外面には丁寧なミガキ、内面にはナデ調整がおこなわれている。

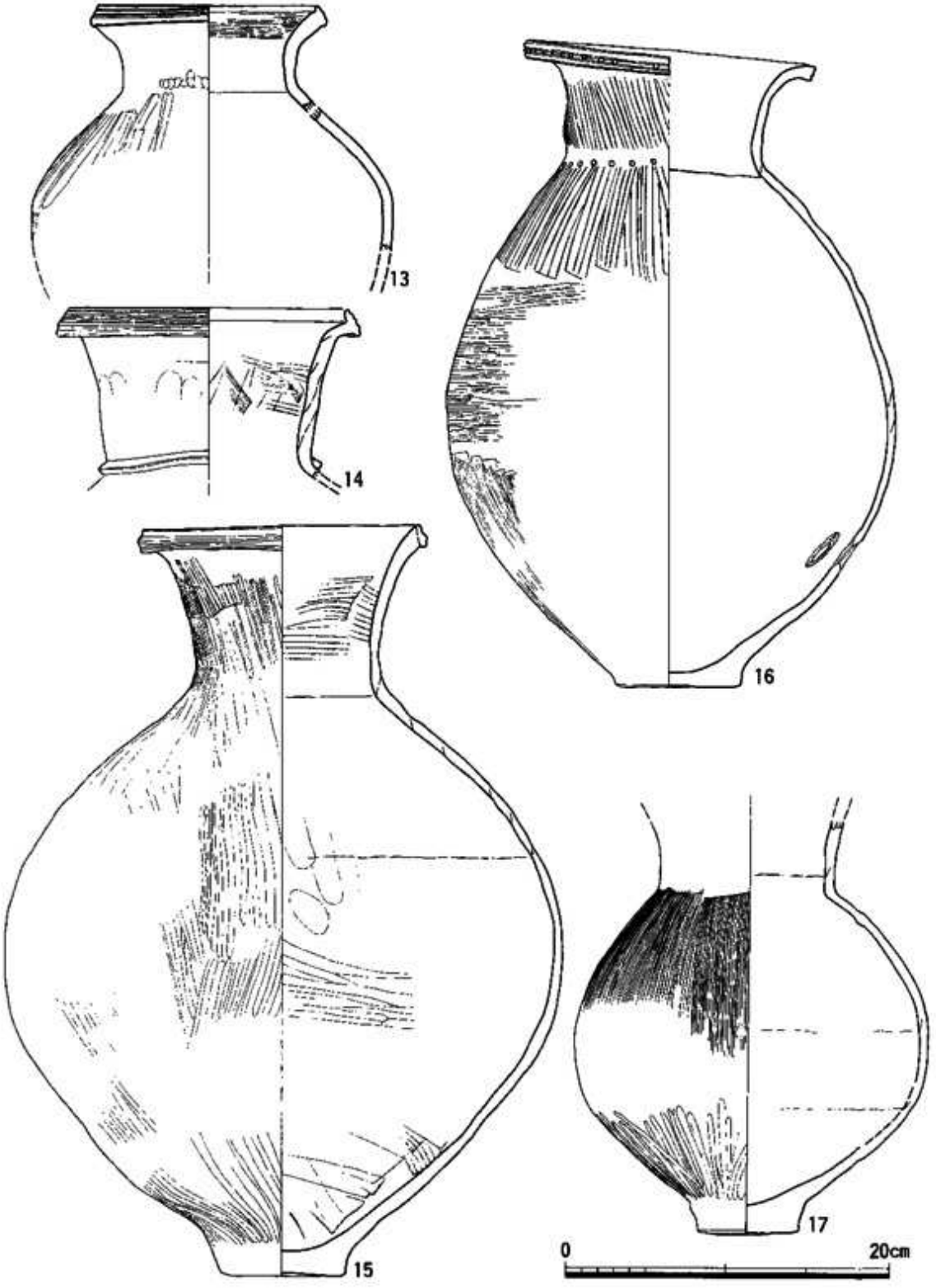
結合形土器　43は広口壺の口縁部と高杯の脚部が結合したと考えられる土器である。ほぼ、完存しているものである。口縁部は大きく外反し、杯部との結合部には５条の擬凹線をめぐらし、界を形成している。柱状部は円盤充塡手法を用いている。脚部裾部は上方へ鋭く突出する。円形



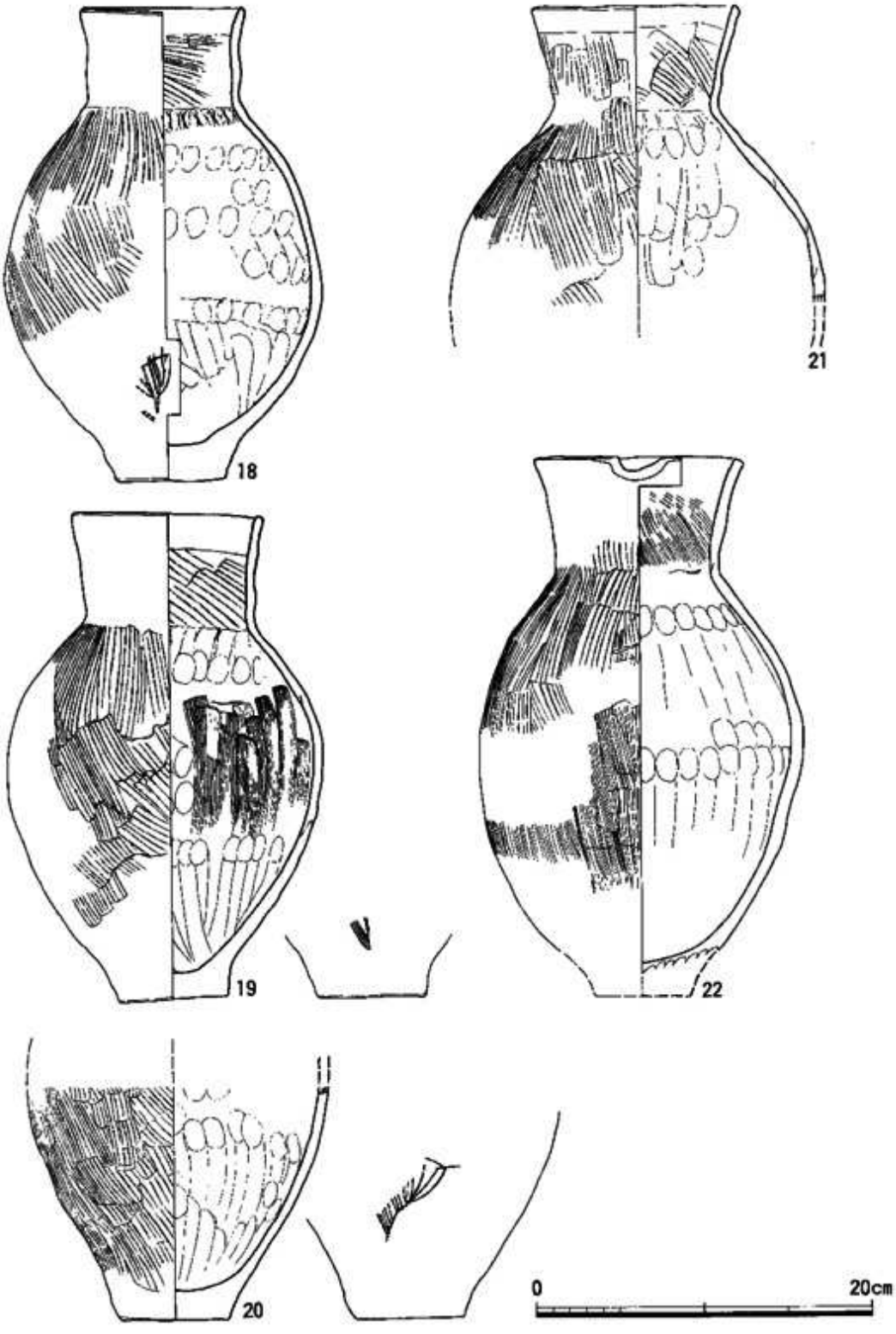
第45図　ＳＫ-104 出土土器１（Ｓ＝¼）



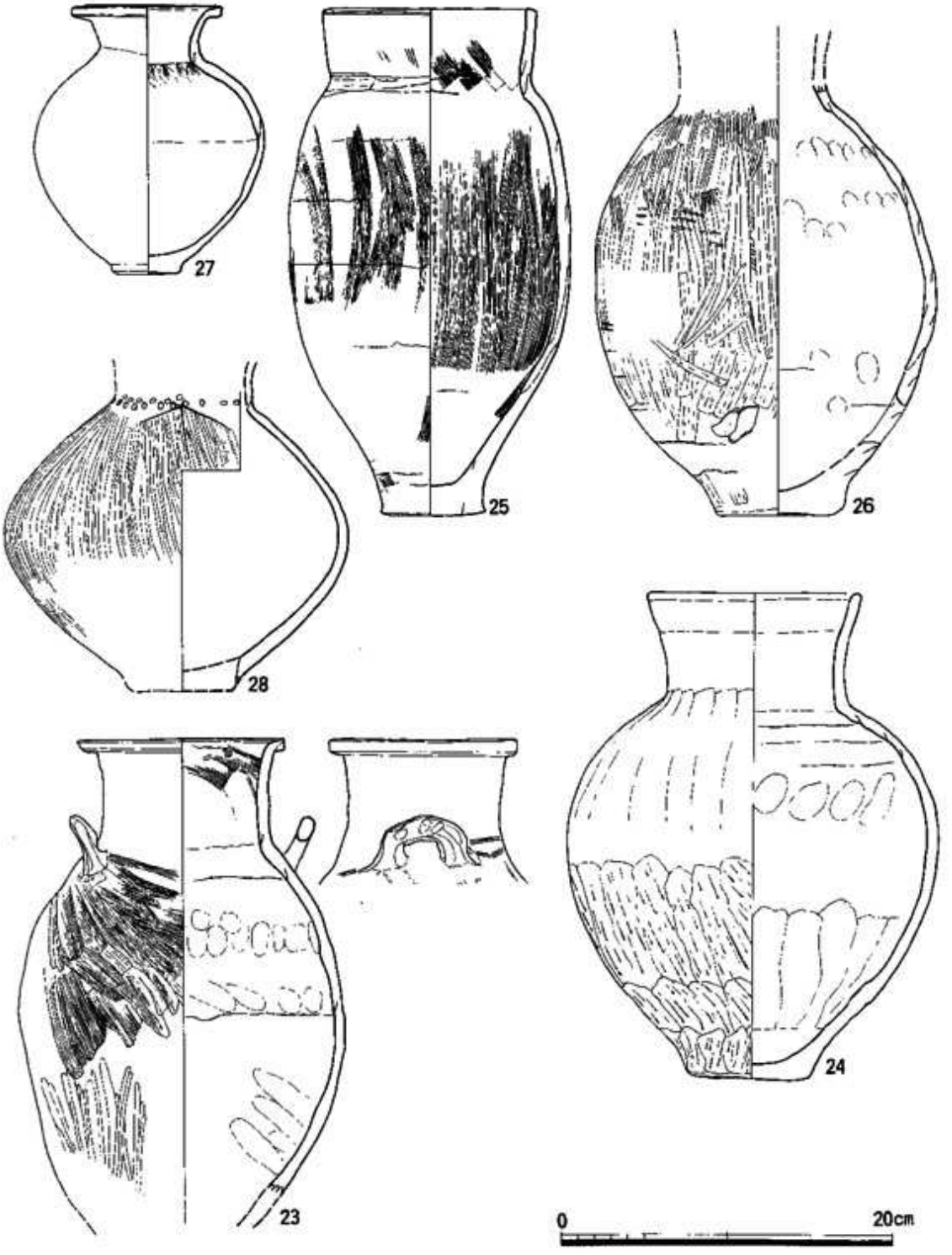
第46図　S K-104 出土土器 2 （S＝¼）



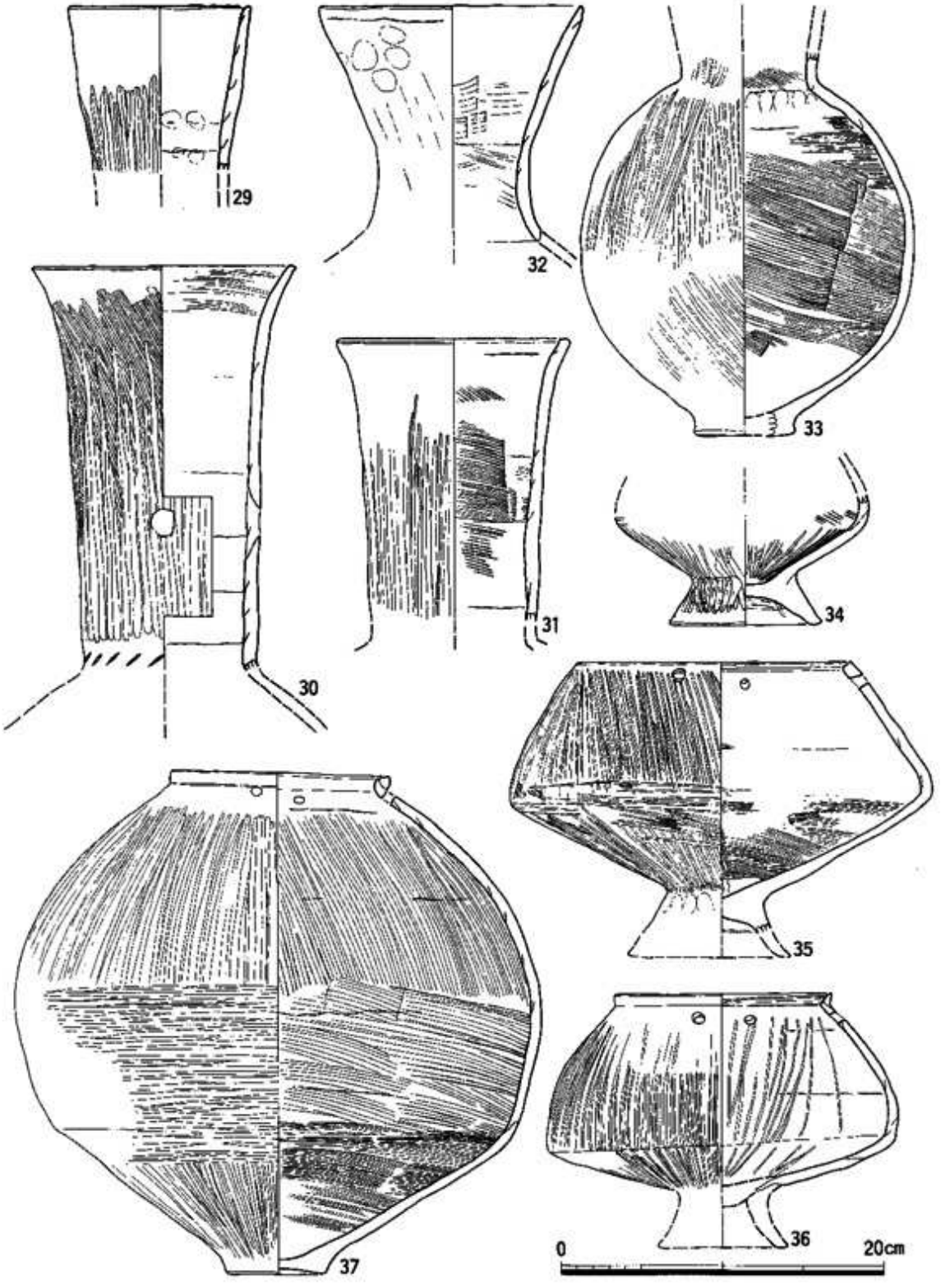
第47図　SK-104 出土土器3（S＝¼）



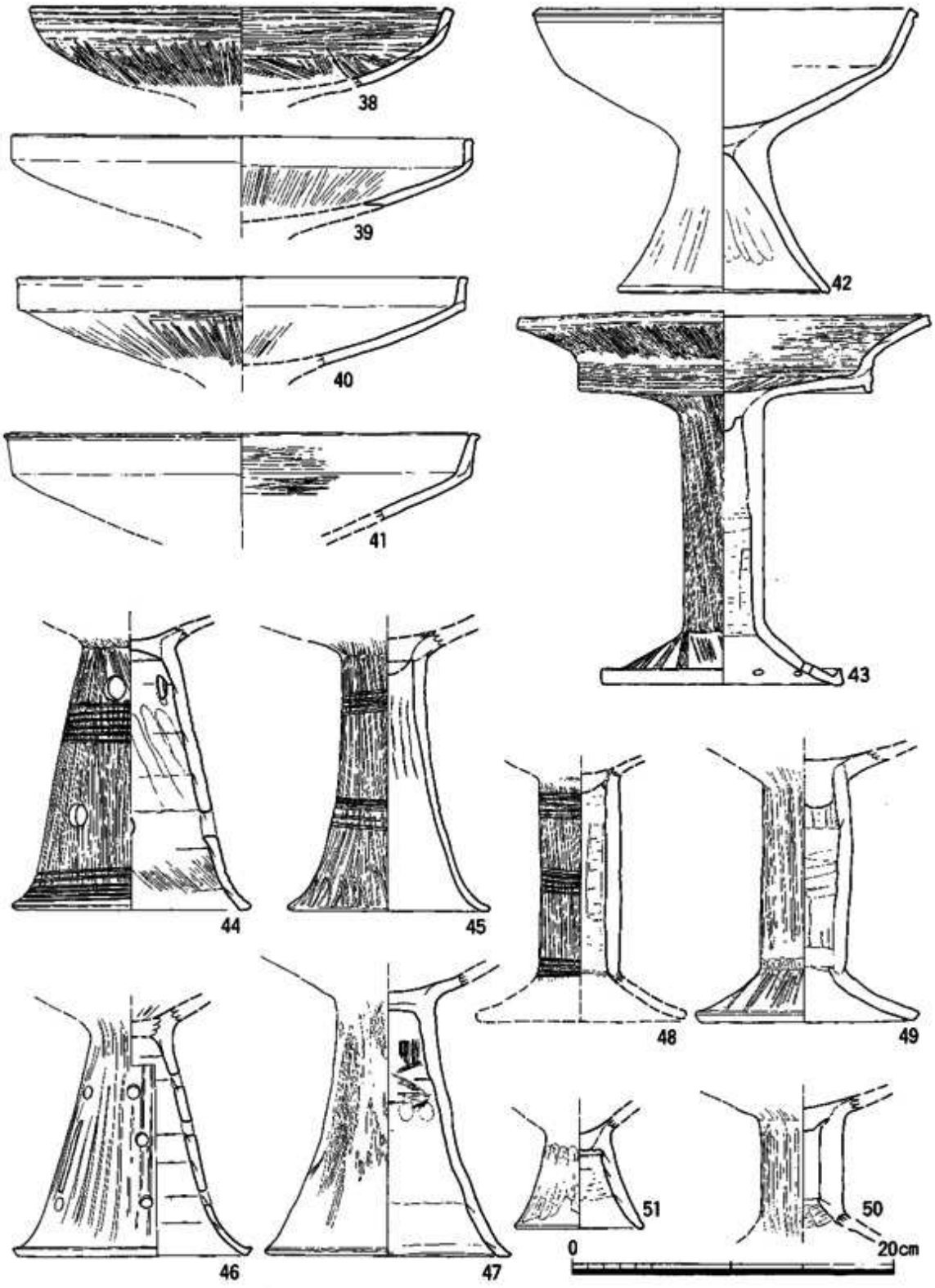
第48図　ＳＫ-104 出土土器４（Ｓ＝¼）



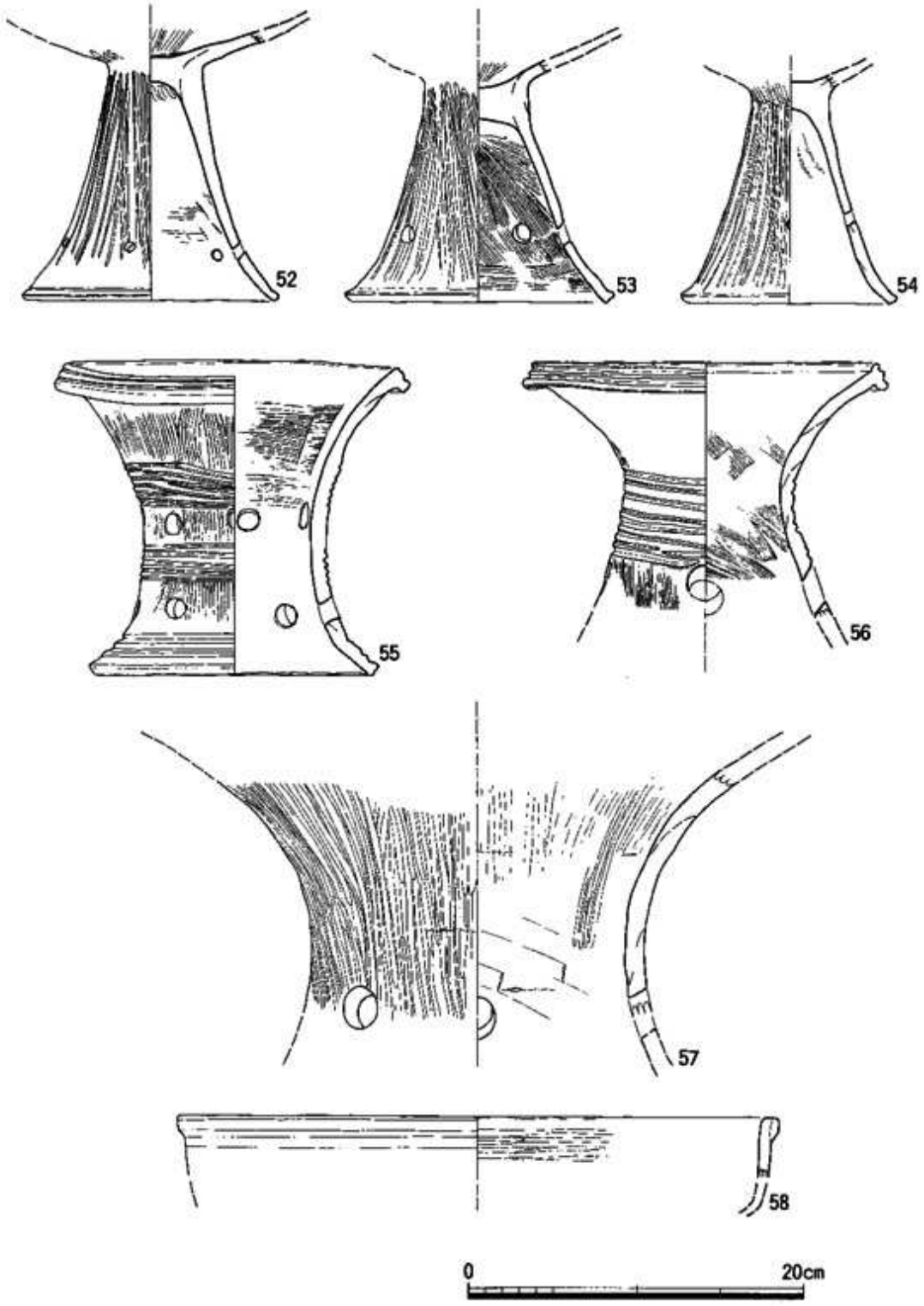
第49図　ＳＫ-104 出土土器５（Ｓ＝¼）



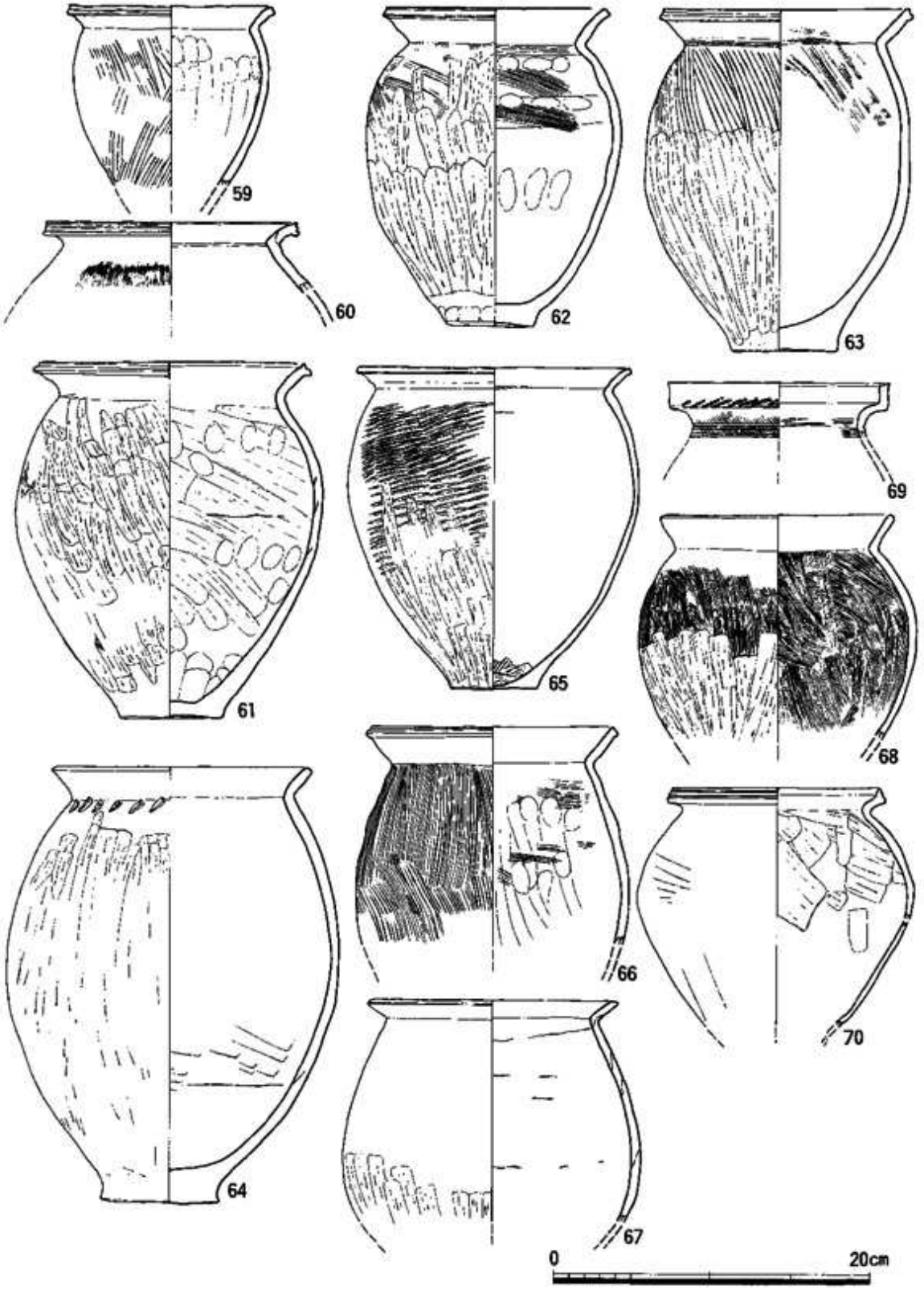
第50図　ＳＫ-104 出土土器６（Ｓ＝¼）



第51図　SK-104 出土土器7（S＝¼）



第52図　ＳＫ-104 出土土器８（Ｓ＝¼）



第53図　ＳＫ-104 出土土器９（Ｓ＝¼）

透孔が13ヶ所穿たれている。外面及び杯部・口縁部内面は細い丁寧なミガキが施されている。脚柱部下半の内面にはケズリが残っている。

器台　小形（55・56）と大形（57）の二種がある。55はほぼ完形である。体部中央にヘラ描沈線が二帯、裾部に凹線が3条めぐらされている。これら文様間に円孔の透しが設けられている。口縁部は垂下し、端面に2条のヘラによる沈線が描かれている。56は体部の屈曲が大きいもので ヘラによる沈線が8条めぐらされている。口縁部は上下に肥厚し、ハネ上げ口縁化している。二条の沈線が描かれている。57は内外面にミガキ調整を施している。

鉢　58は台付鉢の鉢部と思われる破片である。口径36cmを測る大形品である。口縁部は折りかえされ、密着している。鉢部は器面が悪く調整はわからないが、文様をもたない。

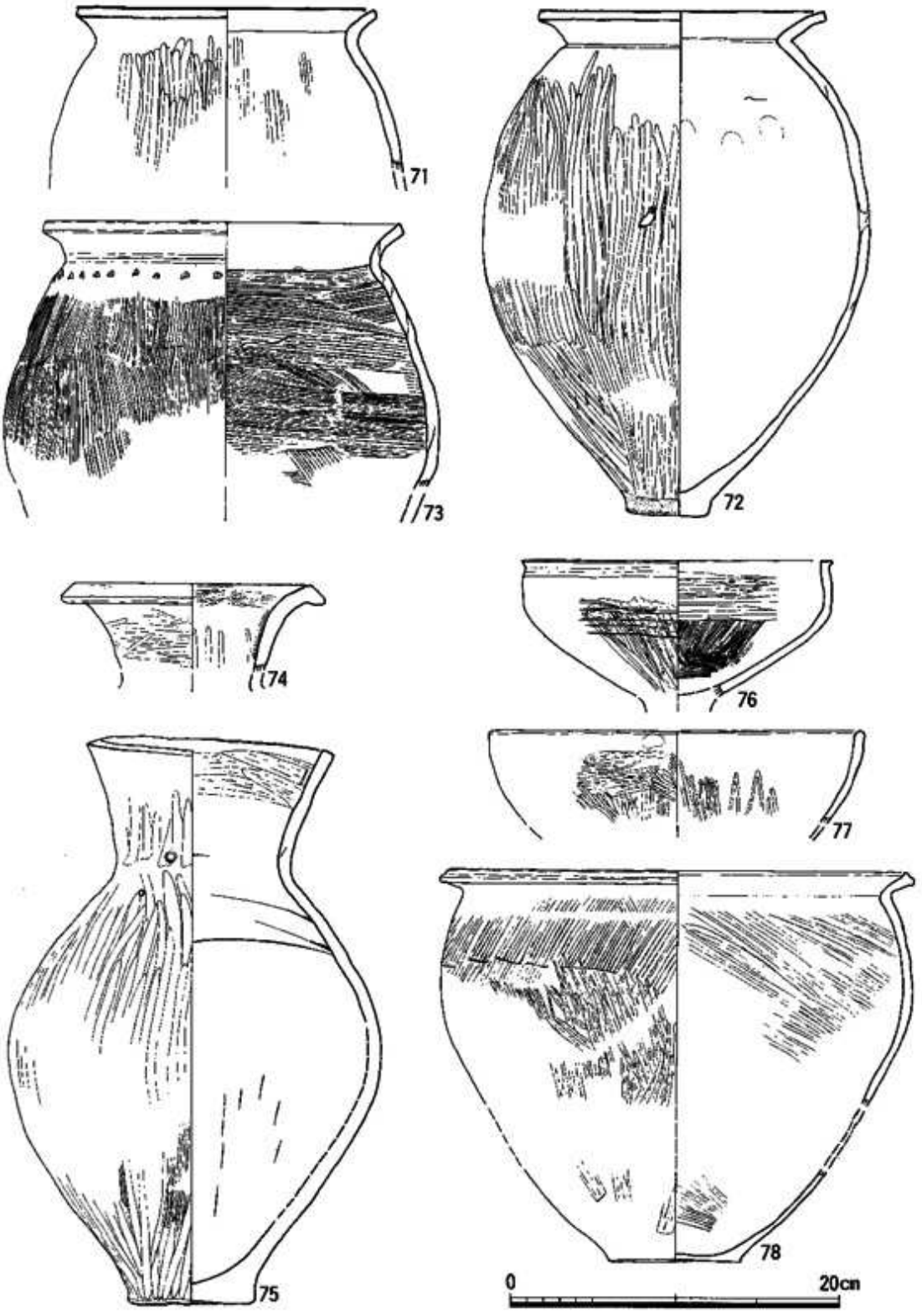
甕　甕は器高15cm前後の小形品、20cm前後の中形品、30cm前後の大形品の三分類が可能である。しかし、甕の形態や手法にはバラエティがあり、一様でない。概して、外面にケズリを施すものが多い。59は小形品で、外面にハケがみられる。60は口縁部の屈曲の強いもので、端面には2条の擬凹線がめぐらされる。61～63・66は中形の甕で、体部のほぼ中央に最大径を有するものである。口縁部は端面を有するが、面中央がわずかに凹み下方へ肥厚する形態を呈する。体部外面はハケ後、下方からケズリをおこなっている。内面はハケの後、ナデ調整を施している。64は口縁部との界にヘラ描烈点をめぐらしている。65は右上がりのタタキを下半からのケズリで消されている。内面は丁寧にナデているが、底部はケズリを施している。器壁は他に比べ薄い。67も体部下半にわずかなケズリがみられる。69は近江産と考えられる甕である。口縁部は上方へ立ち上がり、端面は鋭い。口縁部には櫛による烈点、頸部には直線文がめぐらされている。70は瀬戸内系の甕である。体部上位に最大径を有するもので、口縁部のハネ上げ口縁はやや鈍い。口縁部には2条の擬凹線、内面にはケズリがみられる。外面は磨滅しており調整はわからない。71・72は外面に縦方向のミガキが施されている。72はミガキの下にケズリ痕がみられる。また、体部中央に穿孔が施されている。73は内外面にハケ調整が施されている。体部上端にヘラ描烈点がめぐらされている。

第8層出土土器（第54図）

壺　74は広口壺で、口縁部は垂下している。内外面にミガキが施されている。75は短頸壺の完形品である。外面は太いミガキが施されているが、煤が厚く付着している。頸部下に竹管状工具の押圧による記号文が2つみられる。口縁部内面はわずかにケズリをおこなっている。

高杯　76・77は椀状の高杯である。76の口縁部は面を有し、鋭い。杯部の内外面にはケズリがみられるが、ミガキで消されている。77は粗雑なつくりである。外面はケズリ後ミガキを施している。内面のミガキは粗い。

鉢　78は甕の形態にちかい鉢である。口縁部はハネ上げ口縁である。体部はハケ後、底部からケズリを施し、ハケを消している。器壁は薄い。



第54図　S K-104 出土土器10（S＝¼）

(2). 木製品

弥生時代前期の木製品（図版31～33、第55図）

斧柄　図版31－1・2は縦斧の柄の未成品である。1は握部、2は台部の一部を欠損するが、ほぼ完形にちかいものである。1・2ともに台部が扁平な方柱状をなし、台部と握部の境に突起を作出する形態である。1は現長61.2cm、台部長15.4cm、台部の厚さ 5.8cmを測る。台部・握部ともに加工が全体にいきわたり、最終過程の孔を穿つのをまつだけのものと思われる。2は全長76.5cm、台部長16.1cm、台部の厚さ 8.0cmを測る。1よりかなり大きいものであるが、1に比して加工は進んでいない。台部はほぼ形態調整を終えていると思われるが、握部には粗い削り痕がみられる。1・2ともにＳＫ-215の坑底直上より出土した。

図版32－1は縦斧の柄の製品である。台部の先端は孔部のところから欠失している。また、握部の末端は焼失して短くなっている。現長26.8cm、台部の厚さ約4cmを計る。柄の形態は台部から握部へゆるやかに細くなるものでその境は不明瞭である。ＳＫ-205最下層出土である。

平鍬　図版33－4は平鍬の未成品である。平面形は長方形を呈するが、側縁は内湾している。刃部及び背部は分断による切断面が明瞭に残っている。舟形突起は紡錘形を呈し、背部端に接するように作り出している。本品は連結段階から個々に分断した段階のものであろう。ＳＤ-201中層出土。他に鍬の未成品として図版32－5がある。ＳＫ-213中層より出土したもので舟形突起部の破片である。まだ、孔は穿たれていない。

図版33－1～3、32－4は舟形突起の破片である。いづれも孔が穿たれたものであるが、33－1は全体に使用による磨耗がみられずほとんど使われていないと思われる。ＳＤ-201中層出土である。33－2は方孔にちかいものが穿たれている。ＳＫ-207出。32－4はＳＫ-213より出土したものであるが、突起部は細長く刃部方向につくり出している。

建築材・原材　図版33－5はＳＤ-201より出土した板材である。両端は切断されており、その全容はわからないが、板材の上部左端に一孔が穿たれている。孔部は紐通し孔と考えられ、摩耗している。孔径0.75cmである。横幅15.1cm、縦幅 7.1cm、厚さ 1.4cmを測る。図版31－3も建築材と思われるが両端を失ない、その用途は不明である。一端は焼失している。幅21.9cm、板の厚さ 3.9cmを測る。ＳＫ-215中層出土である。

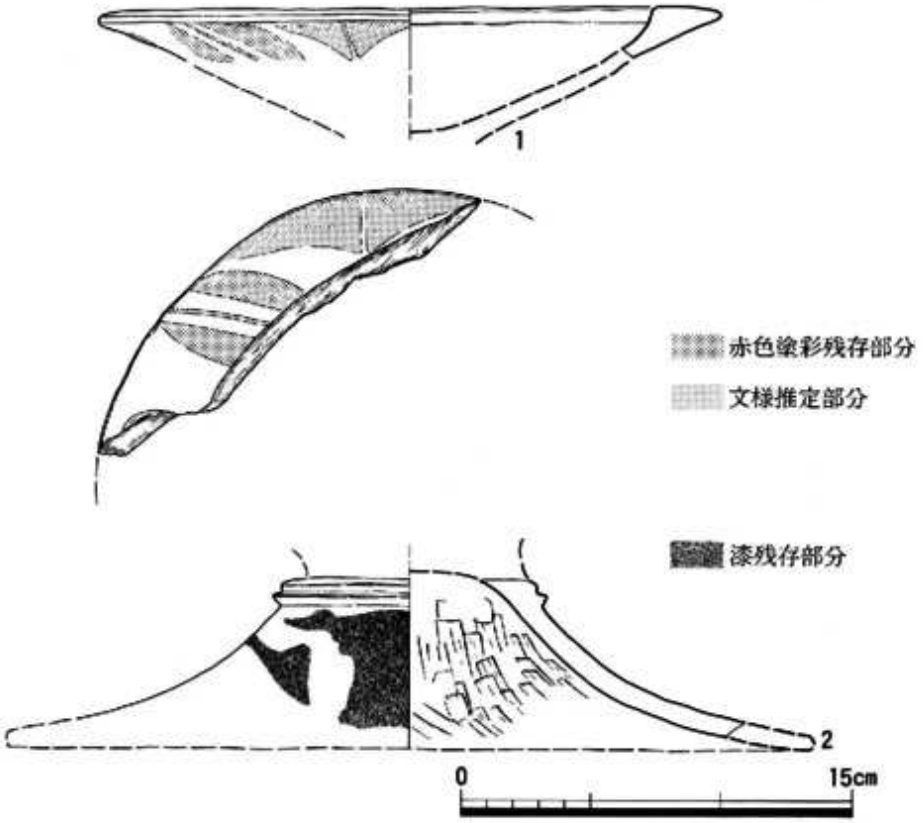
図版32－3は原材である。ＳＫ-205の最下層より単独出土したものである。四周には切断痕が明瞭に残っている。全長51.1cm、幅26.2cm、厚さ約9cmを測る。

竪杵　図版32－2はＳＫ-205中層より出土した竪杵の破片である。本品は両端を欠失しているが、握部から搗部の一部が残存している。握部と搗部の境には搗部を細くし、段をつくり出している。搗部の直径 6.9cmを測る。

容器　第55図1・2は高杯の破片である。1は杯部の破片で口径24.0cmを測る。扁平な逆円錐形の杯部を呈しており、口縁部上端は幅 2.5cmの水平な口縁部を有している。内外面ともに丁寧な調整を施している為、加工痕はほとんどみられない。杯部の外面には赤色顔料による木葉文様

が描かれているが、不鮮明で文様全体の構成はとらえられない。 S K-204第3層出土。

2は高杯脚部の破片である。杯部及び脚裾部は欠損しているため、その全容は不明である。杯部との境界には一条の突帯が作り出されている。外面には黒色の漆が塗布されていたと考えられるが、一部しか残存していない。



第55図 木製高杯実測図（S＝⅓）

弥生時代中期の木製品（図版34）

丸鍬未成品 図版34－1は丸鍬の未成品である。形状は台形を呈し、断面は凸状につくられている。右縁辺部は一部欠失しているが、ほぼ完存品である。上面のほぼ中央のやや上側が厚くつくられているが、まだ、柄孔は穿たれていない。側縁部の切断痕はわからない。上面には粗い加工の痕が多く残存している。全長25.7cm、残存幅28.9cm、柄孔部の厚さ 4.6cmを測る。S K-107

中層出土である。

扁平片刃石斧の柄　図版34－2は扁平片刃石斧の柄である。握部の末端は欠損している。台部は一段低く削り込んで着装部をつくっている。着装部は平坦でなく、やや凹面をなしている。台部先端の下面には突起をつくり出しており、固定できるようにしている。台長19.8cm、着装部長14.0cm、台部の幅 2.7cm、握部の径 2.4cmを測る。本品はＳＫ-107の最下層より出土した。

槌　図版34－3は横槌である。全体が棒状であるが、握部を細くつくっている。槌部の断面は円形である。槌部の側面がやや凹んでいることが観察され、使用痕と思われる。全長22.2cm、槌部長 8.7cm、槌部の最大径 3.9cmを測る。ＳＸ-101第Ⅵ層出土。

(3). 石　器

今回の調査では弥生時代遺構・包含層および中世遺構などから多数の石器が出土した。ここでは打製石器・磨製石器、それぞれについてその概略を述べたい。

打製石器

弥生時代の各遺構から出土した打製石器の内訳は、第５表に示したとおりである。[1] 出土個数が特別に多いのはＳＸ-101であり、ここの石器群について主に解説したい。なお興味深いことに、弥生時代前期の遺構ＳＤ-109からはサヌカイト原礫が、また中世大溝からは大形の石核２点が出土している（図版28）。

ＳＸ－101出土打製石器

ＳＸ-101から出土した打製石器の層位別内訳は第６表のとおりである。その出土個数分布は第56図を見ればわかるように、第Ⅱ層と第Ⅵ層にピークがあり、第Ⅳ層をはさんで上下二つの山を描くようになっている。それは石剣などの武器、石鏃などの工具、剥片などの素材のいづれにおいても変わりない。なお、土器の接合関係をみると、第Ⅰ～Ⅳ層、第Ⅴ～Ⅶ層それぞれの中では認められるものの、第Ⅳ層以上と第Ⅴ層以下の遺物間ではわずかしか認められない（第69図）。このことを考慮すれば、石器の出土個数分布図が描いている二つの山は、堆積時期の異なる二つの石器群を示していると推察される。そこで第Ⅴ層以下を下層石器群、第Ⅳ層以上を上層石器群として、説明を加える。

下層石器群（第57・58図、図版27－15～29・36～42）

下層石器群は第Ⅲ様式古段階の土器群に共伴する。

石剣　器軸の最大長が 100mmを越える、両側縁がほぼ平行し一端部の尖る石器を石剣とする。模式標本は唐古・鍵第13次調査ＳＤ-02 出土の鞘入り石剣である。１～３は、全て第Ⅵ層出土。１は薄い調整剥離を施した後、右面の中央を磨いている。下半は折れており、その折れ面は

第5表　打製石器出土遺構別内訳

遺構＼器種	石剣	尖頭器	石鏃	石錐	石小刀	削器	抉入石器	鋸歯縁石器	楔形石器	両面加工石器	二次加工ある剥片	剥片	砕片	石核	礫	ハンマー	合計	時期
SX-101	9	8	15	2	4	31	4	3	17		19	177	66	8		1	365	第Ⅲ様式
SX-103			1			2			5		1	8					17	
SX-201									1		1	1	4				7	第Ⅱ様式
SK-101			1			1			1			6	6				15	
SK-103						2			4		2	20					28	第Ⅲ様式
SK-104	2		6	1		3	1		1	2	6	49	21				92	第Ⅴ様式
SK-105						1					2	1					4	
SK-106						1					2	7					10	第Ⅲ様式
SK-107			2	1		2			1		5	27	6				44	第Ⅲ様式
SK-111												5					5	
SK-112									1								1	第Ⅲ様式
SK-114								1									1	第Ⅲ様式
SK-115	1							1				6	1				9	第Ⅲ様式
SK-116												1	2				3	第Ⅰ様式
SK-117												4					4	第Ⅰ様式
SK-118											1	1					2	第Ⅰ様式
SK-120			1														1	
SK-201			1			1					1	2					5	
SK-202											1	5					6	
SK-204											1	2					3	第Ⅰ様式
SK-205									3		2	5					10	第Ⅰ様式
SK-206									1			7	1				9	
SK-207									1		1	1					3	第Ⅰ様式
SK-208						1			1								2	第Ⅰ様式
SK-211												2					2	
SK-212			1			2					1	3					7	第Ⅰ様式
SK-213			1	1		4			3		2	18	1	1			31	第Ⅰ、Ⅱ様式
SK-214												2	1				3	
SK-215						7			3			5	6				21	第Ⅰ様式
SK-218											1						1	第Ⅰ様式
SD-101			5			2			3		4	15	2				31	第Ⅳ様式
SD-103						1			1			4					6	
SD-104												2					2	
SD-105								1				6					7	第Ⅲ様式
SD-106						1											1	第Ⅱ様式
SD-107								1									1	第Ⅰ様式
SD-108											2	4	1				7	第Ⅰ様式
SD-109			2	1		4	1		2		2	17			1		30	第Ⅲ様式
SD-110						3						3					6	
SD-111											1						1	第Ⅰ様式
SD-201						5	1		11		6	30	8				61	第Ⅰ様式

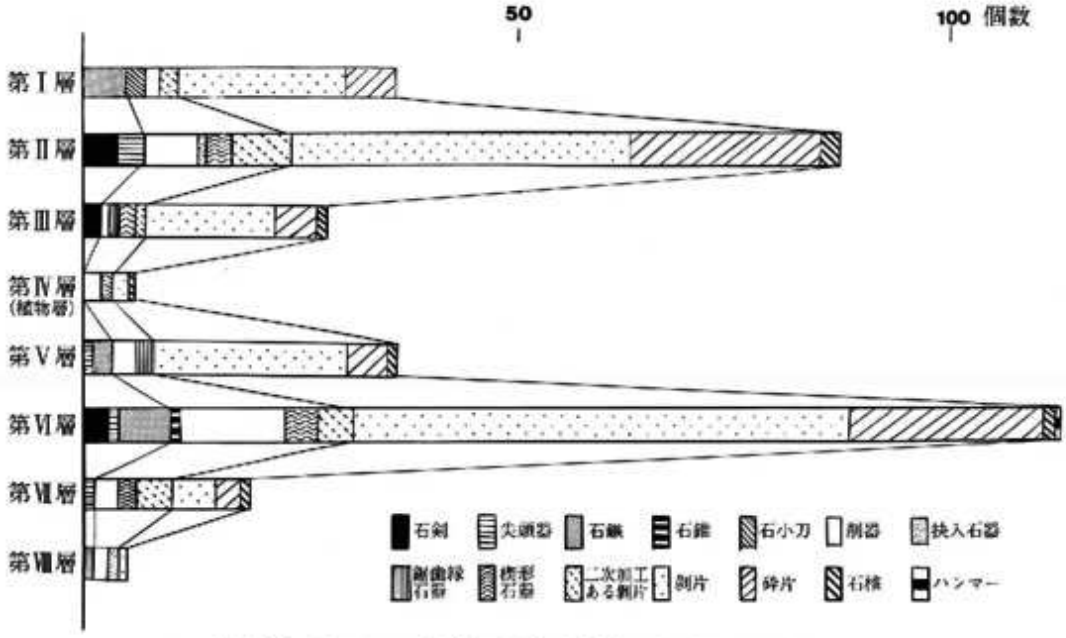
第6表　SX-101 打製石器出土層位別内訳

器種 / 層位	石剣	尖頭器	石鏃	石錐	石小刀	削器	抉入石器	鋸歯縁石器	楔形石器	二次加工ある剥片	剥片	砕片	石核	ハンマー	合計
第Ⅰ層			5		2				2	2	19	6			36
第Ⅱ層	4	3				5	1		3	7	39	22	2		86
第Ⅲ層	2					1		1	2	1	15	5	1		28
第Ⅳ層（植物層）						2			1		2		1		6
第Ⅴ層		1	2			3		2			21	5	1		35
第Ⅵ層	3	1	6	1		13			4	4	57	23	1	1	114
第Ⅶ層		1				3			2	4	5	3	1		19
第Ⅷ層			1			2	1				1				5
その他		2	1	1	2	2	2		3	2	18	2	1		36
合計	9	8	15	2	4	31	4	3	17	20	177	66	8	1	365

第7表　SX-101 出土の剥片

背面 / 打面 / 層位	自然面を残す					剥離面					合計
	自然	平坦	調整	点状	欠損	自然	平坦	調整	点状	欠損	
第Ⅰ層		1	2		1	4	2	3	2	4	19
第Ⅱ層	2	5	1		3	11	1	4 (2)	4	8 (1)	39
第Ⅲ層				2	2	2	2 (1)	1 (1)	2	4 (2)	15
第Ⅳ層	1					1					2
第Ⅴ層	2	1			3	6		3 (1)	2	4	21
第Ⅵ層	3	3	2		8	9	2	11 (2)	3	17 (4)	57
第Ⅶ層								1	1 (1)	3 (2)	5
第Ⅷ層						1					1
合計	8	10	5	2	17	34	7 (1)	22 (6)	14 (1)	40 (9)	159

※（　）は横に示された数値のうち、側面に自然面を残すものの数。
また、大きさはすべて最大器長が20mmを越えるものである。



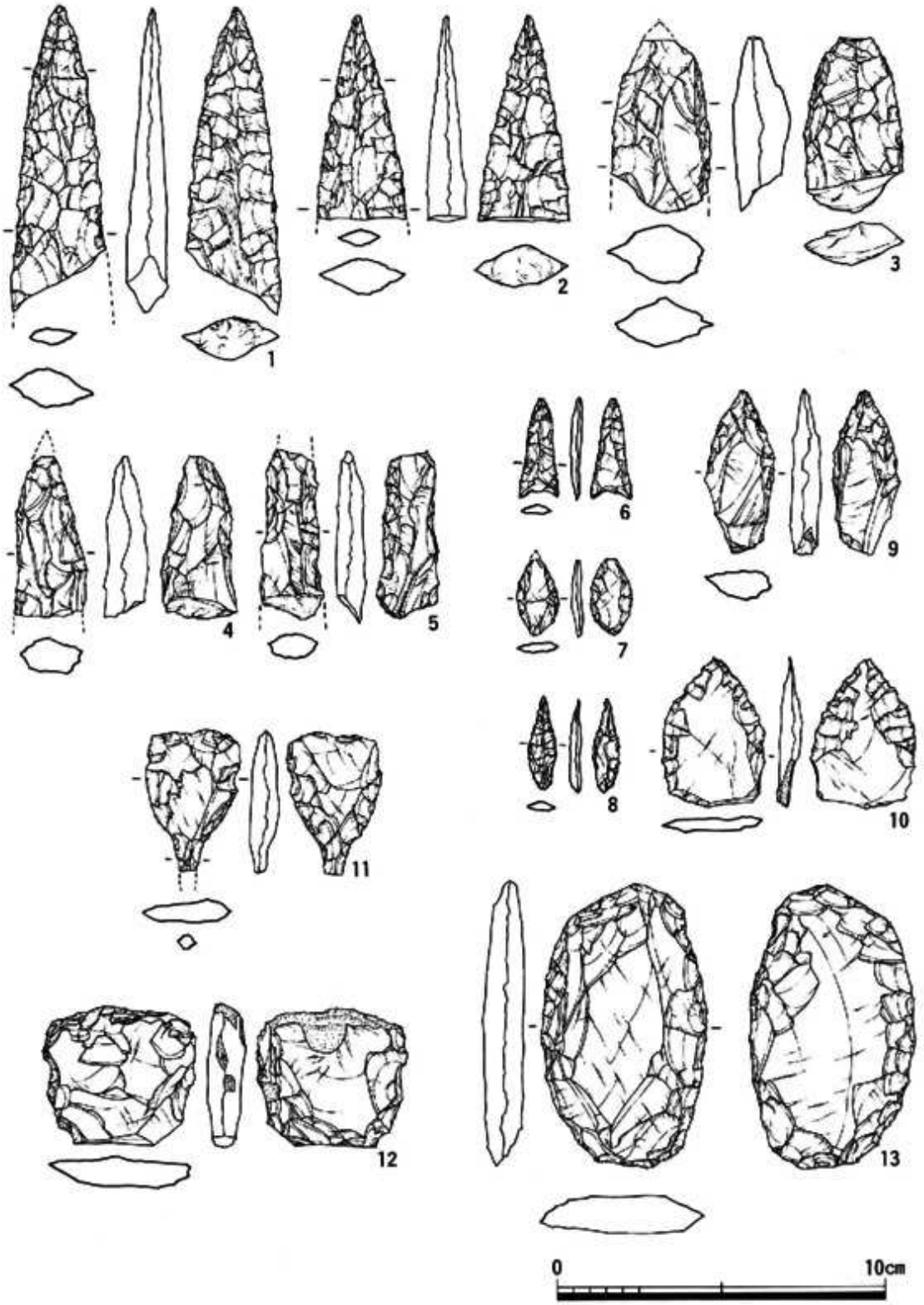
第56図　S X-101 打製石器出土層位別資料個数分布図

"pot-lid" (Oakley 1972　P.10) である。[2]

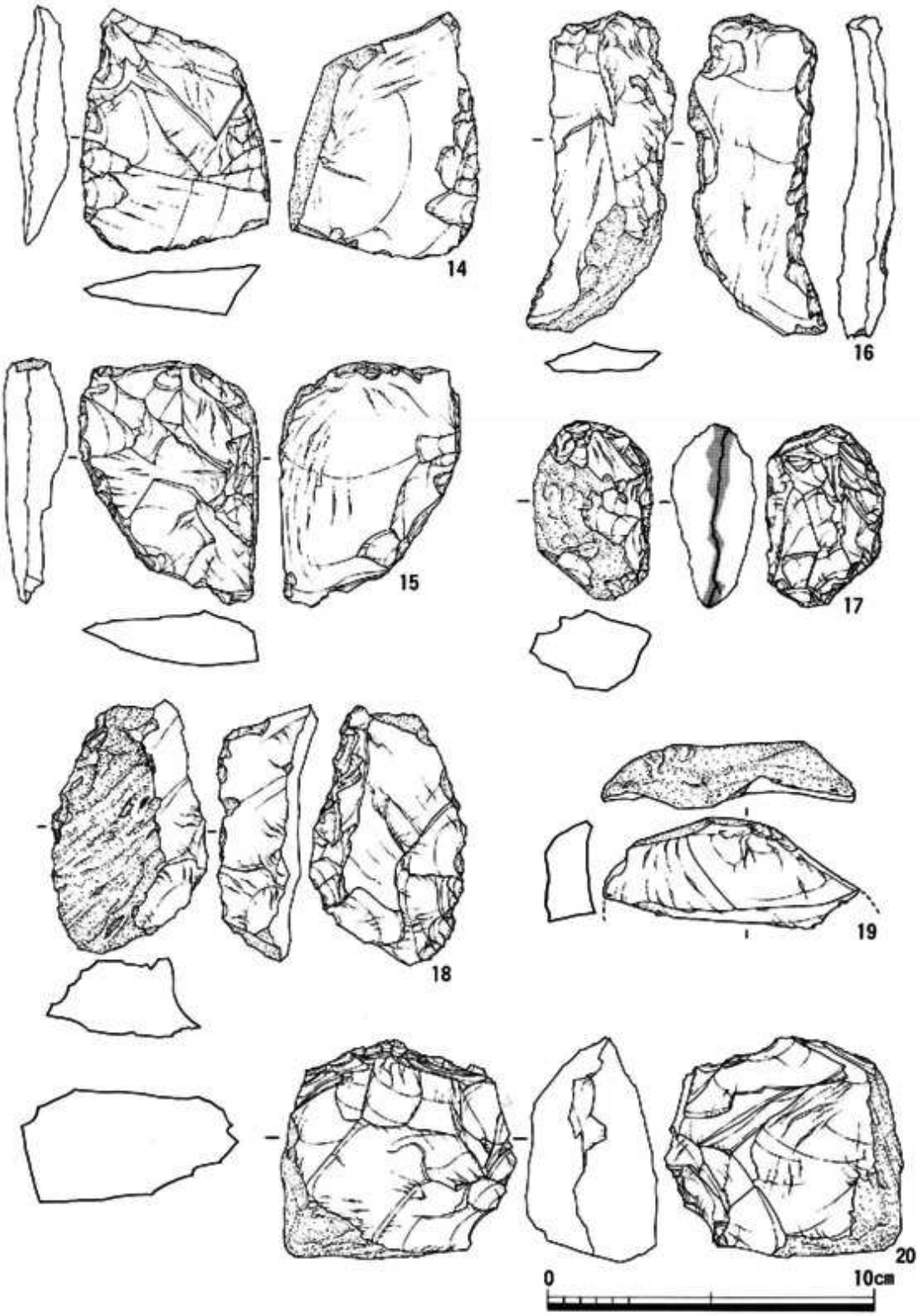
オークリーによれば、これは霜などによる温度変化によって形成される剥離痕であると言う。また経験的には、サヌカイトを焚火にいれると同様なポット・リドのできることが知られている。[3] したがって本資料も何らかの温度変化によって折れたものと考えられる。興味深いことに本資料の出土した第Ⅵ層からは卜骨が出土している。何か関係があるのかも知れない。2は薄い平行調整の施された石剣の尖端部である。折れ面は1と同様ポット・リドである。3は1、2と異なり器厚の厚いずんぐりしたもので、縁辺付近の調整剥離痕は階段状で、その一部はつぶれを呈している。上下端は折れている。

尖頭器　両面調整加工により一端部を尖らせた、石剣・石鏃・石錐の範疇にあてはまらない石器を言う。4は第Ⅳ層出土。調整剥離は魚鱗状を呈し、ほとんどが階段状剥離である。器幅に比して器厚があり、ずんぐりしている。上下端折損。5は第Ⅴ層出土。調整剥離は4と同様。器面の中央部は両面とも磨かれている。上下折損。

石鏃　一端を尖らし、それに対する一端を基部として凹・平・円・凸基とした無茎もしくは有茎の、器軸最大長がほぼ50mm未満の小形の石器を言う。7・10は第Ⅴ層、6・8・9は第Ⅵ層出土。6は本遺構では唯一の凹基の石鏃である。7は円基で、右面中央に素材主要剥離面を残している。8は凸基で、右面中央に素材主要剥離面を残している。9と10は未成品か。両方とも右面中央に素材主要剥離面を残している。なお有茎のものが一点ある。



第57図　S X-101 下層出土打製石器 1 （S＝½）



第58図　S X-101 下層出土打製石器 2 （S＝½）

石錐　両面調整により一端を錐状に細長く尖らせた石器を言う。また器身の一端に回転使用による磨き（磨滅）の認められるものも、この範疇に含む。11は頭部をも調整剥離で作りだしており錐部は折れている。

削器　剥片の一側縁もしくはそれ以上の片面もしくは両面に、調整剥離を施し刃部を作りだした石器を言う。12・13・16は第Ⅴ層、14・15は第Ⅶ層から出土。12は素材である剥片の表裏両面の両側縁及び主要剥離面の下縁に、魚鱗状を呈する階段状剥離の調整加工を施している。13は剥片の表裏両面の全周に薄い調整剥離を施している。とりわけ右面右側縁の調整は薄く、刃部形成を意識したものと考えられる。14は剥片の下縁の表裏に薄い調整剥離が施されている。縁辺には微細剥離痕が顕著である。15は剥片の一側縁の表裏に薄い調整が施されているが、そのエッジは若干つぶれている。また稜なども全体に丸みをおびており、光沢も認められる。水などの作用により摩滅を受けたのだろうか。16は剥片の主要剥離面の一側縁に深く魚鱗状を呈する調整剥離が施されている。下層出土の削器は片面調整のものが4点、両面調整のものが17点であり、両面調整のうち2点がほぼ全周に調整を施したものである。

なお、抉入石器、鋸歯縁石器としたものがあるけれども、微力な調整であり明確なものではない。

楔形石器　基本として、相対する二側縁に微細な階段状剥離痕の連続して認められる　剥片素材の小形の石器を言う。17は第Ⅶ層出土。階段状剥離痕はほぼ全ての側縁に認められるが、集中的な加撃のためか、エッジはつぶれて丸くなってしまっている。下層においては、素材剥片を大きく残すものが多く、17のような素材の認めがたいものは少ない。

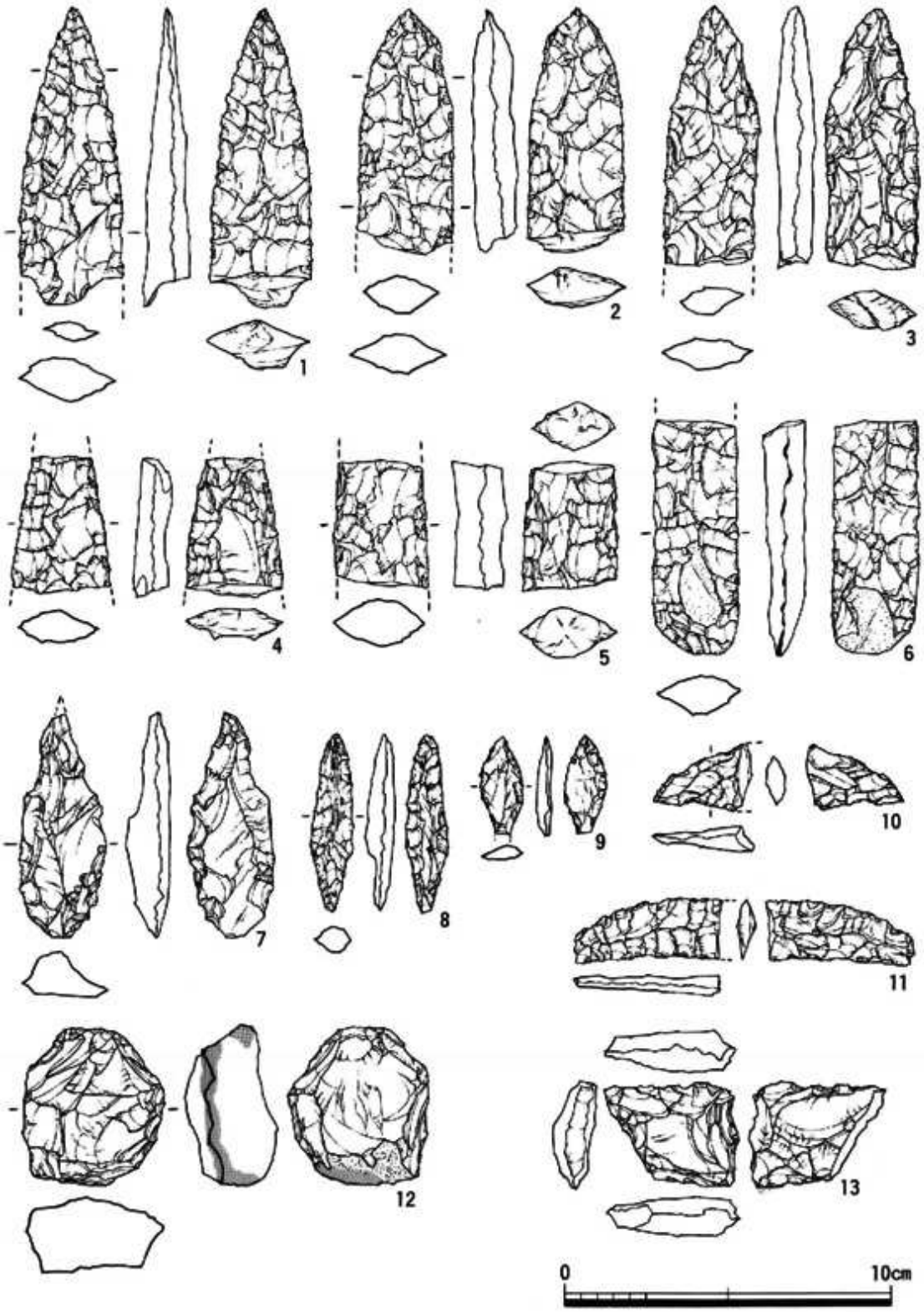
石核　18は第Ⅴ層、19・20は第Ⅵ層出土。18は右面中央に素材剥片の主要剥離面を残しており、そこが剥離作業面となっている。打面は剥離面と原礫面であり、主に相対する二側縁から加撃がなされている。19は折損品。自然面打面である。20は表裏二面の剥離作業面をもつものである。右面の剥離痕はほとんど左面を切っており、先行する剥離作業面を打面としている。

剥片　剥片については第3表に層位別の概略を示した。大きさについては、最大のものでも最大長69.8mm、最大幅81.2mm、最大厚13.8mmであり、石剣を製作しうるものは上下両層石器群中に存在しない。

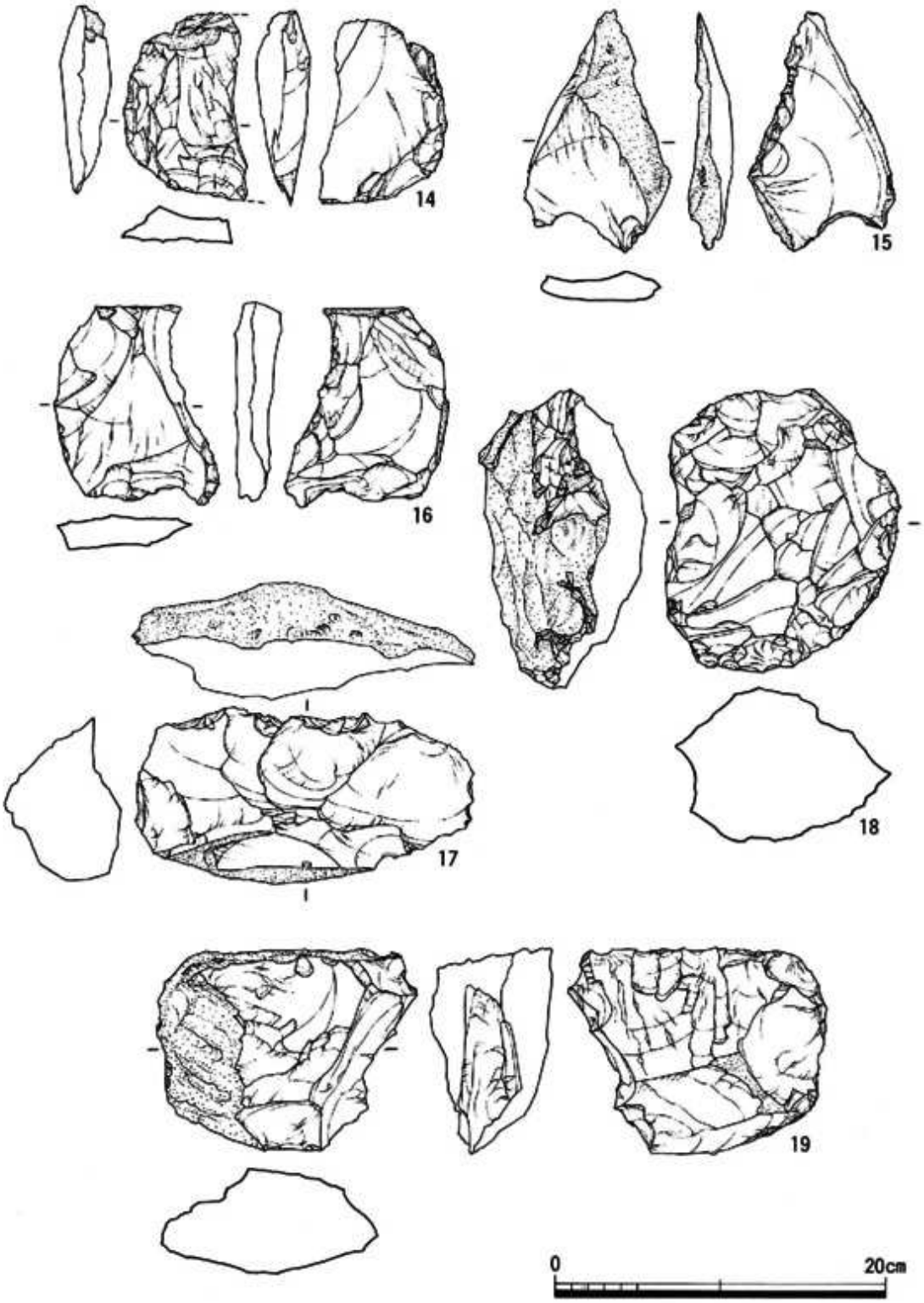
上層石器群　（第59・60図、図版27－1～14・30～35）

上層石器群も第Ⅲ様式の土器群と共伴するが、下層より堆積時期は新しい。

石剣　1・3・4・5は第Ⅱ層、2・6は第Ⅲ層出土。1は薄い平行調整を施したもので、剥離面の切り合い関係を辿ると両面とも左側縁からの剥離痕は上方へ、また右側縁からのものは下方へと調整剥離が進行したと認められる。調整の順序は、左面右側縁→同左側縁→右面右側縁→同左側縁である。下半折損。2も薄い平行調整を施したものであるが、一部先端部においては階段状剥離が顕著である。下半折損。3は魚鱗状を呈するネガティブバルブの顕著な調整剥離が施



第59図　S X-101 上層出土打製石器 1 （S＝½）



第60図　ＳＸ-101 上層出土打製石器２（Ｓ＝½）

されている。折れ面はねじれて折れたような様子を見せている。4は薄い平行調整の施されたものである。上端と下半は折損。5も上下半を折損しており、薄い平行調整が施されている。折れ面は両面ともポット・リドである。6は薄い平行調整の施された基部である。器面には両面とも素材面が残されている。また両側縁には刃潰しのための磨きが施されている。

尖頭器　7は第Ⅱ層出土。右面中央に素材主要剥離面を残す。調整剥離痕は魚鱗状を呈す。

石鏃　8・9とも第Ⅰ層出土。8は凸基有茎の石鏃である。器面は両面とも磨きがかけられており、右面中央には素材面を残す。9は凸基の石鏃である。扁平な薄い剥片の周囲に微細な調整剥離が施されている。

石小刀　両面調整により外湾する刃部とそれに対応する内湾もしくは直線の刃部を作りだした石器を言う。10・11とも第Ⅰ層出土。10は先端部の折損品。11は薄い平行調整が施された折損品である。

削器　14・16は第Ⅱ層、15は第Ⅳ層出土。14は剥片の側縁の両面に薄い魚鱗状の調整剥離が施されている。打面側は折れている。16は剥片の主要剥離面側の一側縁に魚鱗状の調整剥離が施されている。上層においては片面調整は5点、両面調整は4点である。

16は挟入石器とした。第Ⅱ層出土。主に剥片の主要剥離面側の側縁に魚鱗状の深い調整剥離に施し、若干内湾する刃部を作っている。

楔形石器　12は第Ⅱ層、13は第Ⅰ層出土。12は微細な階段状剥離が全縁周に認められ、縁辺はつぶれて丸くなっている。器厚があり、ずんぐりした形を呈す。右面中央に素材の主要剥離面を残す。13は截断面をもつ。調整剥離は上下両側縁および左右の両側縁にも施されている。上層においても器面のほとんどに調整が施されたものは少ない。

石核　17・19は第Ⅱ層、18は第Ⅲ層出土。17は作業剥離面は一つで、打面は周囲の自然面である。18も作業剥離面は一つであり、打面は周囲の自然面であるが、打点はすべて微細な階段状剥離痕が顕著でつぶれている。両極打撃によるものと考えられる。19は剥離作業面を二面もち、打面は自然面と剥離面である。

以上述べてきた両石器群について簡単なまとめをすれば、基本的な石器組成とその量比率において上下の石器群に大きな差はないと言える。技術的にみても、量的に少ないので明言しえないが、石器の調整加工、剥片生産技術に大きな違いを指摘するのはむずかしい。しかしながら、下層出土の石剣にポット・リドが認められることなど、廃棄内容に若干性格の違いは指摘しうる。

磨製石器

弥生時代の各遺構から出土した磨製石器の内訳は、第8表のとおりである。量としては各遺構とも少ないが、比較的まとまった量が出土したのはＳＸ-101とＳＫ-215である。ここでは両遺構をとりあげ、主に石包丁とその関連資料について簡単に解説したい。

第8表　磨製石器出土遺構別内訳

器種 / 遺構	石鏃	石鏃未成品(研磨)	石鏃未成品(打製)	石鏃剥片(研磨)	石鏃剥片(非研磨)	石鏃製作用石核	太型蛤刃石斧	柱状片刃石斧	扁平片刃石斧	その他の石斧	環状石斧穿孔具	磨石	砥石	ハンマー	合計	時期
SX-101	12	4	5	4	13		6	2		1				1	48	第Ⅲ様式
SX-102		2													2	古墳時代
SX-103					3										3	
SX-201	1														1	第Ⅱ様式
SK-101					3										3	第Ⅴ様式
SK-104		2			1										3	第Ⅴ様式
SK-107	1	1					1						1		4	第Ⅲ様式
SK-115				1											1	第Ⅲ様式
SK-117					1										1	第Ⅰ様式
SK-119	1	1					1								3	第Ⅰ様式?
SK-204							1								1	第Ⅰ様式
SK-205	2						1								3	第Ⅰ様式
SK-206							1								1	第Ⅰ様式
SK-213	1				1										2	第Ⅰ・Ⅱ様式
SK-215	6	3	7		9	1									26	第Ⅰ様式
SK-217	2		1												3	第Ⅰ様式
SK-220											1				1	第Ⅰ様式
SD-07			2				1								3	中世
SD-101	1														1	第Ⅳ様式
SD-104	1			1											2	
SD-105					1										1	
SD-109													1		1	第Ⅲ様式
SD-111					1										1	
SD-201	1	1					1					1			4	第Ⅰ様式

第9表　SK-215磨製石器出土層位別内訳

層位（遺物取り上げ層位）＼器種	石庖丁	石庖丁未成品（球磨）	石庖丁未成品（打調）	石庖丁剝片（非球磨）	石庖丁製作用石核	合計
上層		1				1
第Ⅱ層	3		5	9	1	18
第Ⅲ層	3	1	1			5
第Ⅳ層		1				1
その他			1			1
合計	6	3	7	9	1	26

上層：1～4層，第Ⅱ層：18～20層，第Ⅲ層：21層，第Ⅳ層：22～24層に各々対応する

SK－215出土磨製石器（第61図、図版29上段）

SK-215から出土した磨製石器とその製作に関係する資料の層位別内訳は、第9表のとおりである。出土したのは石庖丁関連の資料がほとんどで、石材は上層の一点を除き全て耳成山産の流紋岩である。

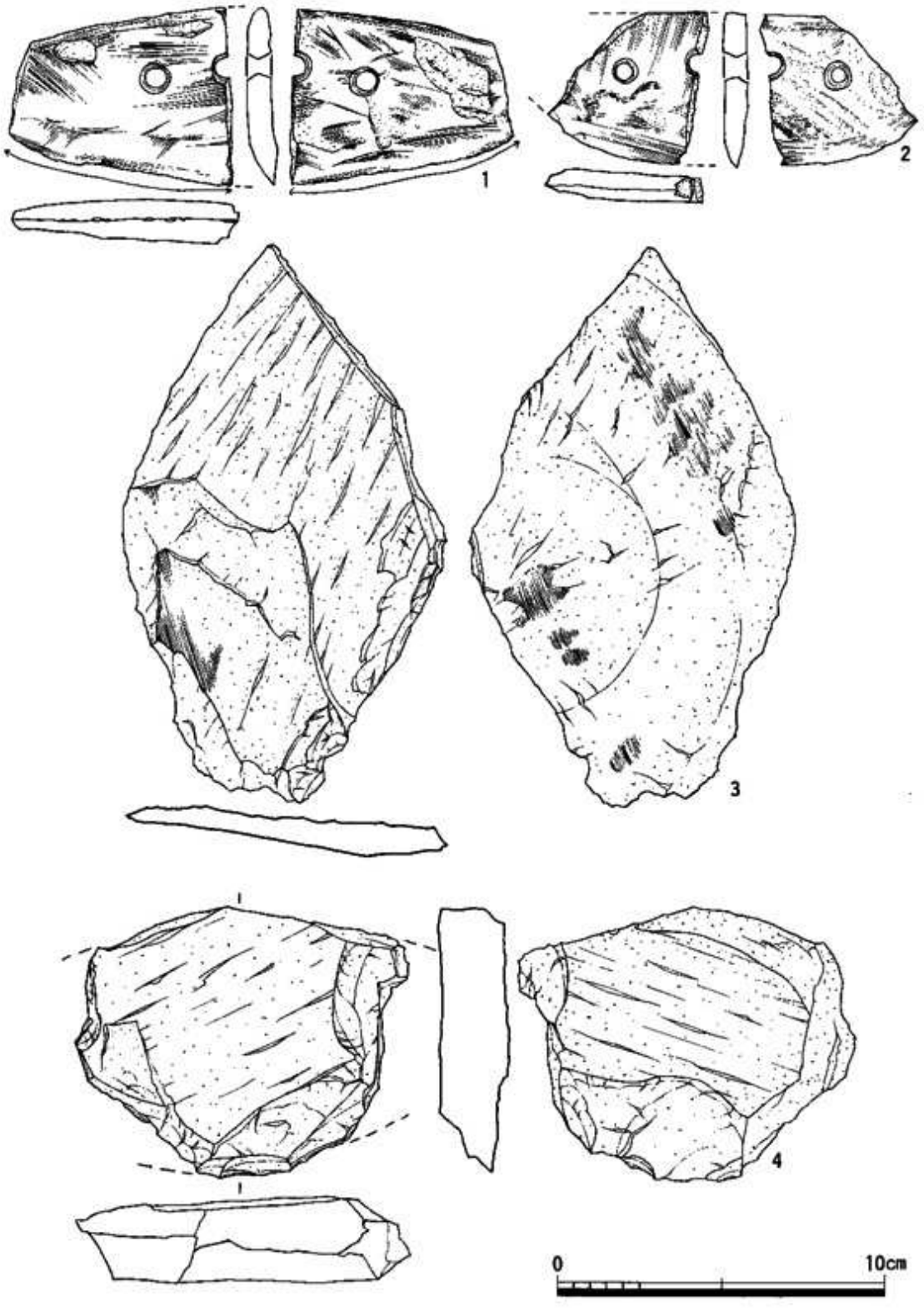
共伴する土器群は第Ⅰ様式新段階に属するものである。

1は長方形を呈する片刃の石庖丁である。片刃の刃部の縁辺付近はさらなる磨きが施されている。縁辺には微細剝離痕が顕著である。2は外湾刃半月形の片刃の石庖丁である。刃部は丸みをおびている。両品とも粗い磨きのあとに細かい磨きが施されている。3は大形の扁平な剝片に磨きを施した石庖丁未成品である。打撃による調整はほとんど施されていない。4は打撃調整段階の石庖丁未成品である。両側縁は折損。なお1・4は第Ⅱ層、2・3は第Ⅲ層出土である。

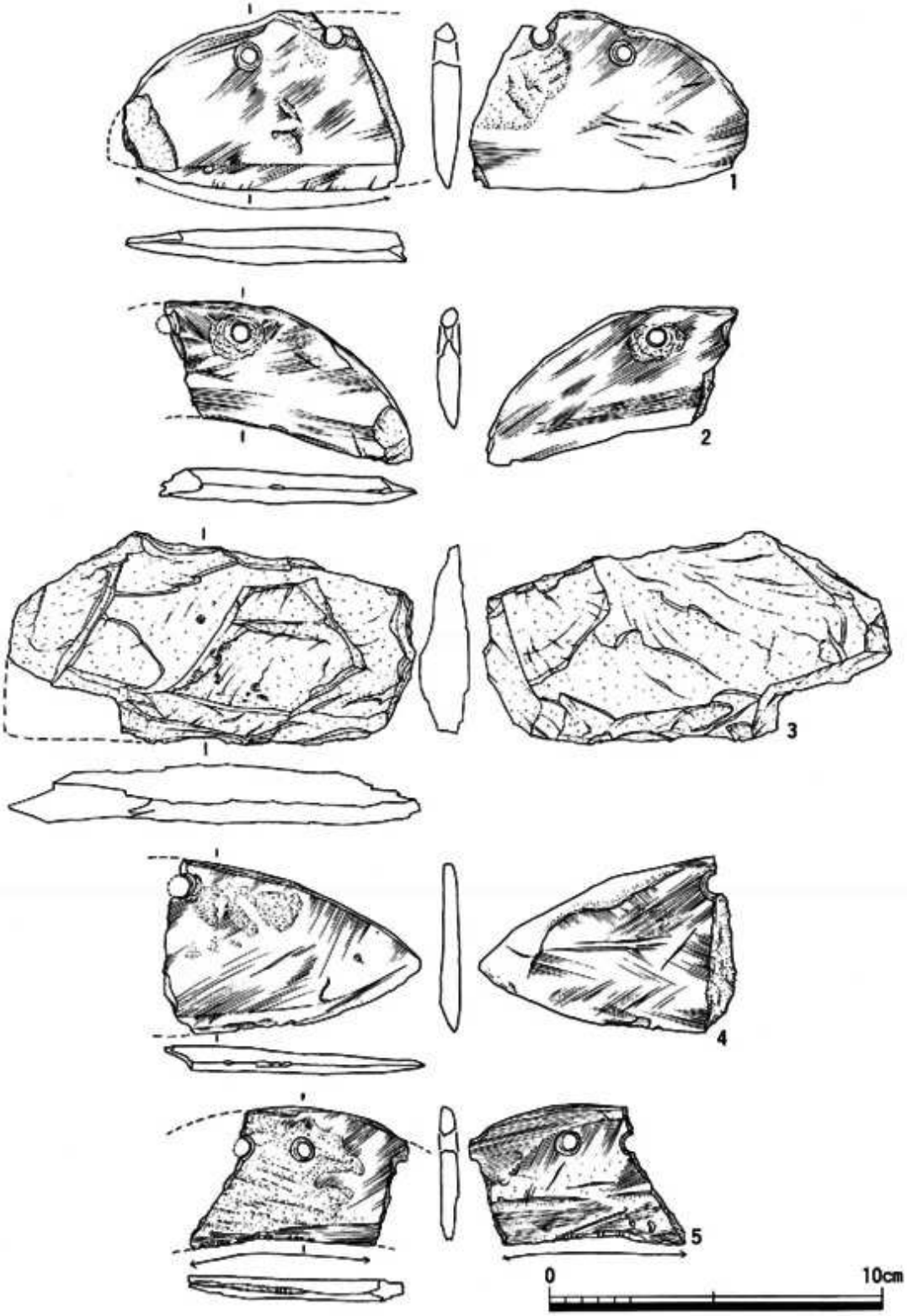
SX－101出土磨製石器（第62図、図版29下段）

SX-101出土の磨製石器の層位別内訳は第10表のとおりである。出土品全48点のうち38点は石庖丁関連の資料である。38点の石庖丁関連資料の石材は、磨きのない剝片13点のうち6点が流紋岩であり前期の遺物の混入と考えられるほかは、ほとんど緑色を呈する片岩である。

1・2は第Ⅵ層、3は第Ⅶ層、4は第Ⅱ層、5は第Ⅲ層出土である。打製石器の項でも説明したように、1～3は下層、4・5は上層に属するものである。1は直線刃半月形の片刃の石庖丁である。刃部は丸く鈍くなっている。2は内湾刃の片刃の石庖丁である。3は打撃調整段階の石庖丁未成品である。周辺に粗い調整が施されている。4は杏仁様の片刃の石庖丁である。刃部の縁辺付近にはさらなる磨きが施されている。5は内湾刃の片刃の石庖丁である。刃部の損傷は著しく、刃はつぶれてしまっている。



第61図　ＳＫ-215出土磨製石器（Ｓ＝½）



第62図　S X-101 出土磨製石器 1～3:下層 4･5:上層（S＝½）

第10表　SX-101磨製石器出土層位別内訳

器種／層位	石庖丁	石庖丁未成品（琢磨）	石庖丁未成品（打調）	石庖丁剝片（琢磨）	石庖丁剝片（非琢磨）	太型蛤刃石斧	柱状片刃石斧	その他の石斧	ハンマー	合計
第Ⅰ層	1				1					2
第Ⅱ層	2	2	1		2	1				8
第Ⅲ層	2			1						3
第Ⅳ層					1					1
第Ⅴ層										0
第Ⅵ層	7	1	2	2	8	4	1		1	26
第Ⅶ層			1		1	1		1		4
その他		1	1	1			1			4
合計	12	4	5	4	13	6	2	1	1	48

石器群の内容としては上下層の間に大きな差はないと考えられる。

包含層中層出土環状石斧穿孔具（第63図、図版30－6）

第63図は環状石斧の穿孔用具であろうか。石材は結晶片岩である。石質が粗いために、突出部の磨きの方向・状態は判別しがたい。

注①

各石器の定義は以下の本文中において主なものを簡単に解説した。なお、定義するにあたり以下の文献を参考にさせていただいた。

蜂屋晴美　1985「石鏃」(『弥生文化の研究』5)

森本　晋　1983「喜志遺跡'80－3区の石器」(『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要・Ⅵ』)

森本　晋　1985「石小刀」(『弥生文化の研究』5)

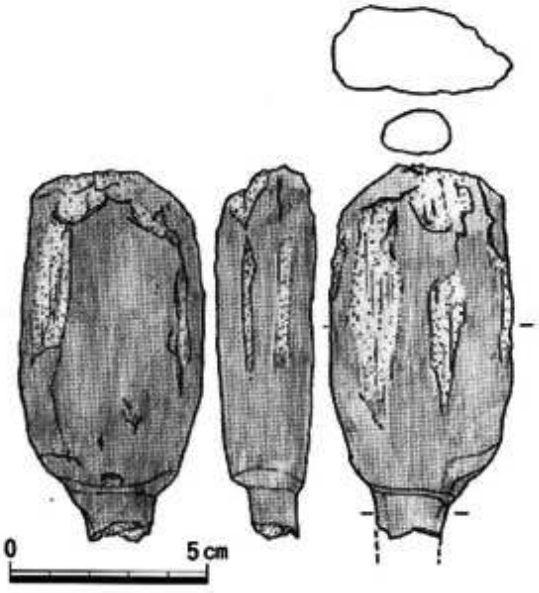
注②

K.P.Oakley 1972 "Man the Toolmaker" (sixth edition)

なお、第5版の邦訳である国分直一・木村伸義訳1971『石器時代の技術』ではP.12に解説されている。

注③

奈良県香芝町在住の吉井宣子氏の御教示による。



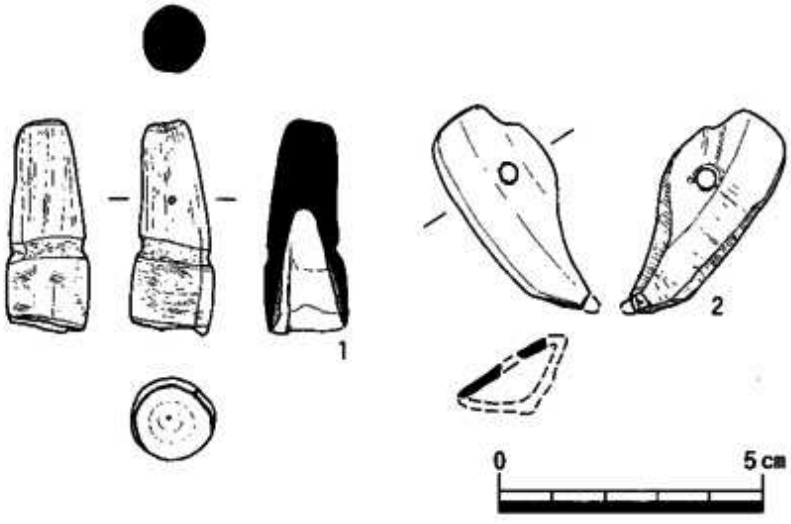
第63図　包含層中層出土環状石斧穿孔具（S＝½）

(4) 骨角製品

本調査において出土した骨角製品は整理途中である為、明確な点数は不明であるが十点内外になると思われる。時期的には弥生前期と中期のものが大半を占める。出土遺構としては溝や土坑からで、廃棄状態で出土した。図版35の上段に示すような製品以外に、図版39の下段や図版41の左側にみられるような鹿角も出土している。これらには素材取得の際の切断痕がみられる。以下、製品の記述をおこなう。

弭形角製品（第64図－1）

鹿角の先端部を加工したと思われる製品である。全長4.15cm、最大径 1.6cmを測る。下端部から上部方向に 2.4cm円錐形に刳貫かれている。下端部から3分1程のところには幅 3.5mm、深さ 1.0mmの溝を切り込んでおり、この溝より下方では整形時の横位の擦痕がみられる。本製品の中央部付近には径 1.2mmの未穿孔が一つみられる。刳貫かれた内部にはタール状の黒色物質が付着している。本製品は形態等から弭と考えられる。時期は第Ⅰ様式で、SK-205出土。



第64図 骨角製品実測図（S＝⅔）

牙製垂飾品（第64図－2）

イノシシの牙を加工した垂飾品である。牙の弓状になった一部を利用し、勾玉状に整形している。全長 4.4cm、最大幅 1.9cmを測る。頭部ちかくには径4mmの円孔を穿っている。先端部は一部折損している。

時期は第Ⅰ様式で、SK-207より出土している。

鹿角製紡錘車（図版35―４）

ＳＸ-101の第Ⅵ層より出土したものである。紡錘車は鹿角の基部を利用したものである。約半分が残存している。両面及び周縁は丁寧に研磨しているが、やや灰白色を呈す部分がみられることから二次焼成を受けている可能性が高い。推定径 4.2cm、中心孔の内径 0.7cm、厚さ 0.8cmを測る。

鹿角製ハンマー（図版39―４）

図版39―４は鹿角製のハンマーと推定されるものである。左角で第１枝上部から第２枝までの角幹部を利用したものである。ハンマー頭部側が鹿角の基部側にあたる。ハンマー頭部先端は折面がみられるが、成形以前のものであろう。第２枝は切断し、全面に丁寧な研磨を施す。第１枝～第２枝部分のカーブをうまく利用し、握部にあてている。ハンマー頭部には敲打痕がみられる。全長21.4cm、重さ約 117g を測る。ＳＸ-101第Ⅳ層より出土した。

(5). 祭祀遺物

祭祀遺物として特に注目されるものに卜骨がある。卜骨は弥生前期のもの１点、弥生中期のもの９点出土した。卜骨の他にイノシシの下顎骨に円孔を穿ったものが２点出土している。これは薬畑遺跡例にみられるように棒をさし込んで吊したものであろう。これについても祭祀遺物として本項で記述をおこなうこととする。

卜骨（第65～68図）

今回の調査では卜骨として断定できるもの10点と不明確なもの２、３点を含む十数点の資料を得た。このような大量の出土は今までの調査でも例が少なく注目されるものである。特にＳＸ-101からは８点も出土しており、これらは同一遺構内の各層に含まれていたもので卜骨祭祀を考える上で貴重である。第20次調査で出土した卜骨については第11表にまとめたので参照されたい。

ここでは卜骨の焼灼を中心に記述する。１～７はイノシシあるいはシカの肩甲骨である。これらの焼灼はその位置より大きく二つに分けられる。１～３は肋骨面の肩甲頸やや下位に焼灼痕がみられるものである。焼灼は縦に２ヵ所施されている。１・２は焼灼の中心部が黒色、周辺部が暗褐色を呈す。３は中心部が火熱によると思われる剝落があり、周辺部は淡褐色を呈している。

４～７は肋骨面の肩甲下窩に焼灼痕がみられるものである。４は肩甲下窩に２ヵ所、後縁に２ヵ所の焼灼を施している。これらの焼灼の中心部は黒色、周辺部は暗褐色を呈している。５においては焼灼が縦に３ヵ所施されており、焼灼の色調は４と同様である。６も５と同じく肩甲下窩に二列の焼灼がみられる。この焼灼痕は他に比べ、色調の変化している所が大きく長径２～３cmにも及ぶ。焼灼の中心部は黒色で、除々に色調は薄くなり周辺部は暗黄褐色を呈す。７及び図版37―５も６と類似する焼灼がみられる。他に第Ⅳ層から出土している肩甲骨片もこれらと同じ焼灼を有している。

第11表　第20次調査出土ト骨一覧表

上段：実測図番号 下段：図版番号	遺構	層位	遺物番号	使用動物	使用部位	残存焼灼痕	時期	備考
65 — 1 36 — 4	SX-101	第Ⅵ層	B-603 B-620	イノシシ	肩甲骨(r.)	2	第Ⅲ様式	2片に分かれて出土
65 — 2 36 — 3	SX-101	第Ⅵ層	B-626	イノシシ	肩甲骨(r.)	2	第Ⅲ様式	
66 — 3 36 — 2	SX-101	第Ⅵ層	B-612	イノシシ	肩甲骨(ℓ)	2	第Ⅲ様式	
66 — 4 37 — 3	SX-101	第Ⅴ層	B-507	シカ	肩甲骨(ℓ)	5	第Ⅲ様式	
67 — 5 37 — 4	SX-101	第Ⅴ層	B-514	イノシシ	肩甲骨(ℓ)	3	第Ⅲ様式	
67 — 6 36 — 1	SX-101	第Ⅳ層	B-401	イノシシ	肩甲骨(ℓ)	7	第Ⅲ様式	大形高杯の横より出土
68 — 7 37 — 1	SK-107	第Ⅳ層	B-402	イノシシ	肩甲骨(r.)	2	第Ⅲ様式	壺に入った状態で出土
68 — 8 37 — 2	SD-201	第Ⅴ層	B-502	未鑑定		1	第Ⅰ様式	
37 — 5	SX-101	第Ⅴ層	B-503	イノシシ	肩甲骨(ℓ)	1？	第Ⅲ様式	
	SX-101	第Ⅳ層	B-402	イノシシ	肩甲骨(r.)	3	第Ⅲ様式	

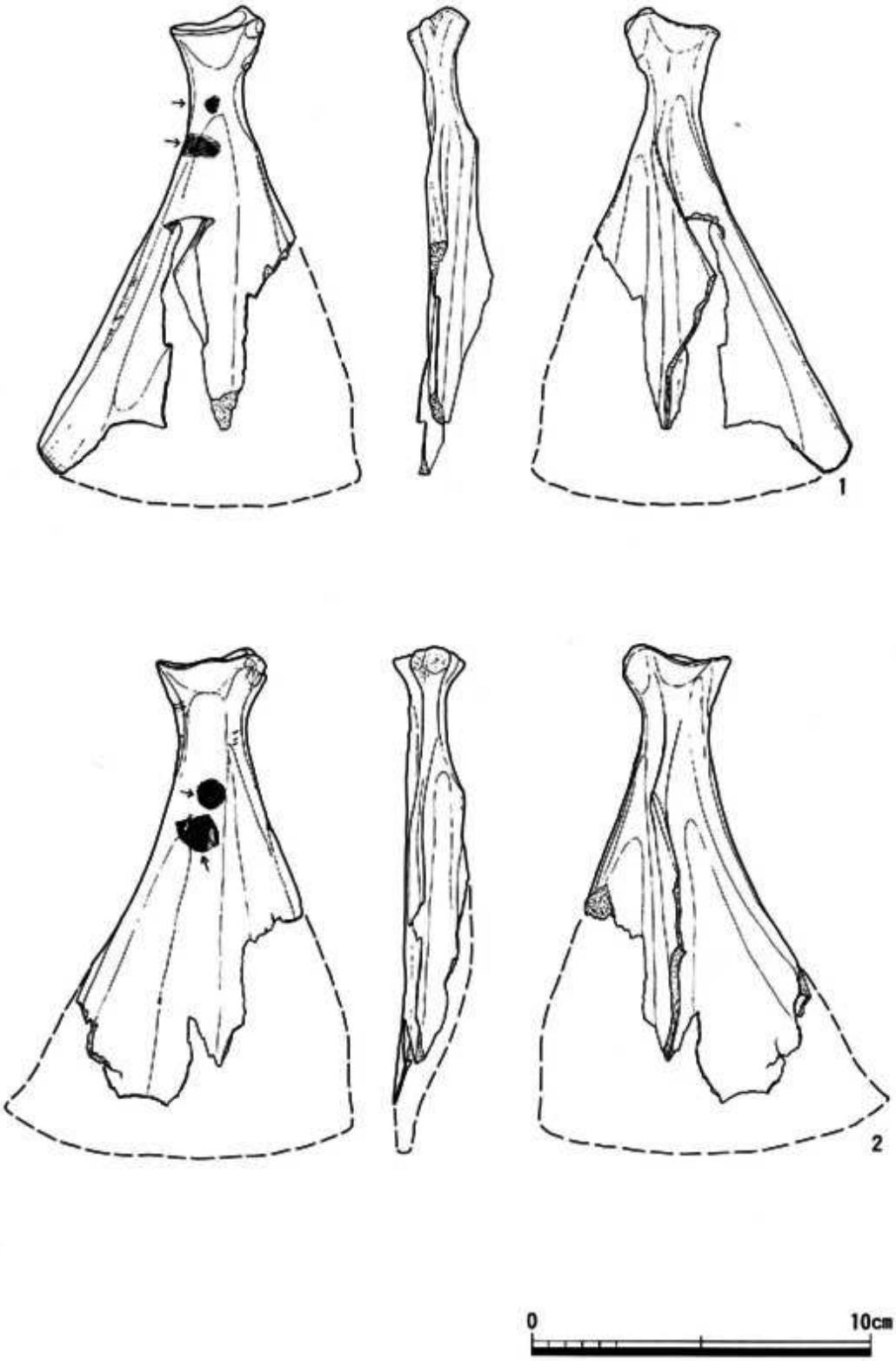
8は未鑑定の為、使用動物・部位はわからないが、焼灼痕が1ヵ所みられる。骨の周縁はすべて折面で切断面はない。焼灼は骨の屈曲部に小さく施されている。中心部は黒色、周辺部は暗褐色を呈している。

これらのト骨とは別に図版37—3・5、図版38—1・2にみられるような黒色あるいは白黄色のすじ状の変色を有するものがある。これについては焼灼点がないことから現状ではト骨から除外しておきたい。

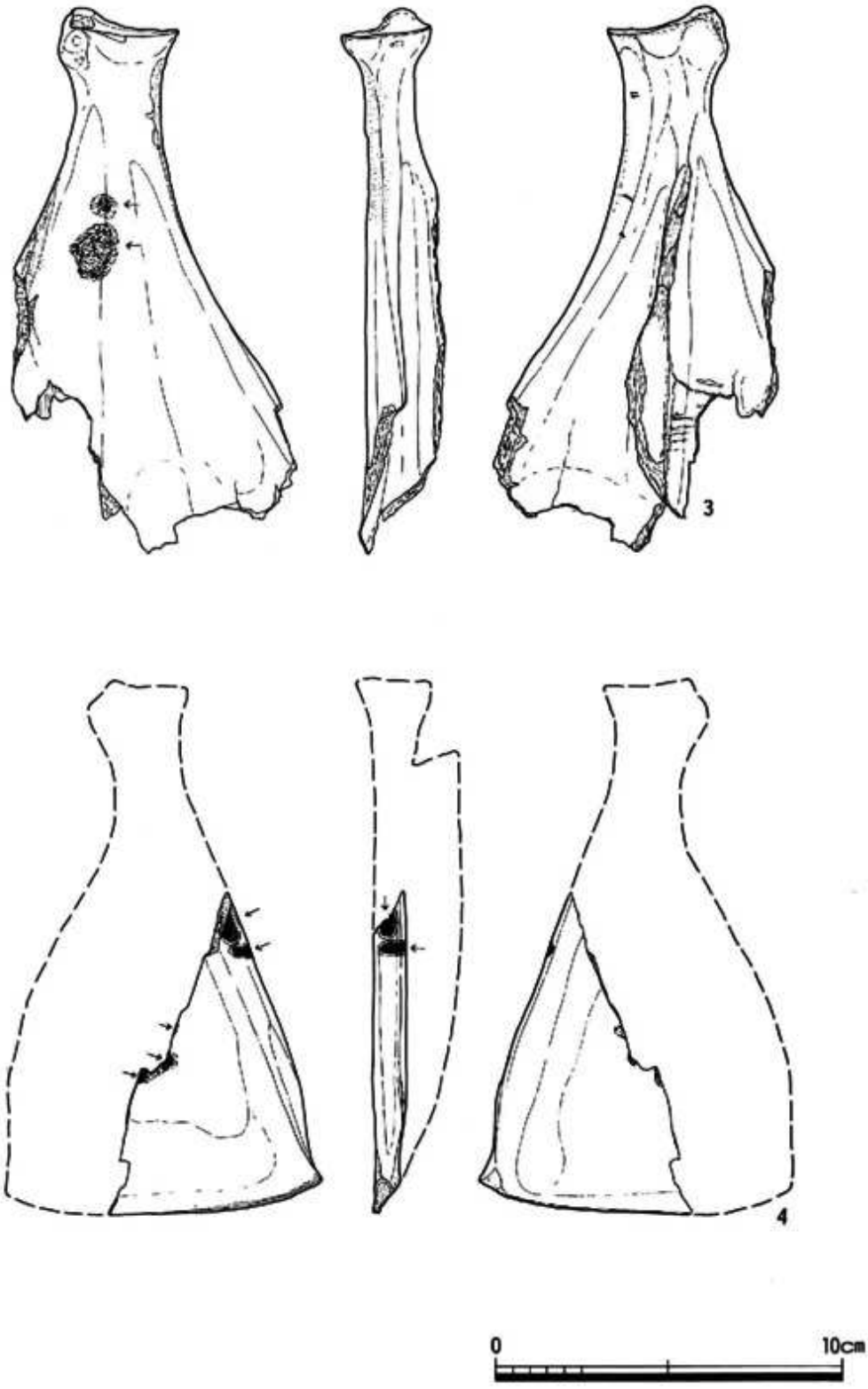
穿孔を有するイノシシ下顎骨（図版38—3、40—2）

図版38—3はイノシシド顎骨の下顎枝部に左右一孔づつを穿ったものである。孔の大きさは、右が1.9×2.1cmの楕円形、左が2.1×2.2cmの不整円形を呈する。本下顎骨は、M_3が萌出し全面に咬耗が及んでいることからかなりの老獣であろう。性別は雄であり、犬歯は左右とも失われているが、犬歯抜去のために下顎体をこわした痕跡は認められない。右側関節突起のつけ根外側に解体時の横位切痕がつく。また、左側下顎体下縁及び下顎結合部下縁に細い切痕が多数つく。SK-104第Ⅶ層出土。

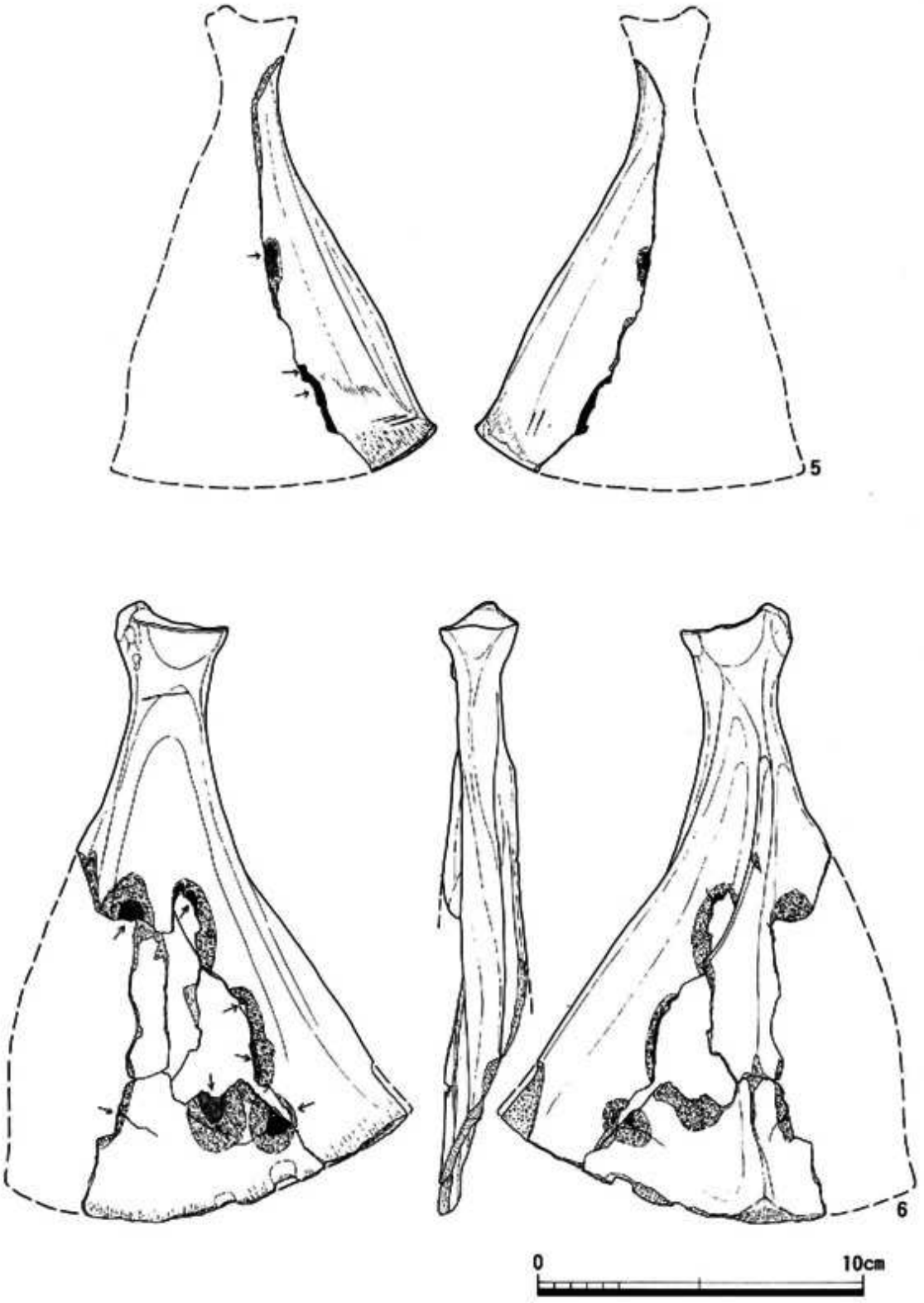
図片40—2も同じくイノシシの下顎骨の下顎枝部に一孔を穿ったものである。下顎は左側のみで、折損している。M_3未崩出のものでSK-104出土例に比べ、若い。孔は2.0×1.4cmの楕円形を呈している。SK-205より出土した。時期は弥生前期である。



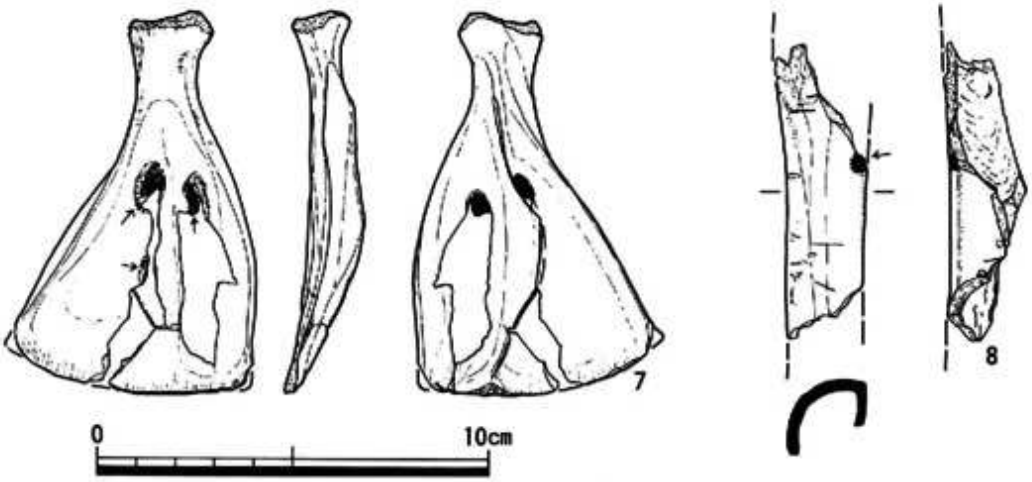
第65図　ト骨実測図１（S＝½）



第66図　ト骨実測図２（S＝½）



第67図　卜骨実測図３（S＝½）



第68図　ト骨実測図４（Ｓ＝½）

Ⅲ．土坑ＳＸ－101の埋積と遺物の廃棄

1．はじめに

本項では弥生時代の土坑の一つを例に、その埋没と遺物の廃棄がどのようにおこなわれていったのかを考察してみたい。従来、住居跡等における遺物の廃棄パターンの試みはなされてきたが、土坑などではあまりおこなわれていない。特に、低湿地における弥生時代の土坑では皆無であろう。

今回の第20次調査では第２表にみるように多くの土坑を検出した。これらの中で特に注目されるのがＳＸ-101の土坑である。本土坑は弥生時代中期の土坑である。この土坑の本来の機能は井戸と考えられるが、井戸の中でもこれまでの調査で最も大きい規模を有するものである。さらに井戸に包蔵されていた遺物には卜骨や完形土器を含み、内容的にも注目されるものである。このような井戸を例に土坑の埋没過程をたどりながら、遺物の一括と廃棄内容を検討していきたい。ＳＸ-101の形状や規模については既に遺構の項において概略を述べているので参照されたい。本項では土層と出土遺物の関係を中心に進めたい。

2．ＳＸ－101の土層と出土遺物

埋積土層と遺物の取り上げ　ＳＸ-101はその上面及び東端を中世大溝によって削平されているが、土坑の中央断面の観察によると36の分層が可能であった(第９図においては23層分のみ土色を示した)。また、土坑西端のトレンチ壁面の土層観察においても、中央土層とほぼ対応する土層を認している。しかし、これらの細分土層を、土質を中心に大別すると上層から粘質土・粘土・植物腐植土層・粘土・砂質土・粘土・粗砂となる。

発掘時における遺物の取り上げは湧水等と関係があり、厚さ数cmの土層の識別や広がりを正確に全て把握することは困難であり、遺物の取り上げは細分層ではなく、大別層にちかいものとなった。遺物の取り上げは上層から第Ⅰ層とし、第Ⅸ層に及んだ。これを土質と取り上げ層位を対応させると次のようになる(第12表)。これらの遺物取り上げ層位の中である程度、土層の厚さがある場合は(下)を設定し、また、同層においても土坑の肩にちかい部分の取り上げは(B)、(C)として遺物を分け取り上げた。さらに、グリットによる取り上げをおこない、遺物の原位置をおさえるように努めた。このような発掘作業を一つの基本として、出土遺物の検討をおこないたい。

3．出土遺物の検討

土器の廃棄　土器はすべての土層から出土しているが、その量や完存品の有無、破片の大小など土器の残存状況は大いに異なる。土器量の最も多いのが、第Ⅵ層で、次いで第Ⅱ層・第Ⅲ層となる。逆に少ない量の土層は第Ⅷ・Ⅸ層である。これを概数で示すと第13表のようになり、土器量において第Ⅱ層と第Ⅵ層に二つのピークが認められる。

第12表　細別土層・大別土層と遺物の取り上げ関係表

細別土層(中央断面)	大別土層	遺物の取り上げ	主要遺物
1～3層	粘質土	第Ⅰ層	
4.5層 6層	粘土	第Ⅱ層 第Ⅱ層(下)	土器群
8層	粘土	第Ⅲ層	土器群
9層	植物腐植土	第Ⅳ層	卜骨・高杯・鹿角製ハンマー・木製品
11層 12層	粘土	第Ⅴ層 第Ⅴ層(下)	卜骨、犬四肢骨
16層 17～20層	砂質土	第Ⅵ層 / 第Ⅳ層(B) 第Ⅵ層(下) / 第Ⅳ層(C)	卜骨・完形土器群、横槌、アカニシ
21、22層	粘土	第Ⅶ層	甕（第13次SD-06溝出土と接合）
23層	粗砂	第Ⅷ層 第Ⅸ層	

第13表　SX-101における各層の土器量概算

	土器量
第Ⅰ層	1.1
第Ⅱ層	6.5
第Ⅲ層	2.0
第Ⅳ層	0.8
第Ⅴ層	2.5
第Ⅵ層	**12.0**
第Ⅶ層	1.2
第Ⅷ層	0.5
第Ⅸ層	0.2
計	26.8

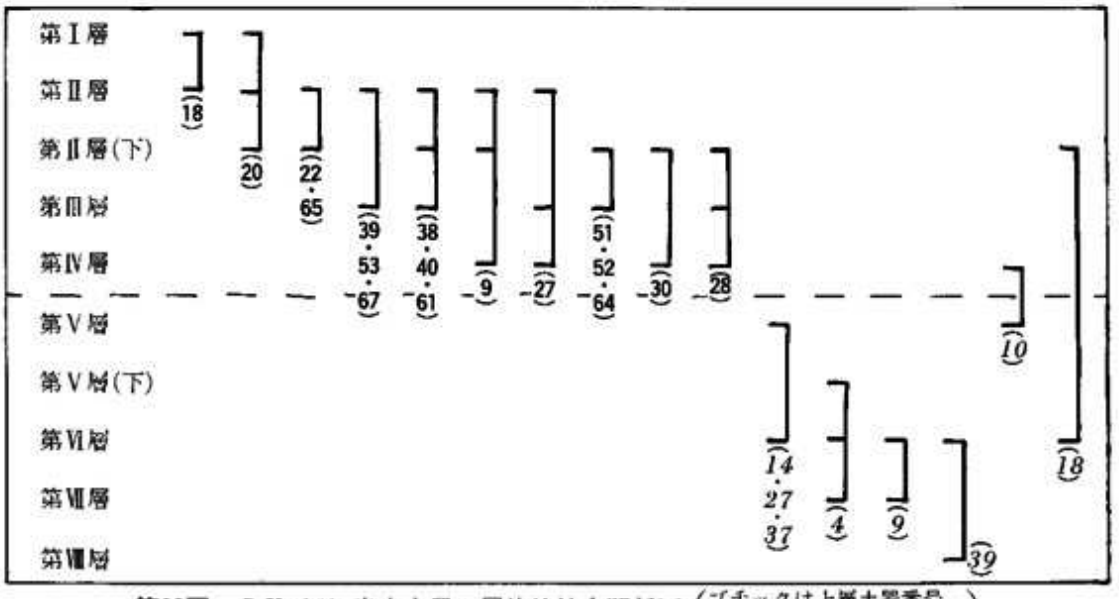
（セキスイコンテナTS-28(34×54×15cm)において満杯にした時の量を1.0とする）

第14表　甕における口縁の残存度

層位	x/12 残存度	点数
第Ⅰ層	1.3	13
第Ⅱ層	2.4	35
第Ⅱ層(下)	**3.2**	17
第Ⅲ層	**3.4**	29
第Ⅳ層	**3.2**	7
第Ⅴ層	1.2	13
第Ⅵ層	1.5	49
第Ⅶ層	0.5	3
第Ⅷ層	1.8	6
平均値	2.1	172

二番目の作業として**土器の破片の大小**があげられる。土器片の大きさを相対的な数値におきかえるのは困難であるし、全ての器種についても無理なため、甕を一例に考えたい。ＳＸ-101出土の甕の口縁部を基準とし、その残存度を割り出した。口縁部を12等分し、1/12よりやや少ないものも含めた口縁部を統計処理した。これをまとめたものが第14表である。口縁の残存度の高いのは、第Ⅱ層(下)と第Ⅲ層・第Ⅳ層で3.3/12前後を示している。他層出土の甕は0.5/12～2.4/12でややばらつきがあるが、1/12前後のものが多い。このような傾向は、他の器種についても同様である。このようにみれば、第Ⅲ層を中心に大形の破片の廃棄がみられ、他層ではそれより小さい破片の廃棄がおこなわれたようである。また、この第14表にみるように各層の甕の破片数は第Ⅱ・Ⅲ層と第Ⅵ層が多く、前述のコンテナによる概数とその傾向は変わらない。このことは甕の廃棄が特殊な状況に基づく廃棄でないことを物語っている。

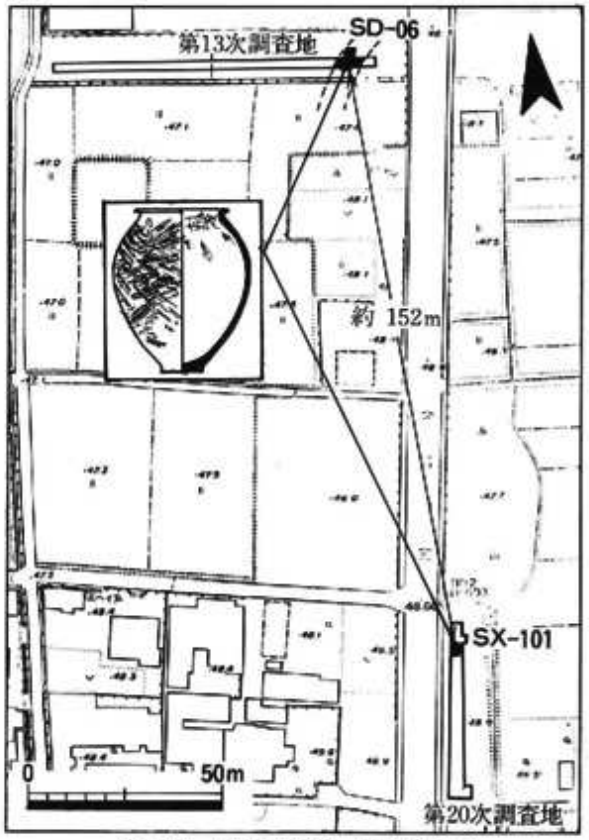
三つの作業として**完形品の廃棄**を検討したい。出土した土器の中で完存品は６点、打ち欠きによる半完形品は３点である。層別・器種別では第Ⅱ層(下)で小形壺(第33図―６)１点、第Ⅳ層で脚部を打ち欠いた高杯（第37図―35）１点、第Ⅵ層で壺３点（第28図―10、第29図―18、20）・壺上半を打ち欠き転用した鉢（第30図―35）１点、脚台部を打ち欠いた台付鉢（第30図―27）１点、鉢（第30図―34）１点、ミニチュア高杯（第32図―51）１点である。完形品が土器量の多い土層に集中していることは注目されるが、完形品の廃棄は最後にまとめて論じたい。



第69図　ＳＸ-101 出土土器の層位的接合関係図（ゴチックは上層土器番号 イタリックは下層土器番号）

四つ目の作業として、**土器の異層間の接合**を考えてみたい。土器の接合は同じ土層どうしで接合するものが最も多いが、同層でも地区が異なるものもある。ここでは異層間の接合について第69図にまとめた。これは第27～42図に示した土器のみである。これによると第Ⅱ層を中心にするグループと第Ⅵ層を中心とするグループに大きく分れる。これは前からみてきたように第Ⅱ層・第Ⅵ層の土器量・破片量の傾向と類似しており、注目される。これに対し、大きく異なる土層間の土器の接合も1例あり、どのような原因の結果か、現時点で判断できない。異層間の土器の接合の原因として、**1**．同一土器の廃棄が断続的におこなわれた。**2**．土器の廃棄時にどちらかの破片が下層まで埋没した。**3**．土器廃棄後、土器埋没土層の浸蝕など土坑の自然的環境の変化。**4**．土器廃棄後、土坑の再掘削など人為的な土層の撹乱。**5**．発掘時の未熟さによる原因、などがあげられよう。いま、異層間で接合した土器を発掘から整理までを通じてみるならば、2あるいは3の原因の可能性が高い。このように考えるならば、大きく分れる二つのグループ内での時間幅が問題になってこよう。現時点では土器型式差は認めることはできない。

五番目の作業として遺構間の土器の接合がある。ＳＸ-101第Ⅶ層から出土した甕（第31図—44）と第13次調査ＳＤ—06中期溝最下層から出土した甕[注①]が接合した。この二遺構間の直線距離は約 152m で、本遺跡においてこのような遠距離の接合は初めてである（第70図）。ＳＤ—06中期溝は唐古・鍵ムラの最も内側の大環濠で幅10m を有するものである。この環濠の最下層からはイノシシ下顎骨7体分が集積した状態で出土し、これより 0.4m 離れた地点より甕が出土した。このように土坑と環濠という性格の異なる遺構で土器が接合したのは、自然的環境の変化による原因などではなく、明らかに人為的行為によるものである。



第70図　遺構間接合土器関係図

石器・木器の廃棄　石器については3．出土遺物の中の(3)の項においてまとめてあるので詳しくは触れない。石器は第56図にみるように二つ

のピークがあり、器種組成も同様の比率である。これは土器にみる状況と類似しており、同じような状況のもとで廃棄がおこなわれたのであろう。ただ、第Ⅵ層より出土した石剣が温度変化による折れ面を有していることは注目される。

木器は遺構に組まれていた木材を除くとかなり限られた土層で出土している。また、製品として認識できるものは少なく、製品の断片が大半を占めている。第Ⅱ層から第Ⅶ層にかけて木製品は出土し、完存品は第Ⅳ層から用途不明木製品（杓子状）が、第Ⅵ層から横槌が出土している。第Ⅵ層では長さ約1m、巾約0.17mもある不明部材断片も出土しており、本層には大形木製品が多いようである。木製品については数置をもって表わすことができないため、以上のような傾向が認められるということで留めたい。最後に第Ⅵ層においてはざるの断片も検出している。

その他の遺物の廃棄 獣骨関係では骨角製品と祭祀品（ト骨）、獣骨に分けられる。**骨角製品**は第Ⅳ層より鹿角製ハンマー、第Ⅵ層より鹿角製紡錘車片、同製不明品断片各1片が出土しているのみである。**ト骨**については、3．出土遺物の(5)．祭祀遺物の項で述べているので触れない。SX-101出土ト骨は8点で、完存品は第Ⅳ層出土品のみである。層別では第Ⅳ層2点、第Ⅴ層3点、第Ⅵ層3点である。これらト骨は散在して出土した。ただ、Ⅳ層出土のト骨1点は高杯と同一レベルで検出した。他の**獣骨**は大形・小形ともに含んでおり、層間の変化はみられない。第Ⅴ層から第Ⅵ層にかけて量的に多い。第Ⅴ層では同一個体と思われる犬の四肢骨を比較的まとまって検出し、廃棄時のまま、ほぼ原位置に保持されていたと考えられる。他の獣骨は個々別々で同一体と思われるものはないようである。したがって、獣骨に関してはまとまった骨の廃棄はト骨と犬骨を除くとない。

他の遺物では自然遺物があげられるが整理中であるため、概要を述べるにすぎない。第Ⅳ層で籾殻を含む植物遺体、第Ⅵ層でアカニシを約10点、他に二枚貝、小形巻貝（淡水産）などを検出している。この層では他に炭化米、モモ類なども含まれている。全体の土層からみれば第Ⅳ層から第Ⅵ層を中心に多く自然遺物を検出した。第Ⅳ層の植物遺体はその厚さや広がりからみて意識的に廃棄したのであろう。

4．土坑の埋没と遺物の廃棄

土坑埋没の二過程 SX-101から出土した土器、石器、木器などの廃棄を通じて大きく二つの埋没過程が考えられる。いま、これを上層と下層の二つに分けると第Ⅰ～Ⅳ層までが上層、第Ⅴ～Ⅶ層までが下層となる。土器や石器の出土量の層位的変化や土器の異層間接合の二つのまとまり、獣骨や自然遺物の上・下層での差異などの状況から二つの埋没過程が想定された。

下層の埋没過程は井戸としての機能が果されている時点から機能不能になる段階である。第Ⅶ層は最下部にあたり、粗砂層で形成されており、遺物も少ない。土坑掘削後、短期間に形成された土層であろう。第Ⅶ層・第Ⅴ層は堆水時に形成され、遺物は少ない。第Ⅵ層は層的に最も厚いが、砂質土で構成されており、土坑の肩部のベース砂層の崩壊と流れ込みで形成されたのであろ

う。このため、土器などの遺物には細片が多く含まれている。これは土層と同時に形成されていった遺物群であり、**自然堆積遺物群**としてとらえられる。これに対し、この第Ⅵ層では完形品や完存木製品、ト骨、巻貝類など人為的行為によるものも同時に含まれており、層の形成は複雑である。第Ⅵ層を時間の流れの中でみれば、雨水などによる土坑肩部の浸蝕と堆水を繰り返し、自然堆積遺物群が構成され始める。これと同時に、祭祀行為後の遺物群が断続的に廃棄され、全体として第Ⅵ層が構成されたのであろう。第Ⅵ層は緻密な粘土層（第Ⅴ層）によって密閉されてしまう。これら第Ⅶ～Ⅴ層の形成で土坑は浅い落ち込み状の遺構に変形してしまい、井戸の機能は全く失われてしまう。

上層は第Ⅰ～Ⅳ層であるが、第Ⅰ～Ⅲ層は粘質土・粘土層で、第Ⅳ層の植物腐植土層とは全く異なる。第Ⅳ層は人為的に形成された層であろう。第Ⅵ層から第Ⅴ層、さらに、第Ⅳ層と各層毎にト骨を含む**人為的廃棄遺物群**が含まれており、祭祀遺物の廃棄が連綿と続いていたのであろう。第Ⅳ層形成後、堆水状態になり、土器などの遺物廃棄坑としての機能に変化したと思われる。これは土器において第Ⅰ～Ⅲ層に小形壺以外の完形品が含まれていないのに反し、大形破片が多いことからいえるであろう。また、土器、石器を中心とする遺物で構成されていることから、人為的廃棄遺物群としてとらえてよかろう。しかし、下層でみられた同遺物群とは性格が異なり、人為的廃棄遺物群の各要素として細分が可能であろう。

祭祀遺物群の構成 廃棄された祭祀遺物群は第Ⅶ～Ⅳ層に含まれている（第71図）。**第Ⅶ層**からは第13次調査ＳＤ—06中期溝出土の甕と接合した甕片が検出されている。ＳＤ—06の溝ではイノシシの下顎ばかり７点が集積しており、イノシシ下顎を用いた祭祀[注②]の後集積され、これらとともに甕も分割廃棄されたと考えられる。その後の廃棄は専らＳＸ-101の土坑でおこなわれるようになった。ト骨は第Ⅵ～Ⅳ層でみられるが、各層毎焼灼部位、焼灼数が異なる。第Ⅵ層では３点で、各々肩甲頸下位に２個の焼灼がみられる。第Ⅴ層も同じく３点であるが、各々は肩甲下窩に１～５個の焼灼がみられる。第Ⅳ層は２点で肩甲下窩に３個と７個の焼灼がある。このように各層毎でト骨にまとまりがみられることから、各層のト骨は一括の可能性が高い。また、これらとともに使用された多くの遺物が廃棄されたと考えられる。これについては前に述べた完形土器であり、完存木製品であり、巻貝類である。**第Ⅵ層**ではト骨の他に土器が多い。特に広口長頸壺内部には炭化した雑穀が残っていた。甕の代わりに使われたのであろう。また、アカニシの巻貝が10点あまり出土した例はなく注目される。この他、植物食料等の分析が進展すれば、供献あるいは共食食物の内容が明らかにされるだろう。木製品に横槌が存在することから、農耕関係、あるいは火を受けたと思われる石剣２点の存在も重要で戦闘や狩猟関係の祭祀を想定できるかもしれない。**第Ⅴ層**ではト骨の他、犬の四肢骨の一部がみられるのみで、これが主要な構成となる。土器類の廃棄はみられない。**第Ⅳ層**はト骨は２点のみであったが、土坑全体に籾殻を含む植物腐植層が広がり、人為的な廃棄である。この植物遺体中にト骨や高杯や鹿角製ハンマーを含んでいた。本層も第Ⅴ層と同じく構成される遺物は少ない。ただ、第Ⅳ層出土のト骨の焼灼痕が他のト骨に比べ、

大きく数が多いのは注意のひく点である。

土坑の機能 ＳＸ-101は本遺跡において群をぬく大形土坑である。この土坑を通して、土坑埋没の過程と遺物群の構成と性格を論じてきた。土坑遺物群の一括性について詳細な検討を必要とする。本土坑では、

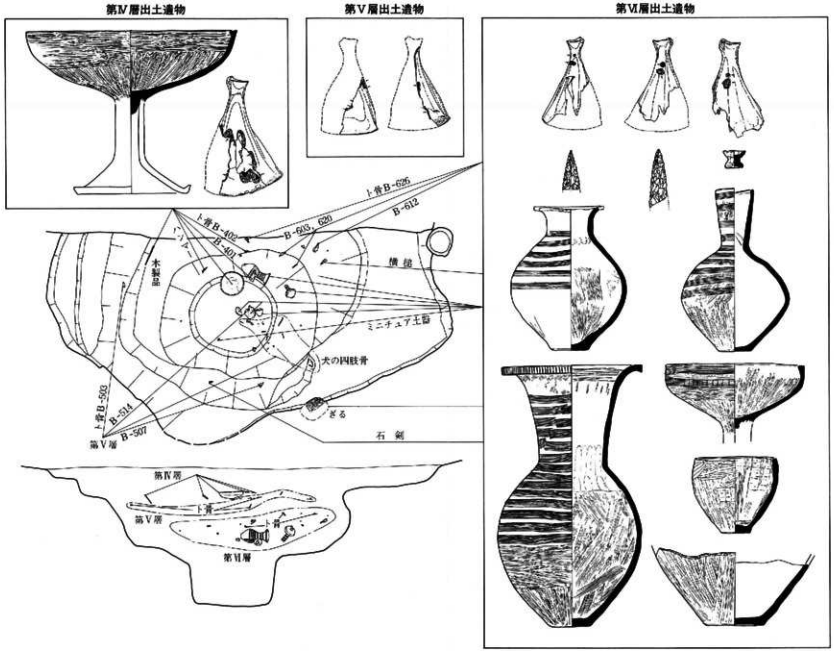
井戸の機能段階→井戸の機能喪失段階⇒祭祀遺物の廃棄坑⇒人為的遺物の廃棄坑(土器廃棄坑)→土坑埋没段階

自然堆積遺物の形成

というパターンがみられた。土坑の性格は時間の流れとともに変化し、そこで構成される遺物群の性格も異ってくる。今回の分析は一土坑の埋没パターンであるが、今後、このような分析は各々の土坑でおこなわれる必要があろう。

注) ①藤田三郎他「昭和57年度　唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報」田原本町教育委員会　1983　本書掲載第11図－５の土器

②唐古・鍵第３次調査ではイノシシの下顎14個体が棒に吊されていたと思われる出土状態を呈していた。また、イノシシの下顎を穿孔したものも本遺跡で７例検出しており、イノシシの下顎を用いる儀礼を想定できる。



第71図 ＳＸ-101 層位別祭祀遺物関係図

Ⅳ．土坑ＳＸ－101出土甕の分析

—弥生中期における甕の一様相—

1．はじめに

今回の第20次調査において出土した土器の主体は弥生時代前期から後期までの土器である。これらの中には土坑に半完形・完形土器などを包含した良好な資料が数多くみられる。とりわけ、弥生時代中期の土坑であるＳＸ-101は各層毎に多くの土器包含がみられ、層毎の土器変化をとらえるのに良好な資料と思われた。しかし、その土器量が多く、すべての器種について触れることはできないので、今回はＳＸ-101出土の甕の分析結果について述べたい。特に近年、大和型甕の型式とその変遷、地域性が問題化される中、今回の分析では有効な結果が得られたので報告したい。

2．方法

土層の大別と細別

ＳＸ-101の土坑の形状及び出土遺物、その性格については、(3). 弥生時代中期の遺構の項において、また、土坑の埋没過程については、「Ⅲ．土坑ＳＸ-101の埋積と遺物の廃棄」の項において述べているので詳細については触れない。しかし、上記の二つの記述、特に土器の出土状況や層位間接合、また、土器の土中での保存状況や土器破損率、土坑の土層堆積や鍵層（植物腐植土層）などから、ＳＸ-101出土の土器は大きく上・下に二分されると考えられるのである。このようなことから、今回の分析にあたっては細別の土層をもって分析しながらも、最終的には上・下二層に分別して結果をまとめることとした。しかし、細別土層間の土器を型式学的に検討もおこなったが、この型式学的変化はとらえるまでには至っていない。

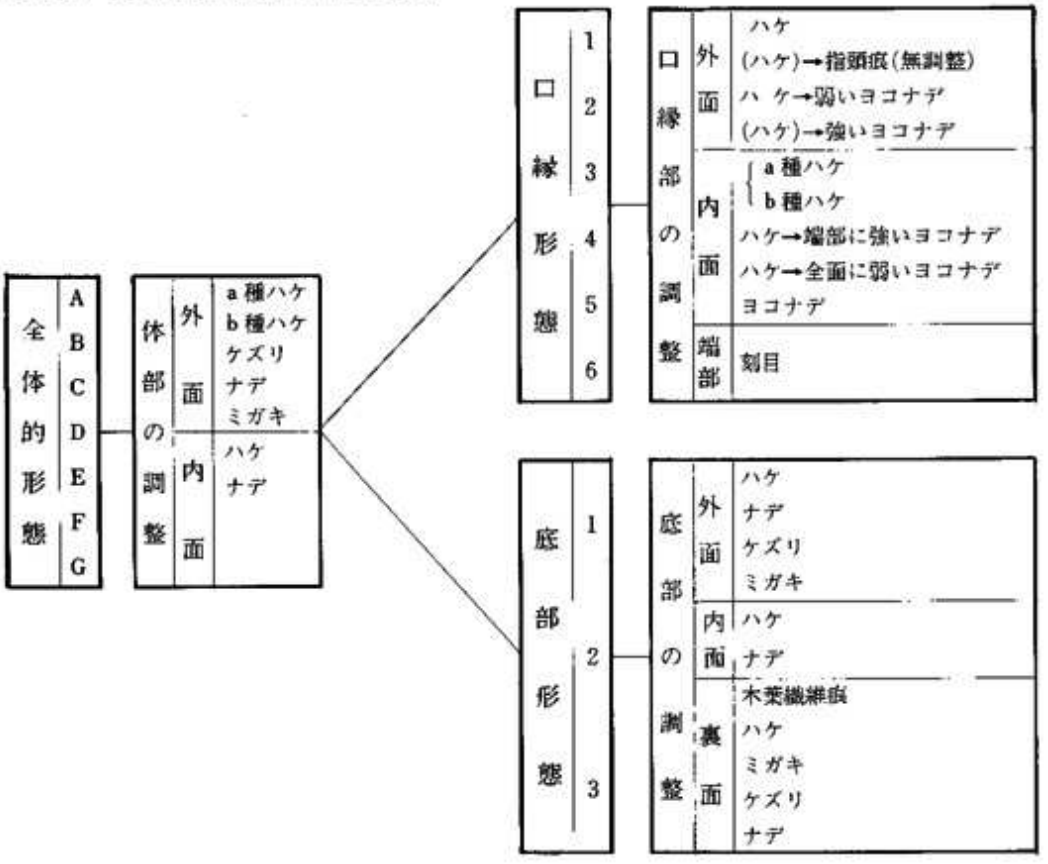
分析資料の基準

分析の対象となる甕は小片から完存にちかい甕まで含まれている。これらの資料はまず、充分な接合と個体識別をおこない、同一個体の二度にわたるカウントをさけるよう努めた。次に分析資料として取り扱った甕の部位は口縁部と底部で、体部のみの破片はさけた。また、口縁部や底部の破片はその残存している割合が全体の1/12以上を一つの目安として処理したが、それ以下のものもわずかに含んでいる。

甕の属性分析

本土坑出土甕は多様で、その形態から調整手法まで複雑に関係し構成されている。甕の属性は大きく形態的要素と手法的要素に分けられる。今回の資料では類似する形態を有しながらも調整手法が大きく異なるものやあるいは調整手法を似せているものがある。この為、この二つの要素を総合し、１つの甕の認識をはからなければならない。この分析においては形態的要素と手法的

第15表　甕の形態的要素と手法的要素

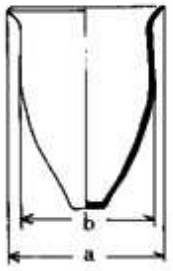
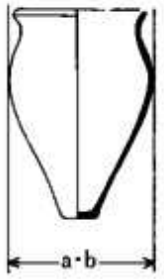
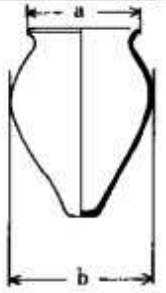
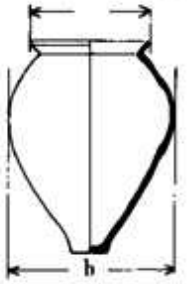
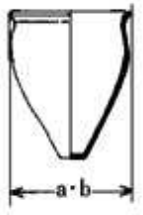
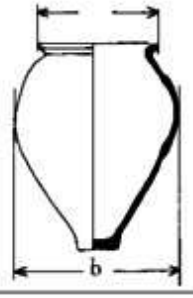


要素がいかに関連し、一つの甕が成り立っているのかに注目したい。これを把握することにより、各々の甕の型式や系列が明らかにされるであろう。

甕の形態的要素として、その全体的な形態と大きさ、さらに細分要素として口縁形態と底部形態があげられる。これらの形態的三要素の各々に調整手法が含まれる。これをまとめると第15表になる。

全体的形態　甕の全体的形態は口縁部径と体部径の比率や口縁部の屈曲度によって分類した。この基準によれば大きくA～Gの7形式に分類可能である（第72図）。

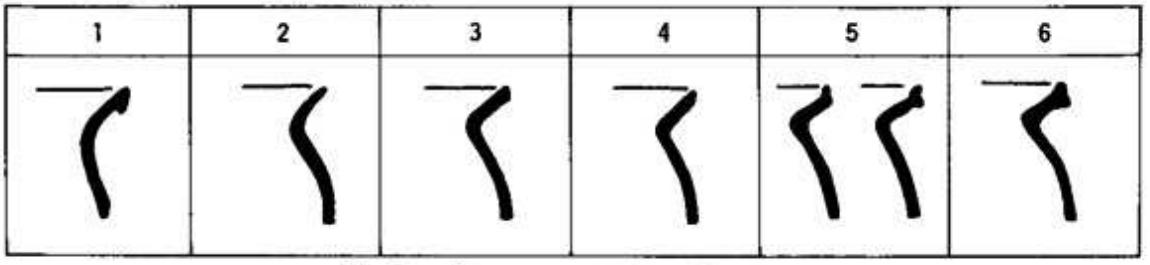
体部の調整手法　体部外面の調整にはハケ・ケズリ・ナデ・ミガキがある。とりわけ、ハケ調整には二種の手法（第73図）がみられる。**a種ハケ**とは口縁部から体部にかけて縦位の粗いハケである。ハケ原体の静止痕が不明瞭である。これに対し、**b種ハケ**とは体部上端（くびれ部下位）からハケ調整がおこなわれるものである。ハケ調整は体部上端がナナメハケ、体部上半はナナメ

	口縁部径が体部径より大きいが、ほぼ同じもので、体部の張りがほとんどない。 a ＞ b	口縁部径と体部径がほぼ等しいか、体部径がやや大きい a ≒ b	口縁部径が体部径より小さい。球形にちかい体部を有する。 a ＜ b
口縁部のくびれ部がゆるやかに屈曲する。			
口縁部のくびれ部が「く」の字状に屈曲する。			
口縁部は短く、折り曲げるように屈曲する。			

第72図　甕における形態分類図

あるいは縦位のハケとなる。体部上端のナナメハケは口縁部の屈曲を顕著にし、明確な「く」の字状口縁を呈すためのものである。

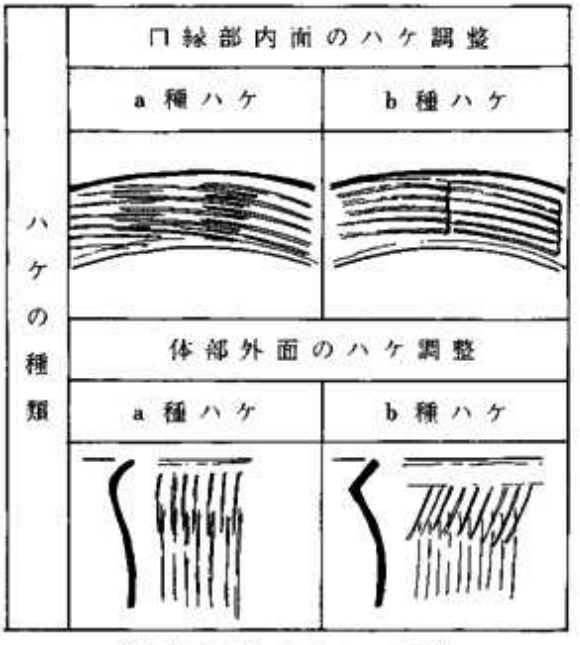
体部内面の調整にはハケ調整、(ハケ調整) →ナデ調整がある。



第73図　甕における口縁部の形態分類図

口縁形態　甕の口縁形態は口縁端部の面のもち方によって分類される(第74図)。大きく6種の形態がみいだされる。1は口縁端部を下方へ折り曲げるもので、わずかに肥厚する。2は口縁端部が円頭形になるものである。3は口縁端部に明瞭な面を有するものである。4は3に比べ、端面は発達していないが、面を有するものである。5は上方へ鋭く突出し、いわゆるハネ上げ口縁とよばれるものである。6は上下に肥厚し、5にちかいが、突出部があまく発達していない。

口縁部の調整手法　外面には4種の手法がみられる。ハケのまま残しておくもの、ハケ後？指頭による口縁部の成形（ハケを消すナデではない：無調整)、ハケ後口縁内面全体に弱いヨコナデ



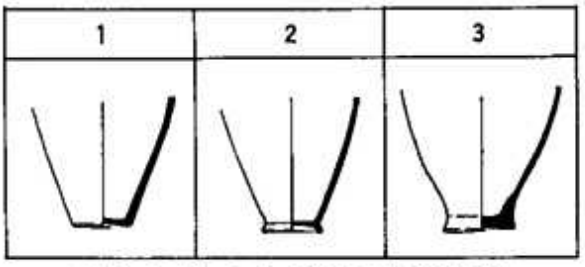
第74図　甕におけるハケ調整

を施すもの、ハケ後？強いヨコナデを施すもの（ハケは消えている）の４つの手法がみられる。

口縁部の内面の調整もハケおよびヨコナデ調整である。この二種の調整は大きく４通りの施し方がみられる。1つはハケ調整のみのものである。このハケには２種の施し方がみられる（第73図）。**a種ハケ**とは粗いハケで器面に深く刻み込まれており、先後のハケが大きく重複し、ハケ原体の静止痕が不明瞭なものである。**b種ハケ**とはa種ハケに比らべ、原体が器面に浅く刻み込まれており、ハケ原体の静止痕が明瞭なものである。簾状ハケふうの調整をおこなっている。２つ目はa種・b種のどちらかのハケを施した後、口縁端部に強いヨコナデをおこなうものである。３つ目はハケ後、内面全体に弱いヨコナデをおこなうが、ハケは消えていない。４つ目は内面全体に強いヨコナデをおこなうものでハケは消されている。

なお、口縁端部をヨコナデで成形するもの以外にハケによって形態を整えるものもある。刻目は口縁端部にハケあるいはヘラによって刻まれるものがある。その部位は端面全体、上端、下端、上・下端の４つがみられる。

底部形態　底部はその形態から３分類が可能である（第75図）。１は体部から直線的に底部に至るもので、底縁の突出はみられない。器壁は薄く仕上げられている。２は１の形態に短い台を付加したものである。３は１に比して底縁が突出し、器壁は厚い。



第75図　甕における底部の形態分類図

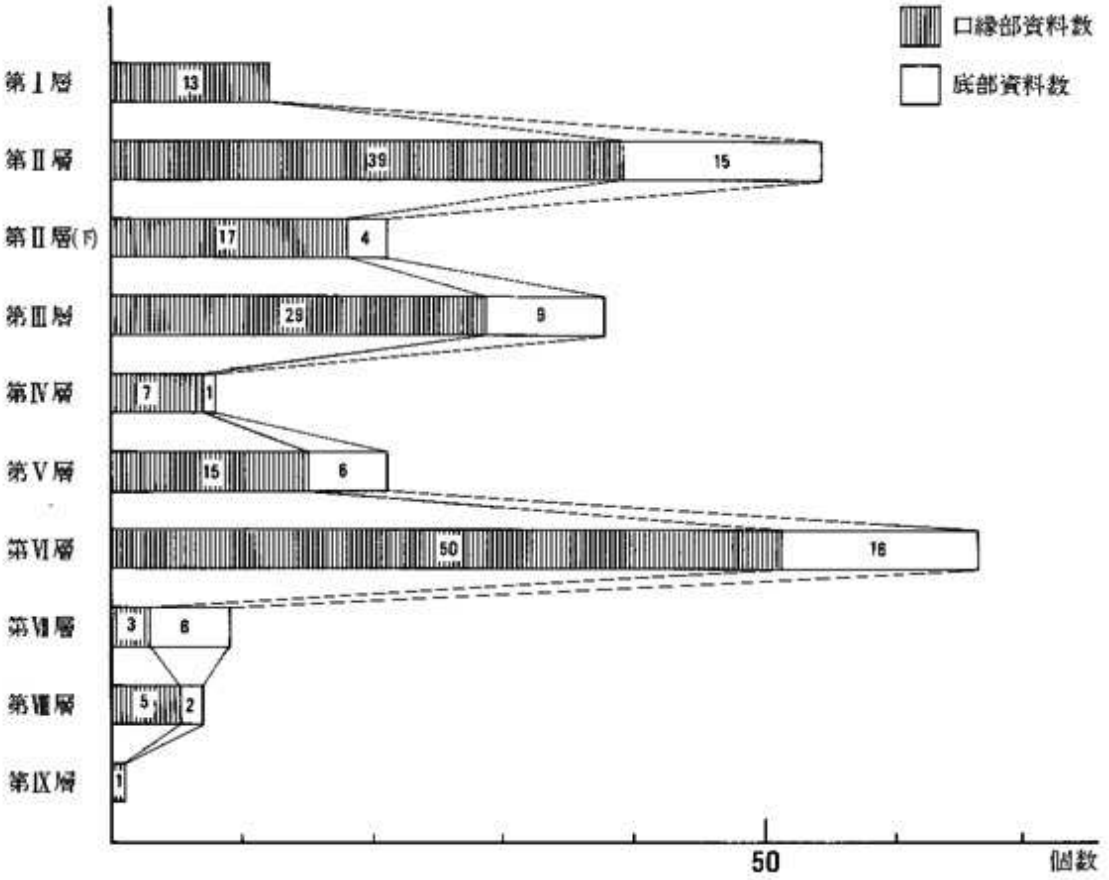
底部の調整手法　外面はハケ、あるいはハケ後ケズリ、ミガキ、ナデを施すものがある。内面はハケあるいはナデ調整をおこなう。内外面の他に底部裏面の調整がある。これは多様に富んでおり、木葉繊維痕やハケ、ミガキ、ケズリ、ナデがある。木葉繊維痕は底部成形時に伴うものである。

以上、甕の諸要素を形態及び調整面から分析をおこなった。次にこの諸要素の統計的処理を試みたい。

３．統計的処理

資料概観

今回の資料はＳＸ-101第Ⅰ層～第Ⅳ層までのもので、総数 239点を数える。資料は口縁部と底部に分かれるが、層位別に示したので第76図を参照されたい。ここに示した資料数は前述の基準に基づいている。口縁部の資料は 180点で、底部の３倍ちかくある。口縁部から底部まである甕は第31図―44と第40図―70に掲載した２点のみであるから、完存品はない。口縁部と底部の割合はどの層においても同じようなものであるから資料的に一定の安定を保っていると考えてよかろう。ただ、この口縁部と底部の割合の数字が何を示しているかについては別次元の問題である。



第76図　ＳＸ-101 出土甕の層位別資料数分布図

層位的にみれば、上層の第Ⅱ・Ⅲ層、下層の第Ⅳ層に資料数のピークがみられる。これは甕に限らず、全器種についてもいえることで、これらの層に集中的に遺物の廃棄がおこなわれたことを物語っている。これは第14表にみる口縁部の残存率の高比率からもうかがえることで、これらの土層出土甕が良好な資料であることが明確である。ただ、土器の器面の保存状況は下層が粘土質である為、良好であるが、上層はやや器面の保存状況の悪いものが多くなる。これは資料的価値には何ら関係なく、土坑埋没過程とその後の土地環境条件に起因するもので、別の機会に論じたい。

甕の類型化

甕の全体的な形態はＡ～Ｇ形態の７つに分類されるが、これらにみられる調整手法は形態と強く結ばれたものもみうけられるが、外見上だけ似せたものもある。このような複雑な関係を整理するため、結論である甕の類型をまず、提示することにしたい。

大和型甕　この甕は従来より第Ⅱ様式の典型的な甕として認識されてきたものである。ここで

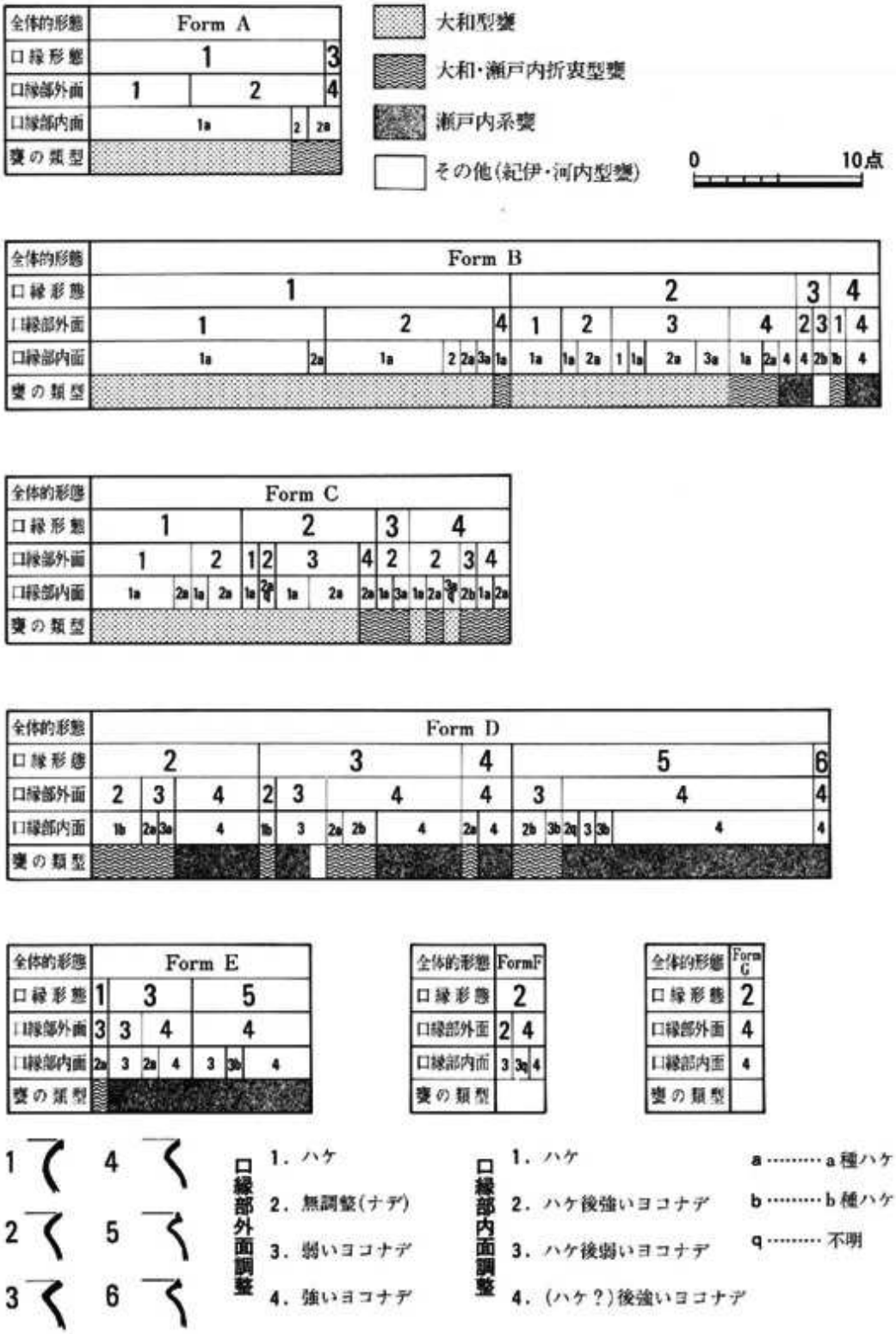
は、倒鐘形あるいはやや球形ちかくなる体部を有するもので口縁部と体部の屈曲がゆるやかなものをいう(A～C形態)。また、外面には縦位の、口縁内面には横位の粗いハケ手法を施す。ハケにおいてはその静止痕が不明瞭なものが多い。すなわち、第72図に示したa種ハケをさす。さらに、内面は丁寧なナデ調整が施され、その調整下にハケ目をみることは少ない。口縁端部はヘラあるいはハケ状工具による刻目を施す。色調は暗褐色を呈し、外面は厚く煤の付着するものが大半である。

瀬戸内系甕　この名称については仮のものとしておきたい。[1] この甕は体部上半に最大径をもつもので、口縁部は「く」の字状に強く外反する(D・E形態)。体部内外面はハケ調整が一般であるが、外面ではタタキやケズリ、ミガキを施すこともある。また、内面はハケ後にナデ調整をおこなうものも多いが、丁寧なナデではない。ハケは静止痕がみられるものが多い。口縁部は強いヨコナデ手法がみられ、ハネ上げ口縁や端部に面を有するものが多い。口縁端部に刻目を施すものは少ない。色調は淡褐色あるいは淡赤褐色を呈す。煤の付着は大和型に比べ少ない。大形品にはほとんど煤の付着はみられない。

大和・瀬戸内折衷型甕[2]　この類型の甕は従来、大和型の中でとらえられていたようであるが、本項ではその形態や手法から一つの大きな型式として考えたい。形態的にはA～E形態まで含まれており、バラエティに富んでいる。従来、大和型として認識されていたように、この甕の口縁部内面には大和型の甕にみられるような横位のハケがみられるのである。いま、この横位のハケを第72図にみるようにa種・b種に分類するならば、この甕に施されるものをb種として把握できる。さらにb種ヨコハケに注目し、a種ヨコハケを有する甕（大和型）と比較すると、1). 口縁部には強いヨコナデが施され、口縁端部に面をもつものもある。2). 刻目はもたないものもある。3). 体部外面はb種ハケが施され、下半にはケズリやミガキをおこなうものがある。4). 体部内面はハケが一般的で丁寧なナデを施すものが少ない。5). 甕の底部形態は第75図3にみるように底部の端部が突出し、周囲にナデを施すものがみられる。以上、掲げたような違いが大和型との間にみられる。この5点の成形・調整手法は瀬戸内系にみられるものである。甕の成形から考えるならば、この大和・瀬戸内接衷型甕は本来、瀬戸内系をベースに大和型の口縁部手法を似せたものと考えられる。したがって、このような名称をもって大和型あるいは瀬戸内型と比較検討したい。

甕の形態と類型の関係

A形態　A形態はほぼその要素が統一されている。口縁形態は下へ巻き込む形態のものが14点で大半を占めている。さらにこの口縁形態では口縁部外面に縦位のハケあるいはナデ（指頭圧）のみで占められている。また、口縁内面はa種ハケが12点みられ、それ以外の2点はa種ハケ後に強いヨコナデを施し、刻目をもたない資料である。この2点は大和・瀬戸内折衷型甕と認識できるものである。口縁内面にa種ハケのみを施す甕は大和型としてとらえられる。



第77図　SX-101出土甕の類型と各属性の関係

B形態　B形態は総数47点である。口縁部の形態はほぼ1・2形態が42点と主流を占める。この1・2形態の内・外面の調整は多様である。その中で口縁部外面に縦位のハケあるいは指頭痕を残すものが30点存在する。これは口縁内面にa種ハケを施すもので大和型甕としてとらえられる。口縁部外面に強いヨコナデを施すものもわずかにあり、これらの内面にはa種ハケがみられることから大和・瀬戸内折衷型甕として認識できる。

第16表　甕の形態と口縁の関係

		口縁形態							計
		1	2	3	4	5	6	不明	
全体的形態	A	14	0	1	0	0	0		15
	B	25	17	2	3	0	0	1	48
	C	9	8	2	6	0	0		25
	D	0	10	12	3	18	1	1	45
	E	1	0	5	0	7	0		13
	F	0	3	0	0	0	0		3
	G	0	1	0	0	0	0		1

次に口縁形態が3・4形態のものは5点である。これらの口縁部内面をみれば強いヨコナデを施すもの3点、b種ハケを施すもの2点で各々、瀬戸内系甕、大和・瀬戸内折衷型甕である。

C形態　C形態は25点で、B形態と同様の様相を示している。口縁形態が1形態9点、2形態8点、3形態2点、4形態6点である。これらの中で1・2形態の口縁外面は強いヨコナデを施すものは1点のみで、縦位のハケあるいは指頭圧痕を残すもので占められている。また、これらの内面はa種ハケが施されていることから、大和型甕と考えられる。また、3・4形態においては口縁内・外面に弱いヨコナデがみられる甕が主体をなしながらも、内面にはa種ハケが残存していることを考えると大和・瀬戸内折衷型甕としてとらえられる。

D形態　D形態はB形態に次ぐ量を有し、44点を数える。口縁形態は2～6形態までバラエティに富んでいるが、2形態（10点）、3形態（12点）、5形態（18点）が主流を占める。これらの形態を含め、口縁内・外面の調整にはヨコナデ手法が多くみられる。それらの中で強いヨコナデが内・外面に施されているものが25点を占め、この手法から瀬戸内系甕と考えられる。また、口縁部内面において、a・b種ハケを有するものも14点存在し、大和・瀬戸内折衷型甕としてとらえられるものである。ここにみられるa種ハケには強いヨコナデもみられることから、本来の大和型甕のハケとはやや異質なものであろう。

E形態　E形態は13点と量は少ない。口縁形態は3形態と5形態にほぼ占められており、また、内・外面もヨコナデ手法が多くみられる。この形態は瀬戸内系甕として認められる。

F形態・G形態　F形態は3点、G形態は1点で、甕全体からみれば、占める割合はわずかである。これらの口縁形態は2形態で円頭形である。口縁部の内・外面の手法にはヨコナデがみられる。しかし、体部の調整において、ケズリ手法やミガキが施されており、瀬戸内系甕としてとらえにくい。紀伊系の影響も考えられる。

以上、甕の各形態と類型を整理すると第17表のようになる。大和型甕はA・B・C形態にみられ、B形態が半数を占める。大和・瀬戸内折衷型甕はA～E形態まで広くみられるが、C・D形態に主体がみられる。瀬戸内系甕はB・D・E形態にみられ、D形態が最も多く、主体をなしている。

第17表　甕の形態と類型の関係

	大和型甕	大和・瀬戸内折衷型甕	瀬戸内系甕	その他	計
A	14	1	0	0	15
B	37	6	4	1	48
C	18	7	0	0	25
D	0	13	30	2	45
E	0	1	12	0	13
F	0	0	0	3	3
G	0	0	0	1	1
計	69	28	46	7	150

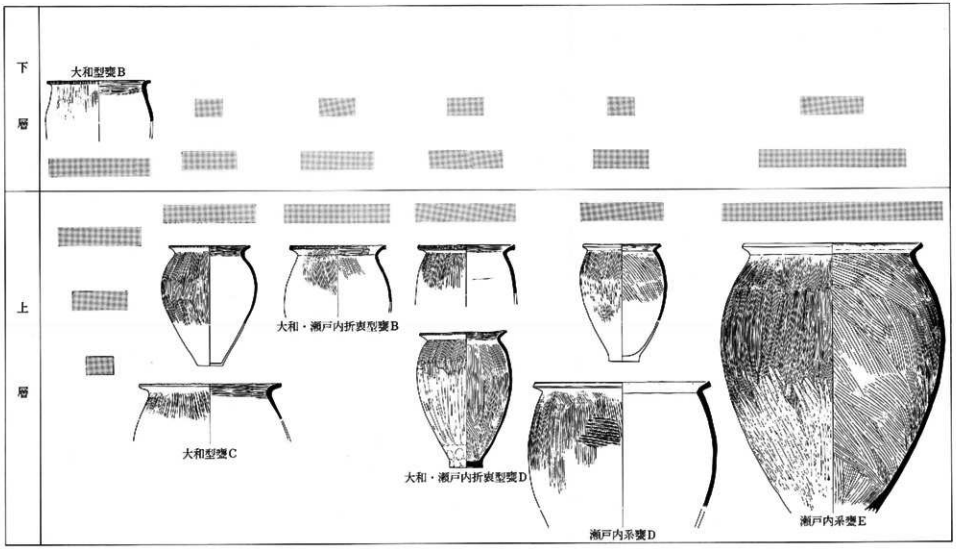
第18表　上・下層における甕の類型比率

		上層		下層	
		点数	%	点数	%
大和型甕	A	1	1	12	21
	B	16	17	21	37
	C	16	17	2	3
大和・瀬戸内折衷型甕	A	1	1	1	2
	B	4	4	1	2
	C	6	7	1	2
	D	11	12	2	3
	E	1	1	0	
瀬戸内系甕	B	2	2	2	3
	E	21	23	10	18
	D	9	10	3	5
その他の甕	B	2	2	0	
	D	1	1	0	
	F	2	2	1	2
	G	0		1	2
総計		93	100	57	100

甕の類型と層位的変化

SX-101の上層を上・下二層に分層し、大和型甕、大和・瀬戸内折衷型甕、瀬戸内系甕の各形式における層位的変化をみていくことにする。

大和型甕　上・下両層にA・B・C形式が存在するが、各形式は上・下層によってその占める割合に変化がみられる。下層においてはB形式が主流をなし、A形式も12点を数える。しかし、



第78図　ＳＸ-101 出土甕の類型とその消長

C形式はわずか2点で数量的に確保されていない。これに対し、上層においてはB・C形式が主流を占め、A形式はわずか1点を数えるのみである。このようなことから下層から上層への変化はA形式の減少、C形式の増加ととらえられるであろう。

大和・瀬戸内折衷型甕　本型式の甕は上・下層によって大きな変化がみられる。下層においてはA～D形式の全て存在するが、量的にはわずか1・2点で量的に保証されていない。これに対し、上層ではA～E形式まで存在し、B・C・D形式は量的にも確保されたものである。これらの中でD形式は11点を数え、主流を占めるに至っている。このように下層から上層への変化はB・C・D形式の増加と一定数量の確保としてとらえられる。

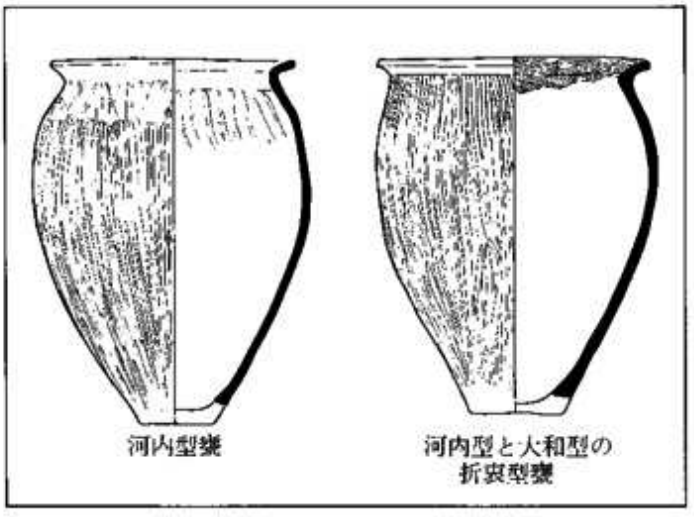
瀬戸内系甕　この型式の甕は上・下両層に存在しており、B・D・E形式がみられる。いずれの層においてもD形式が主体をなしており、一定量を有している。わずかに上層ではE形式の占める割合が高くなるようである。B形式は量的に保証されていない。このようなことから、上・下層の変化はE形式の増加としてとらえられるであろう。

以上、各型式の甕における形態の消長をたどってきたが、これらを大きく各型式間の消長としてみることにする。下層では大和型が過半数を占め、甕の主体となっている。瀬戸内系甕も26.3％と約四分の一の量を有している。これらに対し、大和・瀬戸内折衷型甕やその他の甕は一割にも満たない数量で、折衷型甕の存在はその出現期としてとらえることができる。上層における各型式の甕はほぼ同じ割合を有しており、下層と大きな変化がみられる。大和型甕の減少に対し、大和・瀬戸内折衷型甕や瀬戸内系甕の増加が明らかになる。これに大和型甕の衰退に対し、折衷型甕がこれにとってかわったものである。

4．まとめ

このように、SX-101における甕の分析と統計処理を通して、甕の消長をとらえてきた。これまで、大和型甕の認識は狭義あるいは広義に使われ、その所属時期はそれぞれによって大きく異なっていた。しかし、この項においては、大和型甕を第Ⅱ様式から継続する狭義の大和型甕として認識し、また、瀬戸内系甕を第Ⅳ様式以降にみられるタタキ、ケズリ、ヨコナデ手法を用いる一群の甕の中でとらえた。この両型式から除外された一群の甕が大和・瀬戸内折衷型甕である。これは広義の大和型と認識しえないでもないが、その全体的な成形手法は瀬戸内系であり、これをベースに口縁部の手法として大和型甕を取り入れたと考えられるのである。すなわち、大和型甕はA形態からC形態へとその形態を変化させながら減少方向に向かうのに対し、瀬戸内系甕はこれら二型式の甕を駆逐し、主流を占めるに至ると考えられる。このような甕の変化の中にあって大和・瀬戸内折衷型甕の存在は大和型から瀬戸内系への変換の一産物として認識できる。このような現象が大和型甕の分布域全体に言えることなのか、今後の課題となろう。

なお、SX-101上層においては河内型の甕（第79図―1）が出土している。この甕とともに、河内型甕をベースに大和型甕の要素をそなえた土器（第79図-2）も出土しており、注目される。



第79図　ＳＸ-101出土甕の一類型

これは大和型と大和・瀬戸内折衷型甕と対比できると考えられる。第79図にみるような甕の類型が今後、河内地方で認識されるかどうか期待されるところである。

注）①甕の地域性が問われている現在、"大和"型と対比してこの名称を使いたい。
②この名称についても適切でないと思われ、用語の濫用は避けたい。しかし、本項ではこのような類型の甕を認識することを目的とするため、あえて使用することとする。

V．まとめ

本年度は第20次調査の一件であったが、弥生前期から中世段階までの遺構・遺物を多く検出し、多大な成果をあげることができた。以下、遺構と遺物の項に分け、まとめてみたい。

(1) 遺　構

1．弥生時代前期段階でも古い段階に属する土坑ＳＫ-205が存在したことは、この調査地を含め、第14次調査地に広がる地区に弥生前期初期の遺構が散在しているようである。さらに、弥生前期を通じて土坑の集中がみられることから、ムラ西部にあたるこの地区を『西地区』として把握できる。この西地区で検出される前期の大形土坑は木製品貯蔵用の土坑としての性格があたえられるであろう。今回の調査においてもＳＫ-205，ＳＫ-215より直柄未成品、原材等出土している。今後、土坑の変遷とグルーピング、土坑と居住区との関係などをおさえていく必要があろう。

2．弥生時代中期の主要遺構は井戸である。ＳＸ-202，ＳＸ-101，ＳＫ-103はいずれも井戸と考えられるものであるが、施設や規模、時期は異なる。ＳＸ-202は砂層中につくられた井戸（集水施設）で、土坑内に底部を打ち欠いた大和型甕を埋置したものである。本遺跡でのこのような例は５例目であり、砂層中に作られるものとしては一般的になっていたのであろう。ＳＸ-101は本遺跡で最も大きな井戸であり、また、遺物も豊富に包蔵していた。ト骨などを多量出土したことを考えあわせると他にみられるような井戸とは性格が異なるかも知れない。ＳＫ-103は円筒状を呈する井戸で、ＳＸ-101とは形態的に異なり、円筒状の形態を有する井戸の中では古い時期のものであろう。

ＳＫ-107は壺に入ったト骨を伴った、長楕円形の深い土坑である。唐古・鍵遺跡ではこのような形態の土坑の未検出であり、性格づけが困難である。今後、内容物の検討と類例をまちたい。

3．弥生時代後期はＳＫ-104の井戸が主要遺構である。他にＳＫ-101があるが、後期初頭の土坑二基でそれ以降のものを検出していない。第14次調査地とは20m と離れておらず、後期の中・後葉が検出されなかったことは注目される。

4．古墳時代以降では、古墳時代後期の土坑と中世の大溝や小溝（ＳＤ-07）がある。中世大溝は館を取り囲む環濠であり、第８次・第16次につながる一連の大溝である。また、館内部の区画溝としての性格が考えられるＳＤ-07もある。ＳＤ-07によって区画されたトレンチ西半部分は一段高くなっており居住空間であっだことがうかがえるが、建物等の遺構は検出していない。しかし、第14次調査地で二棟検出しているものと一連の遺構群と考えられる。

(2) 遺　物

1．出土遺物の中で最も多いのが土器であるが、今回の調査でも一括資料としてとりあつかえる良好な資料を多く検出した。これらの中で質・量ともに良好ものとしてＳＫ-215，ＳＸ-101，

ＳＫ-104がある。これらは土坑資料であり、土器群（上器層）を形成しており一括性の高い遺物である。これを含め、土坑資料を現在の編年上に対比するならば、第Ⅰ様式中段階ＳＫ-205、新段階・ＳＫ-215，第Ⅰ様式末・ＳＫ-212、第Ⅲ様式古段階・ＳＸ-101下層→上層、ＳＫ-103、第Ⅴ様式初頭・ＳＫ-104となる。これまであまりよくわかっていなかった第Ⅰ様式末～第Ⅱ様式や第Ⅴ様式初頭はこれらの資料により、空白を埋めるものとなろう。

ＳＫ-215の資料は壺に貼り付け突帯を有する初期の段階である。貼り付け突帯をもつ土器は少なく、壺には削り出しの段や突帯を有するものが大半を占めている。甕や鉢の中には逆Ｌ字状口縁を有するものがあり、この段階に出現しているようである。また、遠賀川亜式として認定される壺の口縁部が出土しており、大和で初めての例となろう。

ＳＸ-101は第Ⅲ様式古段階の資料であるが、本遺構の甕の分析から大和型甕の残存や中期後半以降多数を占める甕（瀬戸内系甕）と大和型甕の接衷型甕（大和・瀬戸内接衷型甕）の存在が明らかになった。これによって大和における中期の甕の変遷図がスムーズに理解できるようになったと思われる。

ＳＫ-104は土坑の最上層より出土した土群である。広口壺は垂下する口縁部を有し、大形品が多い。長頸壺や無頸壺をセットとして含んでいる。短頸壺は広口壺に次いで多い器形である。ハケ調整から数点の同じ作者によると思われる短頸壺・甕がある。甕は中形品が多く、外面にケズリ調整をするものが主体となる。高杯は脚部裾が開かず、古い形態を有している。これらの土器群には第Ⅴ様式に特徴的な小形鉢がみられず、第Ⅴ様式の範疇ではとらえられないであろう。このような一群の土器は第13次調査ＳＤ-05中期溝、第19次調査ＳＤ-204第８層土器群より一時期ドるが、同じ様式内で考えてみることもできよう。すなわち、第Ⅳ様式と第Ⅴ様式の間に一様式設定することも可能であろう。

２．今回の調査で特に注目されるのが卜骨である。卜骨はＳＤ-201，ＳＫ-107，ＳＸ-101の各遺構から出土した。ＳＫ-107の卜骨はいわゆる壺Ｄと称される土器の内部に入れられていたものである。このような出土状況を示すものは例がなく、また、イノシシ若獣を使用している点でも注目されるものである。

ＳＸ-101の卜骨は７点という大量出土で、これらとともに完形土器群、海洋産貝、木製品、大四肢骨、植物遺体等が出土している。また、第13次調査ＳＤ-06 中期溝よりイノシシ下顎七体分とともに甕が出土したが、この甕が今回のＳＸ-101より出土した甕と接合した。これらはともに祭祀的様相が強く、一連の祭祀行為の結果、土坑と溝とに分けて廃棄がおこなわれた可能性がある。また、唐古ムラの一単位の範囲の大きさもこれから推察されるであろう。とにかく、SX-101の井戸は本遺跡で最大級の規模をほこる井戸で、豊富な祭祀的遺物が含まれていたことや近隣の前期や中期の土坑にも卜骨が廃棄されていたことから、本調査地周辺に祭祀を司る人物の存在が窺えるであろう。

３．ＳＫ-215は第Ⅰ様式の木製品貯蔵用の土坑であるが、土坑埋没過程で大量の遺物の出土を

みた。遺物の大半は土器であるが、この他に炭化籾塊、焼土塊もあり、これらで層が形成されていた。土器の中には焼けただれケロイド状を呈するものも数点含まれている。さらに焼土塊はスサを多く含むもので、面を有するものもあり壁土の可能性がある。このような状況から火災住居等に伴う焼土物の一括廃棄と思われる。また、第14次調査においても焼土塊、炭灰層を伴う土坑が検出されており、第14次・第20次調査地周辺で火災があったことが推察される。

以上、第20次調査における成果と今後の課題点を述べてきたが、遺構・遺物ともに多く、詳細については本報告に譲りたい。

唐古・鍵遺跡
図　版

図版1　第20次調査　遺構全景

a．遺跡空中写真（北から）

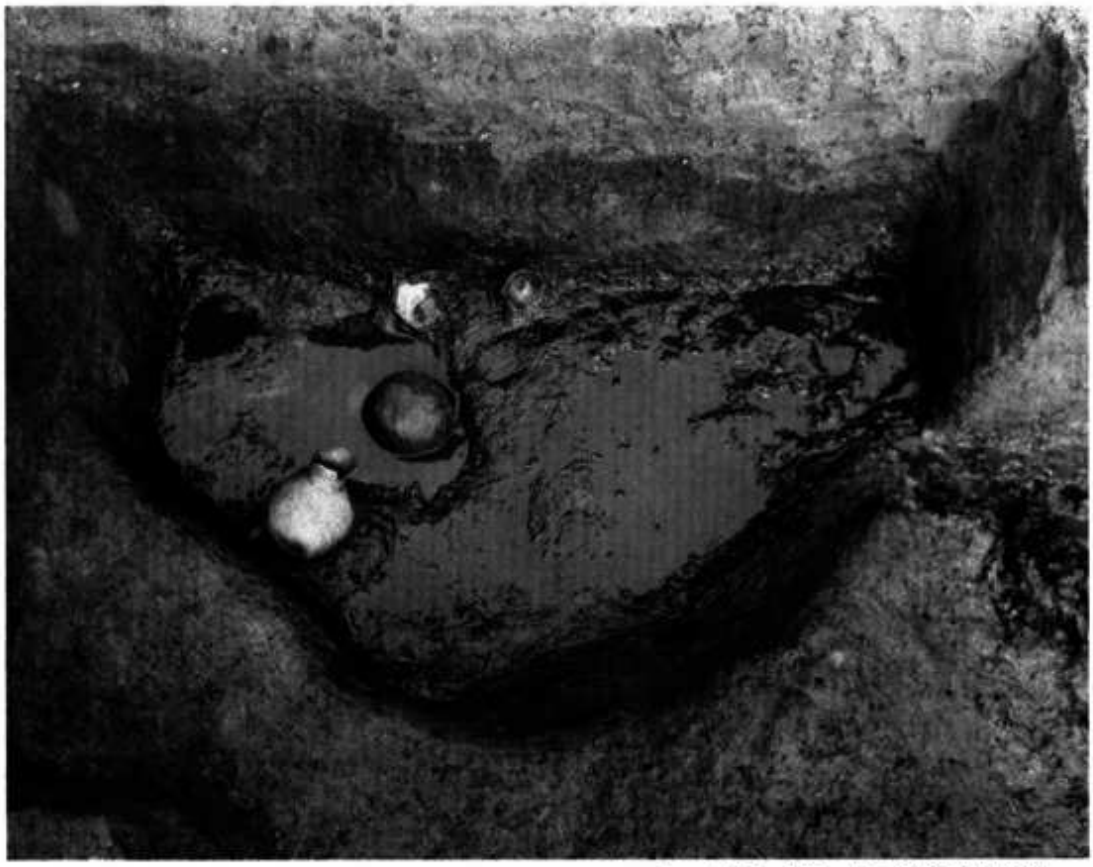
b．調査区全景（北から）

図版2　第20次調査　遺構

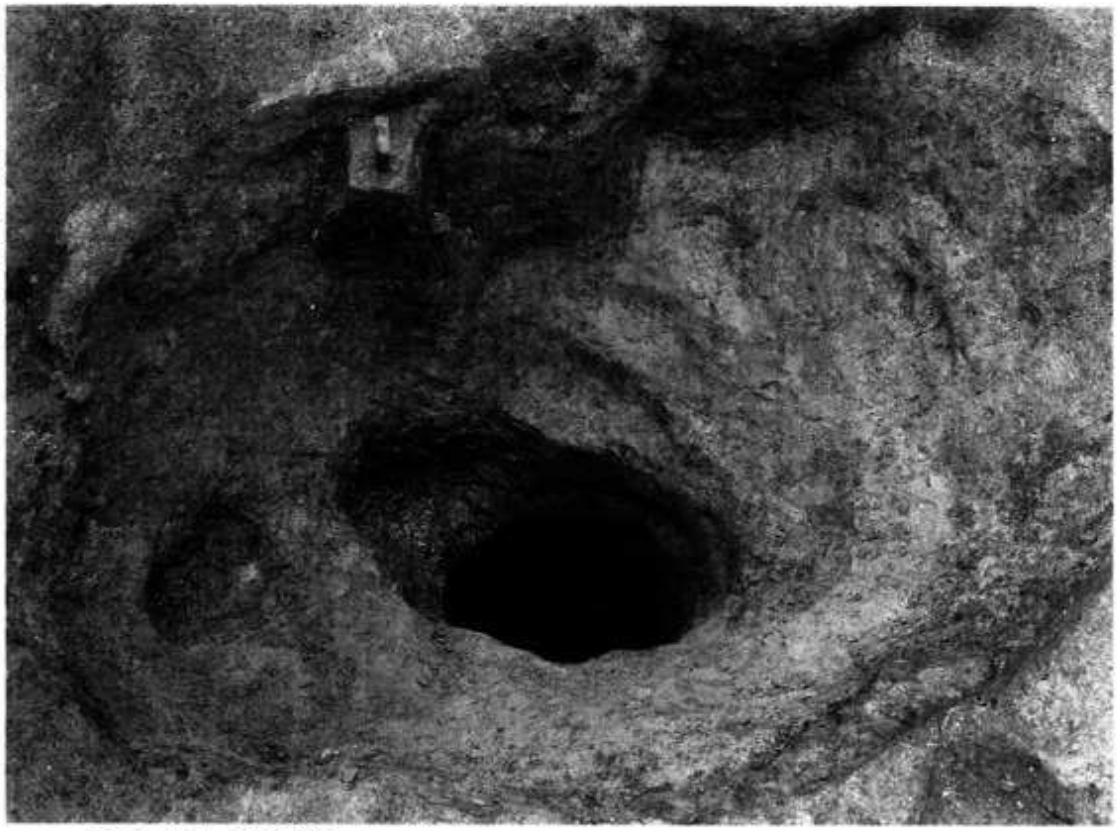
a．ＳＤ－07　完掘状況

b．中世大溝　完掘状況

a．ＳＤ－109完掘状況

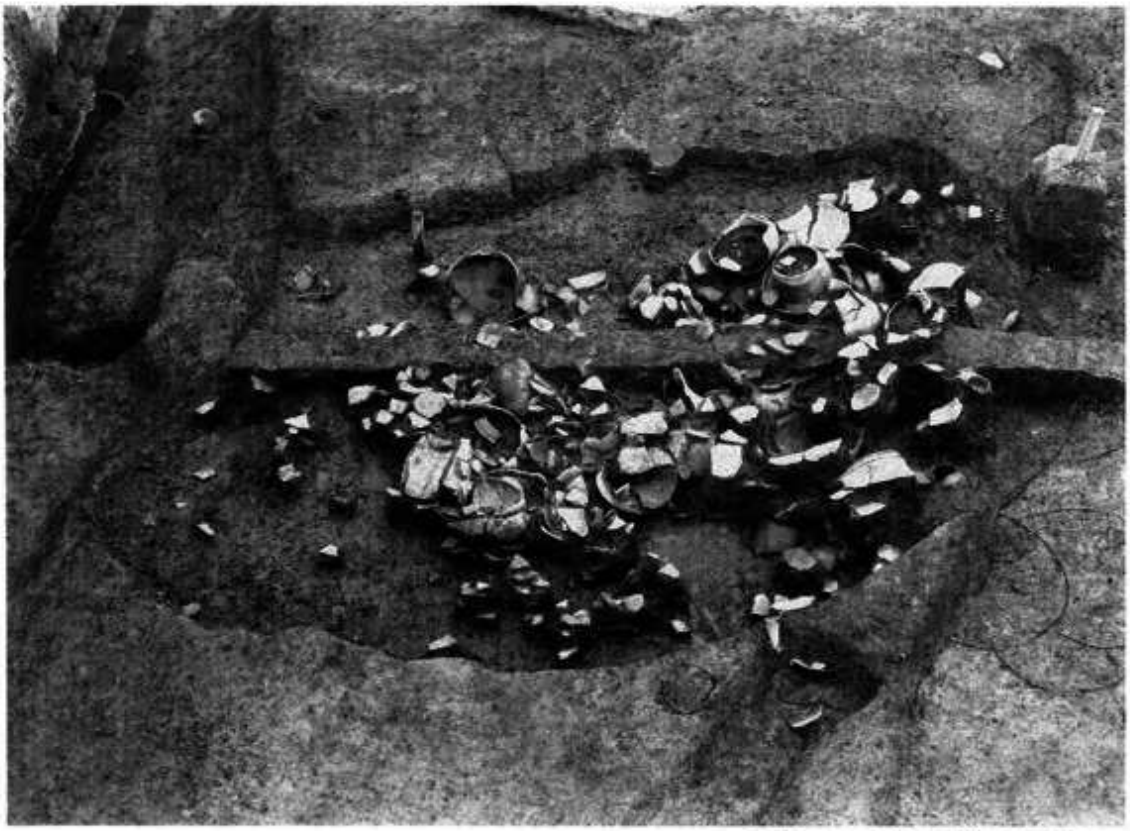


b．ＳＫ－101　上層遺物出土状況

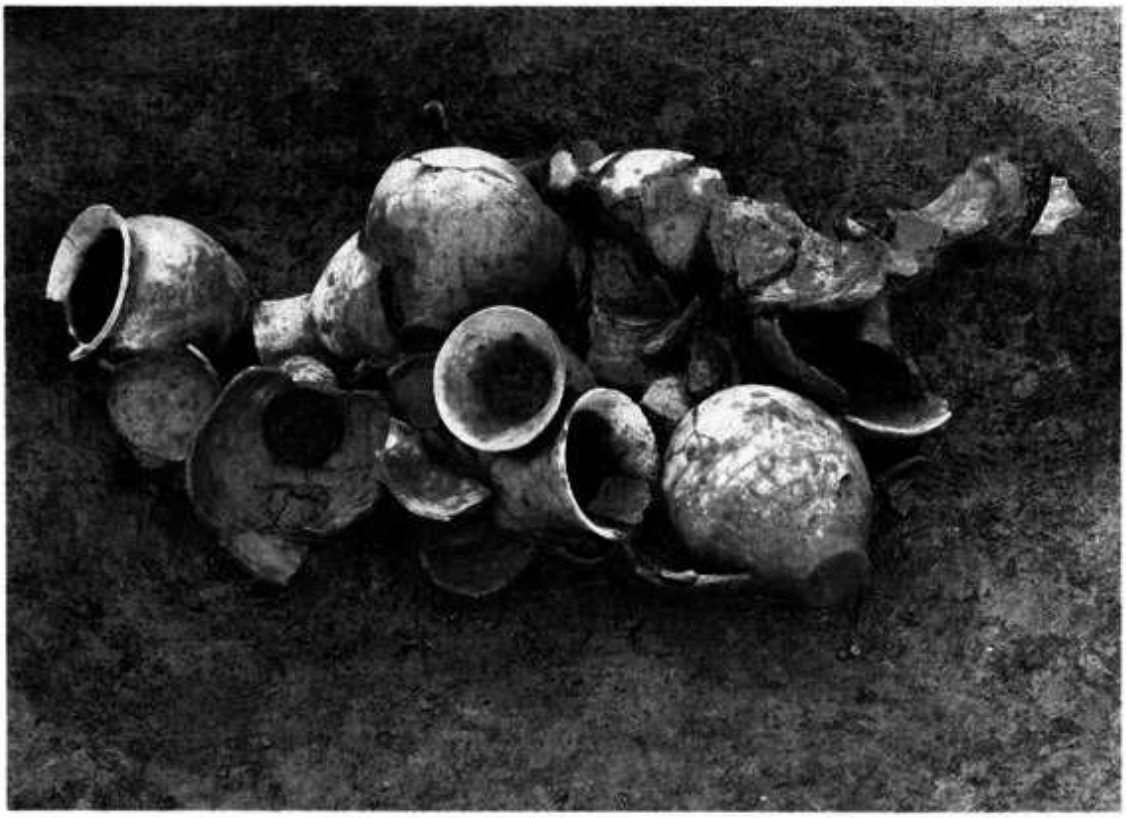


a．ＳＫ－104　完掘状況

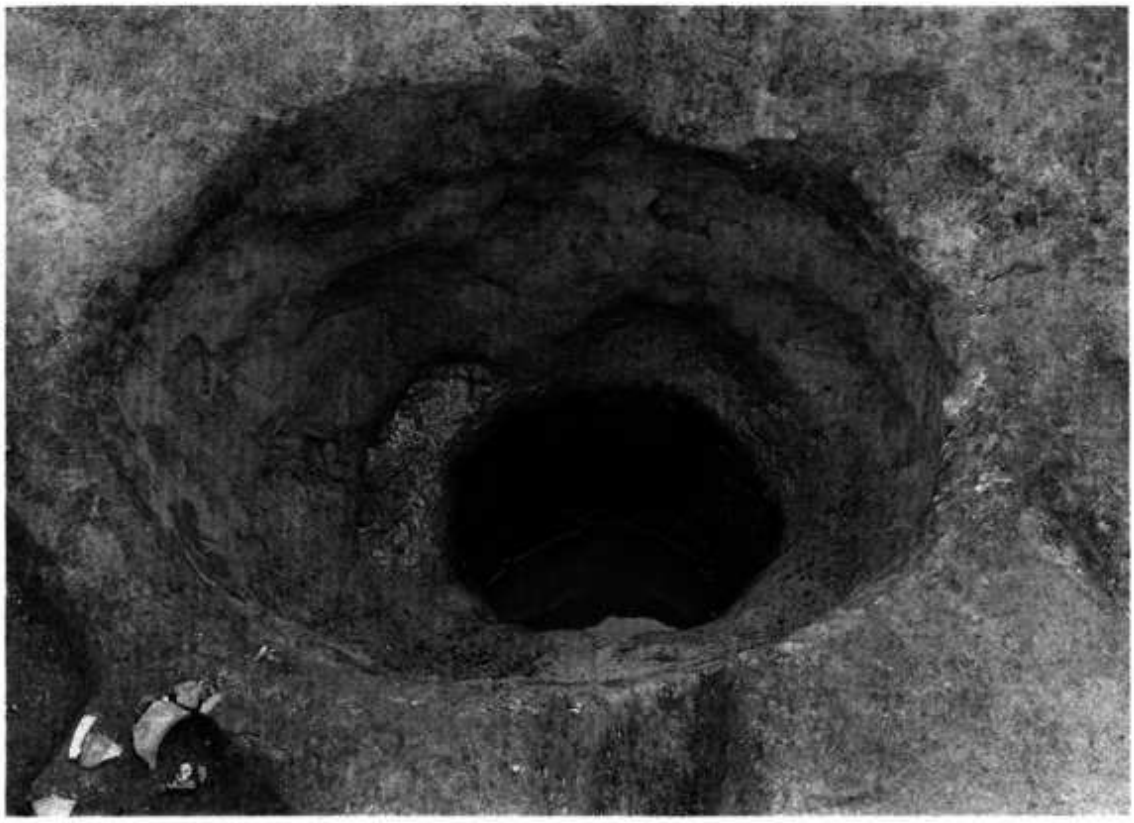
b．ＳＫ－104　中層遺物出土状況



a．ＳＫ－104　上層遺物出土状況



b．ＳＫ－104　上層下部遺物出土状況



a．ＳＫ－103　完掘状況

b．ＳＫ－103　中層遺物(水差形土器)出土状況

a．ＳＸ－101　完掘状況

b．ＳＸ－101　上層遺物出土状況

a．ＳＸ－101　上層遺物(高杯・ト骨)出土状況

b．ＳＸ－101　下層遺物(ト骨)出土状況

c．ＳＸ－101　下層遺物(ト骨)出土状況

a．ＳＸ－101　下層遺物出土状況

b．ＳＸ－101　下層遺物出土状況

a．ＳＫ－107　完掘状況

b．ＳＫ－107　下層遺物(ト骨)出土状況

c．ＳＫ－107　下層遺物(ト骨)出土状況近景